

平成23年度

酒田市・大学まちづくり政策形成事業
『とびしま未来プロジェクト事業』報告書



第五回 三島交流会 in 佐渡 (2011年10月16～17日)

平成24年 3月

東北公益文科大学

とびしま未来研究会

はじめに

本「とびしま未来プロジェクト」がスタートする契機となった「山形県離島振興推進調査」（筆者らが山形県より受託）の2007年度に実施されてから、はや5年が経過した。そして、その際に描いたビジョンの多くが、いま現実のものとなっていることに驚かされ、またうれしく思っている。

そこで、本年度のとびしま未来プロジェクトでは、2012年度に実施される山形県離島振興計画の見直しに先立ち、5年前に描いたビジョンを検証し、今後のビジョンを生み出すための方向をまとめることに主眼をおいた。なかでも、本プロジェクトにおいて今まで取り組みが十分でなかった高齢者福祉サービスの分野について「高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査」を実施し、その現状把握を行った。また「福祉」「移住・定住」「自然資源の保全と活用」をテーマに、本プロジェクトによる調査から、学生による三つの卒業論文が生まれたことも大変よろこばしく、本報告書の第三部に掲載した（そのうち二名が、飛島に縁のある学生であることも感慨に堪えない）。

折しも、2011年5月よりは、島の未来を考え・行動する「とびしま未来協議会」が新たに立ち上がり、まさに振興計画作成のための島民・島の応援団・行政間での合意形成とその後の事業推進の場が誕生したことは飛島の歴史上、記念すべきことである。本プロジェクトもその動きと緊密に連携しながら実施されている。

2001年度からの飛島クリーンアップ作戦を機に活発化していった、島民・島の応援団・行政の連携による公益的な民の力を活かした「内発的な島づくり」の動きが、10年を経てようやく形として目に見え始めてきたこの時期を最大限に活かし、今こそ気持ちを合わせ、島の将来の礎を築きべき時だと思う。

2012年2月

とびしま未来研究会メンバー一同

もくじ

はじめに

第一部 調査研究・事業実施の概要

1-1. 調査研究・事業実施の概要

1-3. とびしま未来研究会（調査・事業実施）メンバー一覧

第二部 本調査研究および事業からの提言

2-1. とびしまっふ（山形県離島振興推進調査における提言）の検証（呉）

2-2. 離島振興計画作成へ向けての島づくり将来ビジョンづくりへ向けて（呉）

— 離島振興を考える5つの視点からの提言 —

第三部 調査研究および事業実施の詳細

3-1. 高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査
（澤邊、小関）

3-2. 2011年度の飛島における共創事業報告（林）

第四部 本調査研究および事業にもとづく2011年度卒業論文

4-1. 進藤未夢「離島の福祉を考える — 山形県飛島におけるその現状と課題 —」

4-2. 讃岐彩華「山形県飛島の移住・定住促進を考える — 全国の離島から学べること
—」

4-3. 毛屋有貴「トビシマカンゾウの利用と保全 — 交流から生まれる島づくりと豊かな未来をめざして —」

第一部 調査研究・事業実施の概要

1-1. 調査研究・事業実施の概要

1-2. とびしま未来プロジェクト・調査・事業実施メンバー一覧

1-1. 調査研究・事業実施の概要

【名称】平成23年度大学まちづくり政策形成事業『とびしま未来プロジェクト事業』

【研究テーマ名】とびしま未来プロジェクト事業（研究調査および事業実施）

【事業目的・内容】

本事業は、9年目を迎える山形県離島振興計画、および2007年度実施の山形県離島振興推進調査時の提言の検証と、次期計画作成（平成25年度開始、24年度中策定）に向けた予備調査を目的とする。

本事業の実施にあたっては、2007年度の山形県離島振興推進調査（申請者らが受託実施「とびしまの未来を考える・2008年度版」＜本報告書、P.11＞を参照）で提案され、その後2008年度から本「とびしま未来プロジェクト事業」として実施してきた（1）島民がより豊かに住み続けるための施策、（2）U・Iターン者を誘致するための施策、（3）交流人口を増やすための施策、（4）自然環境保全・自然資源活用による島づくりのための施策、（5）合意形成の場づくりのための施策の5つの視点を重視し、活動および調査を実施する。

特に、従来、本事業においても取り組みが十分でなかった（1）と（5）から、ケアシステムの再構築と合意形成の場づくりに焦点を定めたい。

具体的には、

（1）これらの施策を実現させる中心的な場として、従来から本事業で提案をしてきた、島民・島の応援団・行政の共創による「とびしま未来協議会」が、平成23年5月に発足した。そこで、本プロジェクトでは、当協議会と緊密に連動して、調査研究、提言（離島振興施策、協議会のあり方等）を行い、島民の内発的な島づくりの意識の高揚と行政・島の応援団との共創活動のさらなる充実を図ることを大きな目的としている。

(2) 上記、離島振興推進調査では、島民が豊かに住み続けるための課題のひとつとして、福祉・医療の充実（ケアシステムの再構築）を提言した。高齢化が顕著に進む飛島においては高齢者分野の福祉・医療の充実が主たる課題であることは自明である。現在も、さまざまな主体の参画によってケアシステムが成り立っているわけだが、社会資源が少ないことや、本土からの隔絶性によるサービスへのアクセシビリティの問題などから、インフォーマル、特に家族機能による補完によって成立している部分が多い。

しかしながら、介護予備群となる現在の担い手を支える若い世代がいない飛島においては、システムを持続可能性に課題が残る。

そこで、「高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査」（活動・事業内容、活動を展開する上での課題を柱とした半構造化インタビューを、2009年から介護事業（短期入所、デイサービス）を展開している「和楽」を始めとして、酒田市健康福祉部、酒田市社会福祉協議会、酒田市地域包括支援センター「にいだ」、コミュニティ振興会、もちのきヘルパー会、民生委員・児童委員等）を実施し、福祉の向上を図る。これにより、高齢化に伴い、島内の共助機能が低下する中で、関係機関・団体と連携し、新たな介護・福祉システムの構築を目指す。

(3) さらに「天保そば・ごどいも収穫感謝祭」（2009年4月、国土交通省から島の宝100景に選定、なお2011年は荒天により中止）の充実化、三島交流会（10月、佐渡）への参加により、島民と島の応援団間、離島間連携を強化。都市民とのつながりだけでなく、島民同士の連携・学び合いにより、内発的地域づくりの意識の向上を図る。また、継続して、佐渡、粟島における自然資源を活用した島づくりの進捗状況、全国の先進事例について調査を行う。

(4) 「アイランダー2011」および「島づくりサミット2011」（国土交通省・日本離島センター主催、東京）の継続参加に加え、島民の参加を促す。また、仙山交流味祭り（仙台）に島民と共に参加し、HP・ブログでの発信とともに島の魅力を全国に発信する。

(5) これらの歴史的なイベントを映像により記録して、アーカイブとして後世に残す。

【実施体制】

東北公益文科大学（呉、澤邊、小関研究室）の教員、学部・大学院学生を中心に、島民、島の応援団、酒田市、山形県と協力連携し、実施する。

【本調査研究・事業に関連した調査・事業一覧】

- ・5月27日:「とびしま未来協議会」設立総会（第11回・飛鳥クリーンアップ作戦時）
- ・6月16日～20日:三島交流会打ち合わせ・粟島事例調査（新潟県粟島、第4回・粟島クリーンアップ作戦時）
- ・8月22日～24日、10月上旬、2月上旬:「高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査」実施（合わせて、自然資源を活かした島づくり、移住・定住、漁業に関する調査を合わせて実施）
- ・9月28日～29日:仙山交流味祭2011 in 仙台出展（出展団体名は「とびしま未来協議会」。教員・学生参加、ただし支出は別助成より。）
- ・10月16日・17日:第5回三島交流会参加・佐渡事例調査（新潟県佐渡）
- ・10月25日:天保そばごども収穫感謝祭（荒天のため中止）
- ・11月25日～27日:島づくりサミット2011、およびアイランダー2011 出展（池袋、出展団体は今年度から「とびしま未来協議会」。教員・学生参加、ただし支出は(財)離島センターからの助成により支出。）

1-2. とびしま未来研究会（調査・事業実施）メンバー一覧

<東北公益文科大学教員>

- ・ 呉 尚浩（准教授／全体統括、アイランダー2011、三島交流会等事業担当）
- ・ 澤邊 みさ子（准教授／高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査）
- ・ 小関 久恵（講師／高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査）

<東北公益文科大学学生>

○公益学部4年生

- ・ 伊藤 直樹
- ・ 後 友子
- ・ 毛屋 有貴
- ・ 小松 聖恵
- ・ 齊藤 春樹
- ・ 讃岐 彩華
- ・ 志賀 美和子
- ・ 島貫 祐磨
- ・ 進藤 未夢
- ・ 照井 大輔

○公益学部3年生

- ・ 青木 千紗
- ・ 石垣 博也
- ・ 小野 大地
- ・ 黒木 康平
- ・ 笹木 郁哉
- ・ 佐藤 山
- ・ 鈴木 朝日

<協力メンバー>

- ・ 伊藤真知子（東北公益文科大学・教授／とび魚だしプロジェクト代表）
- ・ 林久美子（とびしま未来プロジェクト事務局／NPOパートナーシップオフィス・スタッフ）

第二部 本調査研究および事業からの提言

2-1. とびしまっふ（山形県離島振興推進調査における提言）の検証

2-2. 離島振興計画作成へ向けての島づくり将来ビジョンづくりへ向けて（呉）

— 離島振興を考える5つの視点からの提言 —

2-1. とびしまっふ（山形県離島振興推進調査における提言）の検証

2007年度実施の山形県離島振興推進調査においては、図1「2008年時点のビジョン」の通り、離島振興を考える5つの視点から提言を行った。

そのビジョンにもとづき、また呼応する形で多くの提言が実現してきた。2007年に「三島交流会」がスタートすることにより、他島の島づくりの活性化の影響も受けてきたこともその大きな要因と思われる。

実現した主要なものとして、(5)合意形成の場づくりのための施策としては、2008年からの「しまの家の試験的開設」、2011年からの「とびしま未来協議会」（以下、協議会）の発足が、特筆すべきことである。

(2)U・Iターン者を誘致するための施策、(1)島民がより豊かに住み続けるための施策としては、2008年には島の介護を担う5人家族の移住と介護サービス和楽の誕生、それに伴う飛鳥小学校の再開（2011年からは飛鳥中学校の再開）が重要である。さらに(2)U・Iターン者を誘致するための施策としては、協議会を中心に現在「緑のふるさと協力隊」の誘致が進んでいる。

また、(4)自然環境保全・自然資源活用による島づくりのための施策としては、トビシマカンゾウ保全活動が島民の内発的な島づくり活動の象徴として定着し、島の応援団の発見した魅力の活用としては、農商工・大学連携による「とび魚出し」の商品化と販売が全国的に展開し、各種展示会の参加などにより島民への認知度も向上している。また(3)交流人口を増やすための施策としては、2011年において酒田市がボランティア訪島者へ助成を行う等を行っている。

以上、2007年時点において提案した多くのビジョンが、そのスタートを切っているわけだが、その継続・発展においては、まだまだ乗り越えるべき壁がある。また、産業・雇用の場の創出、漁業・観光業者後継者問題、総合体験学習の充実と活用など、未着手の分野もあり、その分野での先駆的施策の導入が望まれる。

以下、図2、図3において、現在スタートしている施策、今後のビジョンについて、わかりやすく図にまとめた。

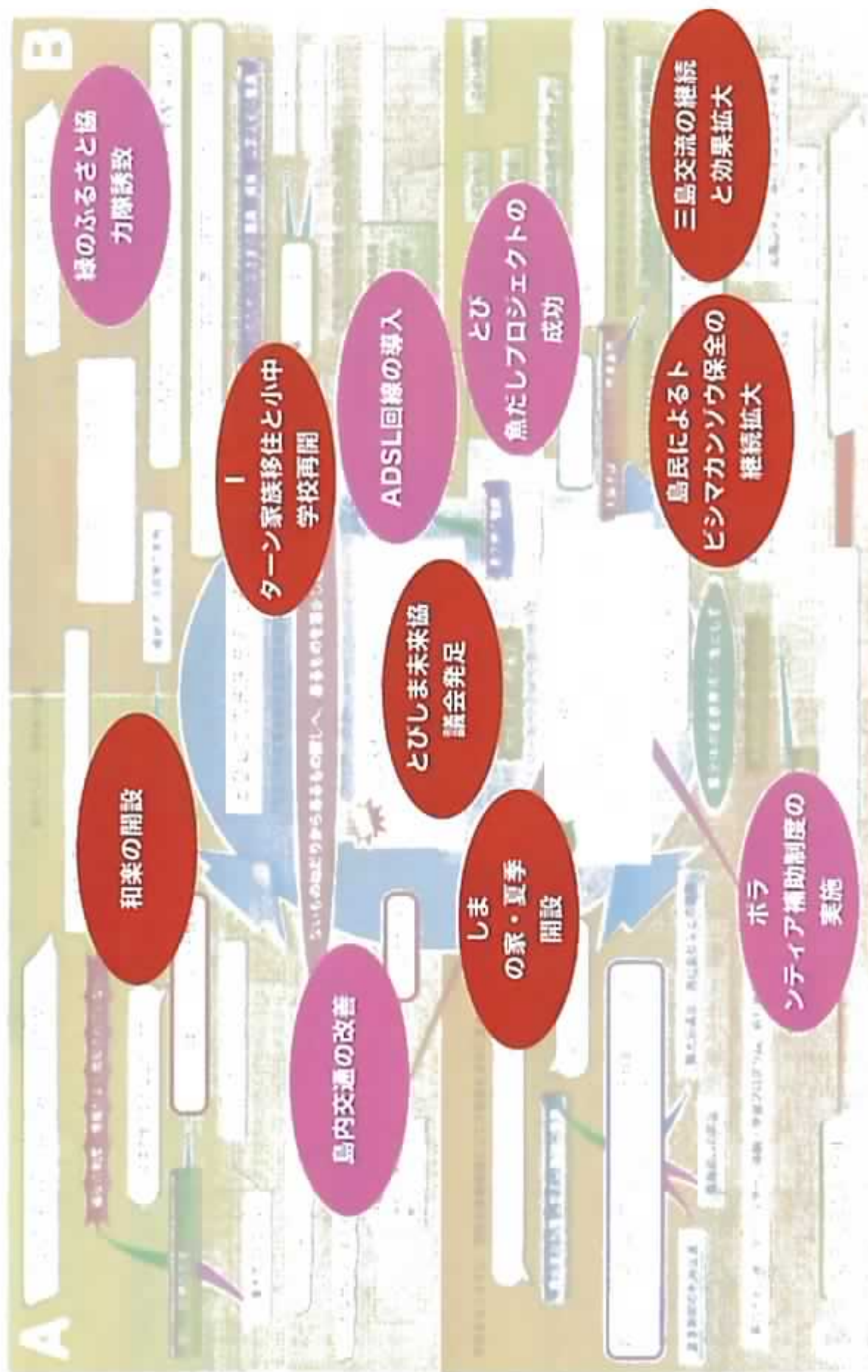


図2：ビジョンの実現

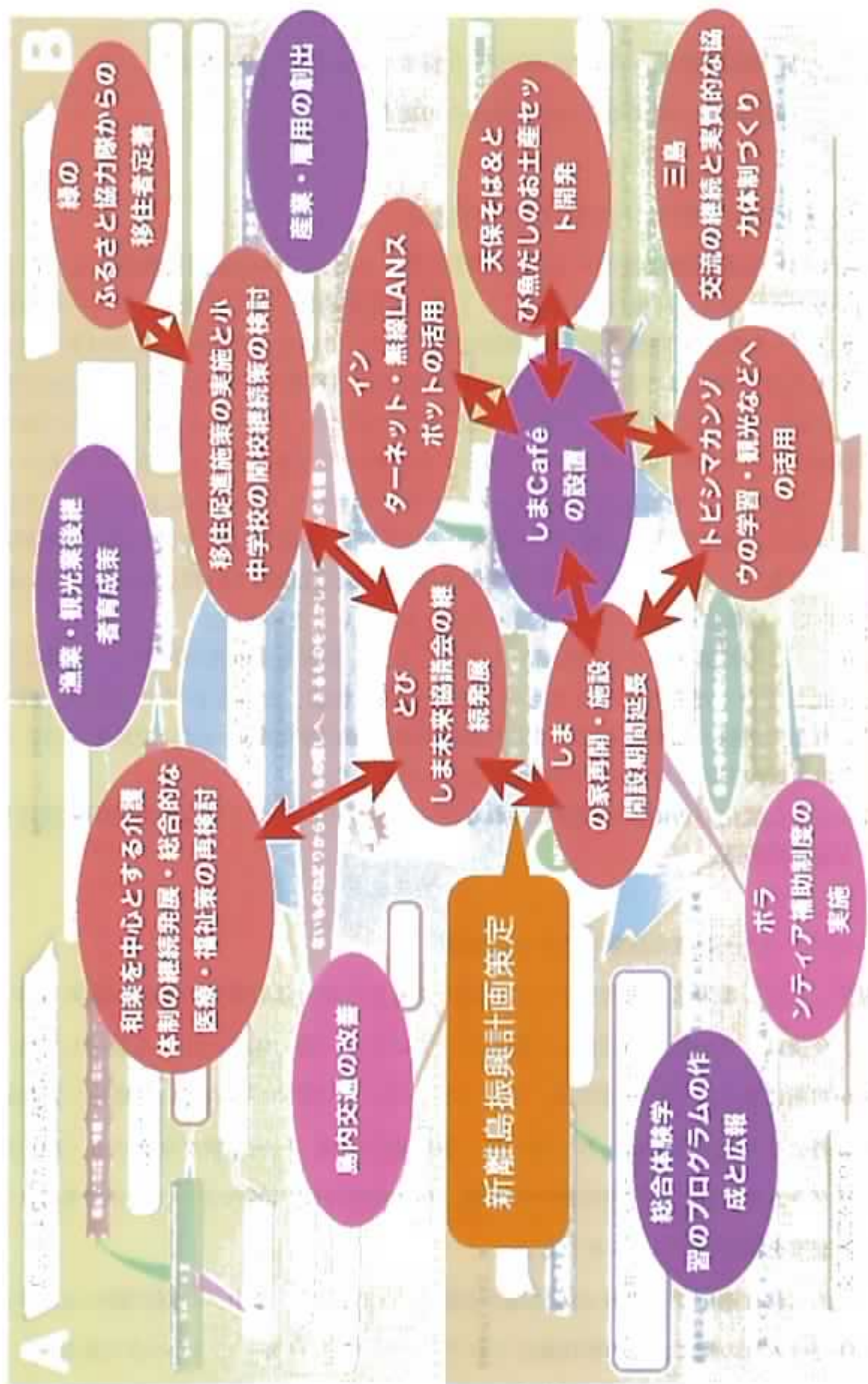


図3：今後のビジョン

2-1. 離島振興計画作成へ向けての島づくり将来ビジョンづくりへ向けて

— 離島振興を考える5つの視点からの提言 —

(1) 島民がより豊かに住み続けるための施策

飛島における高齢者福祉サービスにおける各サービス主体の役割を簡単にまとめると、次のようになる(詳細は3-1参照)。まず、情報集約はとびしま総合センターの役割で、センターが島民と関係機関、関係機関間をつないでいる。介護サービスのキーマンは和楽である。和楽は介護サービスの他に生活支援(移送サービスなど)を行っており、その面でも島民から頼りにされている。見守りについては、もともと地域のつながりが強いところなので住民同士が支えあっているが、それを補完しているのがもちの木ヘルパー会である。地域包括支援センターやケアマネージャーは主に公的サービスに担っているが、島民が酒田に来てサービスを受ける際の支援はこの2つによるところが大きい。このようにそれぞれのサービス提供主体がある程度役割を分担しながら、互いに協力しあい、高齢者を含む島民の介護・生活を支えているといえる。

しかし、この状態がいつまでも続くとは限らない。島民も高齢化が進むし、介護ニーズも変化していくだろう。支え手もいつまでも同じ状態、というわけでもない。例えば、これまで医療・保健面も支えてきた診療所の医師が今年度いっぱいまで島を去るということは島民の生活に少なからぬ影響を与えるであろう。

このような変化の可能性も考慮にいれながら、今後のケアシステムの再構築を検討していく必要がある。

(2) U・Iターン者を誘致するための施策

現在、とびしま未来協議会を中心に、緑のふるさと協力隊の導入の準備が進められている。今後は、その毎年の受け入れ継続だけではなく、協力隊員の中から継続して島へ定住が可能になるような環境整備、そのことに伴い、全国で行われている移住・定住施策を参考にその充実化をはかり(第三部・讃岐論文参照、移住体験プログラム・移住適応プログラムの作成、移住相談窓口の設置、飛島独自のHP作成など)、なかでもUターン者促進策を検討していくべきである。

全国的に移住適応プログラムの実施の必要性が叫ばれている中、今回の緑のふるさと協力隊受け入れの際に、その移住適応プログラムを開発、実施していくべきであろう。

(3) 交流人口を増やすための施策

2011年度は東日本大震災の影響で実施が中止となったが、2012年度以降もしまの家の継続的実施が望まれる。事業主体も従来のような大学やNPOではなく、協議会が関わる形での実施が肝要である。また、(5)で提案する「しまCafé」と連動してプランニングすることが効果的であろう。

(4) 自然環境保全・自然資源活用による島づくりのための施策

今まで、ごどいも、ごどいも焼酎、天保そば、とび魚だしめんつゆなど、島の応援団等が、島の自然資源の魅力を発見し、商品化等を行ってきた。それぞれに注目を浴び、知名度も向上しているが、島外者主導の個別の試みであり、島全体の取り組みにはなっていない。最近、アイランダーや仙山交流などで、「とび魚だしめんつゆ」を島民と共に販売するなどの経験を通じて、島民の中でも、島の「とび魚だしめんつゆ」との認識ができてきた。また、ごどいも、ごどいも焼酎、天保そばなども、天保そば&ごどいも収穫感謝祭において、島民も慣れ親しんでいることから、いっそうの島の顔となる商品、お土産品開発と販売促進を行っていくことが望まれる。

また、トビシマカンゾウは、島民の内発的な島づくり活動の象徴となっており、自然保全、食文化や暮らし、森林や漁業と関連させた学びもできることから、総合体験学習のメニューのなかに、積極的に「トビシマカンゾウ」をテーマとした学習プログラムを開発し、その活用を図っていくべきではないだろうか(第三部・毛屋論文参照)。

(5) 合意形成の場づくりのための施策

公的な合意形成の場としては、01年に発足した「とびしま未来協議会」を中心に、新たな離島振興計画策定に向けた内発的な話し合いを行っていくことが期待される。

ただし、フォーマル、インフォーマルな形ともに、テーマごとなどの小グループにより、より島民の声を柔軟に拾い上げる場づくりもあわせて推進していくことが重要である。

(6) 産業・雇用の場づくりのための施策

次期、離島振興計画策定に向けては、第6の視点として「産業・雇用の場づくりのための施策」を重要項目として検討したい。現在のところ、海洋深層水計画も頓挫し、新たな産業誘致などの可能性は低い。既存の漁業・観光業の後継者づくりに真剣に取り組むことがまず最も肝要なことだろう。また、「海の家」の閉鎖や、勝浦港におけるお土産店の減少など、観光客向けの既存施設の継続も問題である。

そこで、「しまCafé」などの新規の試みを行い「海の家」「お土産店」、島には少ない「カフェ」などの機能を合わせた場の創出が望まれる。また「天保そば&とび魚出しのお土産セット」などを実際に、訪島客が試食できる場としての機能も必要であろう。

第三部 調査研究および事業実施の詳細

3-1. 高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査

3-2. 2011年度の飛島における共創事業報告

3-1. 高齢者福祉サービスを提供する公的・民間福祉セクターの主体に関する調査

1. 調査目的

平成19年度山形県離島振興推進調査報告書において、筆者らは飛島の島民が豊かに住み続けるための課題のひとつとして、福祉・医療の充実（ケアシステムの再構築）を提言した。高齢化が顕著に進む飛島においては高齢者分野の福祉・医療の充実が主たる課題であることは自明である。

現在も、さまざまな主体の参画によってケアシステムが成り立っているが、社会資源が少ないことや、本土からの隔絶性によるサービスへのアクセシビリティの問題などから、インフォーマル、特に家族機能による補完によって成立している部分が多い。しかしながら、介護予備群となる現在の担い手を支える若い世代がいない飛島にあっては、システムの持続可能性に課題が残る。

島で暮らし続けたいという島民の願いに沿う、持続可能なケアシステムの再構築を検討する上では、各サービス供給主体（公的福祉セクター、民間福祉セクター、住民相互によるインフォーマルセクター等）による活動内容の実態を把握し、その役割や有効性、また抱える課題を明らかにすることが不可欠であると考えられる。

そこで、本調査においては、飛島において高齢者福祉サービスを供給している公的及び民間福祉セクターの主体を対象としてインタビュー調査を実施し、その活動内容や課題を把握することを目的とした。

2. 調査対象

飛島において高齢者福祉を担う公的及び民間福祉セクターの主体を対象とする。具体的には、2009年から介護事業（短期入所、デイサービス）を展開している「和楽」を始めとして、酒田市健康福祉部、酒田市社会福祉協議会、酒田市地域包括支援センター「にいだ」、コミュニティ振興会、もちのきヘルパー会、民生委員・児童委員等である。

3. 調査方法

調査対象である各主体に、高齢者福祉分野における活動（事業）内容、活動を展開する上での課題を柱として2.で示した調査協力者に半構造化インタビューを実施する。

4. 調査結果

本調査では、当初予定していた対象のうち、1) 介護サービス事業所「和楽」職員、2) もちの木ヘルパー会会員、3) 酒田市社会福祉協議会及び酒田市地域包括支援センター「にいだ」職員にご協力いただきインタビュー調査を実施した。本節では、インタビュー記録と記録から読み取れる各主体の活動内容や課題について記述する。以下、調査にご協力いただいた調査対象者について調査協力者と表記する。

1) 介護サービス事業所「和楽」職員へのインタビュー

日時：2011年8月22日 17:30～22:00

場所：介護サービス事業所「和楽」（とびしま総合センター内）

調査協力者：介護サービス事業所「和楽」職員2名

■ 和楽について

- ・平成21年度より事業開始。酒田市飛島高齢者短期入所運営事業の業務委託を受け、ショートステイ、デイサービスの事業と訪問介護をあわせて行っている。
- ・介護サービスの他、酒田市軽度生活援助事業、ボランティア移送なども行っている。
- ・サービス利用の申し込みはいつでも受けており、すぐに対応が可能である。
- ・事業開始時はショートステイの利用者は1年間で5人しかおらず、事業を継続していけるか不安を感じたこともあった。しかし、デイサービスの利用者は1年目から少しずつ増えていった（最高16人/月）。そのことが口コミで広がり、ショートステイの利用者も増えていった。
- ・現在は1年間のうち4日間しか休みをとれていない状況である。基本的には2人で運営しているため、労働状況としてはとても厳しいものがある。
- ・施設はとびしま総合センター（以下「センター」という。）併設となっている。市の施設であるセンターを拠点としているため、事業展開に難しい面もある。

■ 和楽ができる前

- ・介護保険制度が開始される前の平成11年度以降の飛島のショートステイ（短期入所）の利用人数は以下の表のとおりである：

短期入所の利用人数推移

11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
0人	1人	8人	10人	10人	4人	5人	5人	5人

- ・和楽ができる前は、ショートステイを利用する場合、利用の1週間前に申し込む必要があり、利用期間も最長1週間であった。申し込みがあった場合には酒田市から指定された事業所（島外）が2級ヘルパーと介護福祉士を飛島に派遣していた。島内の人にはわざわざ来てもらうのは申し訳ないと思っていたようだった。
- ・飛島の介護サービスを担当する事業所は年度末に「見積もり合わせ」（入札のようなもの）で選定されるが、事業所としては選定が年度末であることによって、もし決まったとしても職員のシフトを組みにくい、という問題があった。

- ・飛島内に事業所がつくられなかった理由として考えられるのは以下のとおりである：
 - 持病を持っている人はいない（飛島には歯科や外科などの専門医もおらず、通院の際は酒田に渡る。通院が多くなれば滞在時間がだんだんと長くなり、いずれ島を離れることになるという構造）。ゆえに、元気高齢者が多い、ということになる。
 - 家が酒田にある 等々
- ・飛島内での事業所開設について視察等に来る法人等もあったが、わざわざ施設をつくるまでには至らなかった。

■ 酒田市からの業務委託・支援

- ・委託料：
 - 1年目：前述したように、和楽が島内で事業を開始する以前は、島外（酒田市）の事業所から2人の介護従事者が派遣されていた。その派遣のために支払われていた金額と同額が委託料として支払われた（介護報酬込み）
 - 2年目：委託料は減額。サービス利用量（人数、利用日数）は増加
 - 3年目：酒田市「サービスの利用が増えたため、介護報酬のみでやってほしい」
- ・サービスの利用者も徐々に増えてきて、来年度（平成24年度）あたりから従事者をもう一人増やし、新たな事業の展開の可能性も、と考えていたが、「委託料」が減額される（または無くなる）とそれは難しくなる。
- ・酒田市は和楽を単なる介護事業者としてしか見ていない。和楽は一家で飛島に移住してきている。高齢化が進み、人口が減少している飛島の新規移住者（1ターン者）であると考えて、バックアップしていくということがあっても良いのではないか。それは飛島をバックアップすることにもつながるといえる。

■ 島内の見守りについて

- ・見守りが必要な高齢者などへの対応（例えば災害時避難の際に誰がどう対応するかなど）に懸念を感じている。
- ・福祉協力員も見守りをしているようだが、一番は家族・親戚や近所の見守りである。

■ 新しい事業の試み

- ・法木地区の加工場を借りて、新しい事業ができないかと考えている。平成23年10月から改装工事が始まる予定である。この加工場には「とびっこ出汁」の加工を行っていたところで、パッケージなどがそのまま残っている。8月30日には加茂水産高校の生徒が片付け、清掃を手伝ってくれることになっている。
- ・新しい事業として、要介護状態にある人で、あまり足は動かなくても、ある程度手は動く、という人たちに仕事をしてもらってはどうかと考えている。話しながらでも作業ができれば、それが生きがいにもなるし、自分はまだ働けるという自信が持てる。

また、機能訓練にもなる。その上、少しでも収入があればなお良いだろう。定年のない飛島ならではのものである。

➤ 徳島県勝浦郡上勝町の「いろどり」(葉っぱビジネス)のようなものがないかと考えている。

- ・この加工場でできた商品をいろいろなところでアピールしていきたい。まずは島内消費をメインにして、3、4つの成功例を作れば良いと考えている。例えば、いきいき体験スクールの時の食事に提供する、「とび魚だし」(東北公益文科大学、農商工連携)とセットで売ってもらい、島内のイベントで使ってもらい、などである。島内のイベントで使ってもらえれば、アイランダーでもアピールできる。

■ これからの飛島について

- ・緑のふるさと協力隊、とびしま未来協議会などいろいろなことが始まったが、行政が飛島の未来をどのように考えているのか、よく分からない。
- ・飛島のこれからの考える上で、Iターン者の支援は重要である。また、行政がその気になれば、市職員を飛島に派遣する際に子どもがいる人を家族で派遣することもできるはずだろう。そうすればU・Iターンでなくても定期的に島に人を入れることができる。
- ・不便なところが飛島のいいところだと思う。定期船が一日に2便のときは忙しいぐらいである。
- ・Iターン者には、最初はよくても、駄目だと思えば見放されるかもしれないという不安がある。そのこともあり、今後他の誰かがIターンで島に来たときに、新しい事業を始められる助けたりなどについて考えている。
- ・とびしま未来協議会ができて、いろいろな島民の声を拾っていくということだが、地区ごとの要望、一人ひとりの声を大切にすることが必要だと思う。

【活動内容と課題】

飛島の住民は、そのほとんどが酒田にも家があるか、家族(子どもなど)が酒田にいて、要介護度がある程度重くなれば、酒田で移住するのが一般的である。一方で、島民、特に現在の高齢者世代はできれば飛島にできるだけ長く住み続けたいという思いもあるそうである。和楽はその「できるだけ長く住み続けたい」という思いに応えようとしている。

和楽が飛島で介護事業を開始してから3年目である今年度(平成23年度)、サービスを利用する人や利用回数は着実に伸びてきている。これは、飛島の人口が高齢化していること、以前の介護サービスの利用しづらさ(1週間前の申し込み、介護従事者が島外から来ることなど)を考えると当然の結果だともいえる。

和楽が果たしている役割は介護サービスの提供だけではない。人口も減少し、高齢化率も高くなっている飛島では、以前にはあまり感じられなかった生活のさまざまな困り事が増えている。例えば港へ/港からの移動、荷物の運搬などである。港から離れた地区で車

をもたず、同居の家族もいない人にとって、これは大きな問題である。このような困り事にも和楽は対応している。

また、一家には学齢期の子どもがいて、それによって休校だった小学校・中学校が再開された。子どもがいることは、日には見えないが島にとって良いことだろう。

しかし、和楽には現在正規の職員は2人しかおらず、利用者が増えてきたことで業務量が増え、1年に4日間しか休みがとれないという状況である。労働環境は非常に厳しい。今後業務量が増えるようであれば職員を増やしていく必要も出てくるだろう。ただし、それには、今後も島内での介護サービス利用が増加するという見込みがないとできない。高齢化の状況を見ると要介護者が減少することは考えられないが、前述したように、これまでは要介護度が進めば島を離れるというのが一般的であり、その状況が変わらないのであればある程度のところでサービス利用は頭打ちであろう。ただし、和楽が島民に浸透してきたことで、島民の考え方も少しずつ変化してきていることも考えられる。どちらにしても、飛島の介護ニーズがどの程度あるかを把握する必要がある。結果によっては、行政にも適切な支援が望まれる。

2) もちの木ヘルパー会会員へのインタビュー□

日時：2011年8月23日（火）9:10～10:40

場所：調査協力者自宅

調査協力者：もちの木ヘルパー会代表（福祉協力員）

■ もちの木ヘルパー会について

- ・平成16年に島民10名ほどで講習を受けヘルパー3級を取得
- ・平成17年にもちの木ヘルパー会立ち上げ
- ・もちの木ヘルパー会活動内容
 - 冬期（12月～2月）の月1回の弁当づくりと配送
 - ヘルパー会のメンバーで都合の良い人が集まって料理する。（皆で集まり料理することが楽しい。そして食べる人も楽しいのが良い）
 - 地域包括支援センターが実施している介護予防講座（2ヶ月に1回くらい）への参加呼びかけや、参加者を開催場所まで連れて行く役割を担っている
 - ダンベル体操、運動、講演会（健康に関して）

■ 和楽の役割について

- ・和楽が飛島に来てくれてよかった。何でも頼めるという点で助かっている。
- ・地域の福祉（荷物運び、石油を詰める、雪かき...）について頼れる存在である。
- ・和楽に求めるもの
 - 生活が一番大変な人を助けてもらいたい（例えば、独居高齢者）

■ 地域で行っている福祉活動

- ・周りの住民への目配り、気配りが大切だと思っている。
- ・人と人とのつながりが大切
- ・福祉協力員（市社協事業）として見守り活動していたが、1人だったので和楽が来てくれて助かる。
- ・福祉協力員の役割としては、見守り活動しその報告をセンターに伝え対応してもらうこと。

■ 高齢者への支援のあり方

- ・70～80代の高齢者の中には“仕事をせず家にいるが元気な者”もいる。そういった住民の中には、ひきこもってしまう人もいる。老人クラブ（輪投げ、ダンベル体操等）のような活動をすることによって孤立から引き離すことができるのではないかと。老人クラブの活動があったときには、旅行などにも行った。
- ・“介護の必要ない高齢者”を目のあたる場所に引っ張り出さなければ、という思いでいる。とにかく“人が集まる場所”が欲しい。

■ 島民が島外へ出て行く現状

- ・若い人は生活のために島外へ出て行くが、自分としては住み慣れた土地にいたい。
- ・多くの島民が墓を酒田に移しており、正月、墓参りには酒田へ行くようになっている。→財産の1つ1つが酒田へ行ってしまっている。
- ・墓を移すとお盆に子供が来なくなるのでさびしくなる。

■ 今後期待していること（緑の協力隊、島民、飛島での暮らしに関して）

- ・年を取ると一人でがんばろうとするため、地域のつきあいがなくなってしまう。皆が周りとかかわりながら生きていけるといい。
- ・例えば、緑のふるさと協力隊が導入されれば、独居高齢者の様子を見ることを目的として家の片付けをしてもらうなど関わってもらいたい。人とのつながりをつくるような活動をして欲しい。
- ・高齢者の中には人を家に入れたくないから鍵をかけるといったこともあるので、そんな状況でも自分の親と思って関わってくれるような感覚の人に来てほしい。
- ・一方、島民には、協力隊（を含めた飛島に入ってくる人）に対して「一緒に暮らしてくれるんだ」という気持ちを持ってほしい。支え合って支えてもらって生きていきたい。
- ・飛島に移住する人には喜んで住んでもらえる島にしたい。
- ・“声をあげられない人の声”を聞いて助け合ってほしい。

【活動内容と課題】

当該調査協力者の関心事と実際の行動は“見守り”である。もちの木ヘルパー会の代表でもあるが、酒田市社会福祉協議会の新・草の根事業の見守りネットワーク事業における福祉協力員であり、その役割意識も高い。ただし、自分自身ができる活動の限界も感じているようであった。福祉協力員だから高齢者の見守りをするということではなく、全ての島民が周囲に関心を持って暮らしてほしい、それが福祉活動であり、高齢者が安心して暮らせるのだという意識が感じられる。

また、高齢者福祉の担い手として、支援する側も楽しみながら取り組むという姿勢が見られた。「支え合って生きていきたい」という言葉が象徴しているが、関わり合いながら時には支援者になり、時には支援を受ける側になるような意識を、島民が相互に共有できることを強く望んでいると推察される。

また、仕事をしていないが元気な高齢者への支援や関わりについて苦慮しているようであった。仕事の第一線から退いたことで閉じこもりがちになる高齢者について懸念しており、何とか関わりを持ち続けたい、そのためには何らかの集まれる場所・機会が必要であると考えているようだ。高齢者が集まる機会とは、例えば地域包括支援センターによる介護予防講座などもあるが、当該調査協力者が想定している集まりとは、飛島では活動が無くなってしまった老人クラブのようなものと考えられ、趣味活動、文化活動を通して他者と交流できる機会を指しているものと考えられる。参加者が楽しみながら活力を得られる活動は介護予防の観点からも重要であることは確かであり、今後、具体的な取り組みの検討が必要な点である。

さらに、和楽の取り組みが、要介護高齢者のみならず他の島民にとって重要な役割を担っていることもうかがえる。頼れる存在として飛島の住民の中に浸透しつつあるようだ。緑の協力隊受け入れに関する話題においても、移住者として和楽職員を受け入れたことによって具体的な前例ができ、島外からの移住者を受け入れる上での心構えなどを意識するようになったことは島民にとって大きな変化であったと考えられる。

2) もちの木ヘルパー会会員へのインタビュー

日時：2011年8月22日 13:00～14:00

場所：調査協力者自宅

調査協力者：もちの木ヘルパー会会員（介護サービス利用家族）

■ ヘルパーの資格取得と活動について

- ・子どもに勧められたことや、同居している母親のこともあり、何かの役に立つかもしれないと思いホームヘルパー2級の資格を取得した（飛島には2名2級取得者がいる）。
- ・以前勤めていた仕事の雇用保険の訓練給付を利用しヘルパーの資格を取った。
- ・和楽に頼まれて、時々手伝いに行っている。例えば、炊事や、和楽職員が外出してい

- る時の利用者の世話など。和楽では、手伝いの人を探しているようだ。
- ・協力者が手伝いに行けるのは秋冬の期間だけである（2月まで）。

■ 介護サービスの利用

- ・和楽ができて非常に助かっている。母親の認知症が重くなり、漁に出かけている間、1人で家に置いていくのは不安な一方、ヘルパーに家に来てもらうのは落ち着かないため。
- ・平成17年からショートステイサービスを利用している（1ヶ月20日間程度）
- ・これまでは漁の忙しい時だけ預けていたが、自分も年をとってきて少し大変になってきたため、これからは利用できる期間を目一杯使って、ショートステイを利用しようと考えている。
- ・母親はいつも介護サービスを受けに行くことを嫌がっていて、以前は預ける側の気持ち（家族として）の上でも大変だったが、現在は嫌がるのがいつものパターンとなっているのだと理解している。

【活動内容と課題】

当該調査協力者は、ヘルパー2級取得者であり高齢者福祉の担い手として期待されることもあるが、2級取得者の島民2名はいずれも別の仕事を持っており、ヘルパーとしての仕事に専念して携わることはできない状況にある。しかし、できる範囲で和楽の取り組みの補助的な役割を担っており、担い手として貴重な存在であることは確かである。

また、調査協力者は介護サービス利用者の家族としての側面を持っており、利用者としての思いが見て取れた。島内に常駐する和楽の存在があることで、家族として非常に助かっている様子がわかる。家族として介護サービスを利用することの葛藤もあるようだが、これまで全て家族介護に抱っていた負担を分散することができ、要介護者の「島で暮らしたい」という希望も実現しつつ、家族のウェルビーイングも目指せるようになったという意味で、島内の介護事業所の存在は大きいと考えられる。

3) 酒田市社会福祉協議会職員、地域包括支援センターにいた職員へのインタビュー

日時：2012年2月16日 13:30～15:00

場所：地域包括支援センターにいた

調査協力者：介護相談員

酒田市社会福祉協議会（居宅介護支援事業所）介護支援専門員2名

■ 地域包括支援センターにいたの活動

- ・要支援1、2の方にはケアマネージャーが関わる
- ・認定を受けていない人の状況把握は保健師が関わる。

➤ 年2回の地域ケア会議、介護予防講座（年7回のうち、にいだの割当のとき）

介護相談員は年4回くらい飛島に行く。

- ・地域ケア会議で島に行った際、とびしま総合センターから情報提供を受けて、必要な世帯に訪問する。また、酒田市健康福祉課の2次予防対象者リストを確認して訪問する。
- ・介護予防講座のときには1泊して、1日目の午後に講座を行い、翌日の午前中に訪問活動を行う。訪問は介護相談員と保健師とで分担する。訪問は1件1時間かかるとして1回で訪問できるのは平均3、4件である。他には訪問途中の道で少し話をしたり、介護予防講座で状況を把握したりする。和楽のデイサービスに来ている人と話をすることもある。
- ・介護予防講座は、もちの木ヘルパー会中心に30名くらい参加する。

■ 地域ケア会議

- ・メンバーは介護保険課、保健師、包括支援センター、もちの木ヘルパー、民生委員、コミュニティ振興会役員、診療所、和楽、センター（所長、職員）
- ・軸となっているのは、センターである。センターが各所につないでいる。住民も頼っている。

■ 酒田市社会福祉協議会（居宅介護支援事業所）の活動

- ・ケアマネージャーはモニタリングのため、月1回、日帰りで飛島を訪問する。
- ・現在島内で介護認定を受けている人は5名。和楽のショートステイ、デイサービスを利用している。
- ・一般的にはデイサービス利用のために要介護認定を受ける人が多いが、飛島では他のところでは介護認定を受ける程度の状況にある人でも、認定を受けずがんばっている。島の高齢者は働くのが大好きだからだろう。
- ・飛島では要介護4が最も高い。多くは要介護1、2である。

■ 和楽のこと

- ・定期船の中でも和楽の移送サービス、助かるなど日常会話で聞かれる。なくてはならない状態にある。和楽ができて、コミュニティの形が変わったと思う。郵便局しかできなかつた仕事なども、和楽に頼めばいいという文化になった。
- ・若い人が来て、学校も再開してという点で、活気ももたらしている。
- ・飛島での介護サービスを続けて利用していると、その先は酒田に行った方が良いのではという話になる（特にこれまでは）。せつかく飛島に和楽という介護事業所ができたので、ケアマネージャーとしては、島の人意識を変えていけるかが一つの課題である。

- ・和楽で行っているデイサービスとショートステイは酒田市からの委託事業であり、場所も市の施設であるとびしま総合センターを利用しているため、施設を自由に利用することが難しいようである。
- ・和楽も現在の（正規）職員 2 人体制ではギリギリの状態。サービス利用料増加が見込めればもうひとり雇うこともできるが、まだ踏み出せない状況。利用者も横ばいで進んでいるような感じ。次のステップの時期かもしれない。
- ・今後高齢化が進んで要介護者はもっと増えていく。どのようにサービス展開していけばいいかを考える必要がある。

■ 島での介護サービスのこと

- ・高齢者、要介護認定受けている人は口を揃えて飛島にいたいという。支援する側としても最期まで飛島で生活できるようにと思っていたのだが、近年、それも難しいと思うようになってきた。島民は酒田市にも家があることのもその理由。
- ・高齢になったら酒田に行かねばならないという習慣ができあがっている。ここ 3、40 年くらいで生活スタイルが変わってきた。子どもが高校に行くことで、酒田市に移る。酒田に移ってそのまま戻らない人も多い。祖父だけ残るということもある。また家族が戻らず、その祖父も漁師をやめて酒田に移ったりというケースもある。
 - ・島の人は和楽があることにようやく慣れてきている。和楽は介護サービス以外のサービスも提供していて、助かっていると感じている島民も少なくない。和楽がいつまで島にいるのかを心配する人たちもいる。
- ・このままだと酒田に移る島民がほとんどではないだろうか。新しい雇用が生まれにくい限り、島に新しい人が入ってくるのは難しい。

■ 認知症など介護度の高い人が島で暮らしていくこと

- ・「住み慣れた地域で」とはいうが、飛島に限らずどこでもそれを実現するのは難しい問題である。飛島は特に家屋同士の間が狭いため、火事にでもなればという心配をしている人は少なくない。
- ・和楽で独立した施設を作れば、とも考えるが、60 代などはいずれは酒田に来たいという人もいる。子どもたちがみな酒田にいるし、市内での生活を普通と考えている。
- ・島であったサービスは小規模多機能型ではないかと思う。

■ 酒田に移った高齢者の様子

- ・酒田と飛島の二重生活で酒田市での地域のつながりは薄いかもしれない。地域の集まりへの参加の機会を逃してしまうこともある。酒田には冬しかないということがあり、周りの人もそのように認識していることもある。
- ・酒田に島民が集まっているデイサービスが 1 か所ある。結束固い。それはそれは楽し

そうに過ごしている。週に 1 日では足りなくなっている。口コミで利用者が増えているので、もう 1 日増やそうかと思っている。

- ・ケアマネジャーとしても閉じこもり、孤立しそうだったら、そのデイサービスに参加させたりもする。酒田に来て「島に帰りたいたい」と言っていた人がいた。その人は認知症あるため心配で戻らせるわけにいかなかったが、デイサービスに参加してもらったらすごく楽しそうに過ごしている。
- ・高齢者は、ぎりぎりまで頑張るが、酒田に来ると、またそこからもうひとつ葛藤がある。できれば島にいられるようにという思いでいる。そうでない状況、それができない状況であれば、せめて酒田で快適に過ごせるようにもっていきたいと思っている。

■ ホームヘルパーの利用

- ・一人で島に帰った時だけヘルパーを利用している利用者があるが、「なぜ使わなければいけないのか」ヘルパーの役割を理解していない。周りも、自分たちもできそうなことをなぜヘルパーにやってもらうのかという意識もある。
- ・助け合いながらやっていた地域なので、本人の拒否も強い。自分でできる。という意識が強い。ホームヘルパーの利用はなかなか進まない。

■ 診療所

- ・診療所の医師は長年、飛島の医療・保健・介護を支えてきた。介護相談員、ケアマネジャーとしてもその思いや考え、やり方を尊重することは大事だと考えている。こちらが困ったときアドバイスや準備をして助けてくれる。しかし、3 月で辞めるので不安だ。島民で不穏になっている人もいる。

■ もきの木ヘルパー会の活動

- ・閉じこもり予防のために、訪問活動を盛んに行っている。どの地域でも同じだが近所づきあいが根底にあるところは、見守り体制もうまくいく。近所づきあいが希薄なところについては、もちの木ヘルパー会でも意識して関わりを持つようにしているようだ。
- ・配食サービスも前は地区ごとだったが、今は島横断的な活動になっている。飛島でそういった活動は珍しい（地区によって働き方も収入も異なっているため）。

■ 高齢者で閉じこもりがちな人への対応

- ・70 代の人たちが好きな人同士で集まって趣味活動をしたり、体操したりなど活発に活動している。お寺に集まってもらったりしている。
- ・閉じこもりがちな人は、介護予防講座をセンターでやっても出てこないのので、平成 23 年 6 月頃に、近所の単位でお茶飲み会を始めてみてはどうだろうか、という案が出て

きた（まだ実施はしていない）。もちろん普段、近所と付き合いをしないのにはそれなりの理由があるはずなので、そこにも配慮しながら、である。もし参加して楽しいと思えてもらえれば出てくるだろう。

- ・このようなお茶飲み会が嫌いな人もいるが、そのような人には、困ったときに助けを求めてもらうという体制は分かってもらう。ということを目的としている。また、周りにも理解しておいてもらう。

■ 今後について

- ・和楽について、島の方は、はじめは「何者だ」という感じだったが、今は頼もしい存在になっている。その理由の一つに“若者”であるということがある。和楽のおかげで安心して過ごせるようになった。
- ・若者が入れば（新しい価値観が入れば）、島も変わると思う。介護が必要になっても島に残ろうという考えも出てくるかもしれない。
- ・そのためには、雇用の創出が必要。和楽がある今だからこそ、雇用の問題にも取り組めるのではないか。
- ・飛島にいろいろな資源、特に「食」の資源がある（美味しいものがある）。例えば、岩のりのおにぎりやとび魚だしなど。そうした資源を活かして雇用につなげていけないだろうか。

【活動内容と課題】

包括支援センターやケアマネージャーは介護予防講座や訪問活動を通じて、高齢者の状況の把握につとめ、必要に応じてサービス提供者につなげている。また、そうした個人個人を対象にするだけでなく、地域住民や他の機関・団体等と連携しながら、地域の支え合いを支援している。地域の状況を最も客観的に把握しているといえるであろう。その上で、島民にとってより良い生活のスタイルはどのようなものかを考えている様子うかがえた。それは島で暮らす人たちに対してだけでなく、要介護状態になって島を離れて酒田で生活している人たちに対しても同様である。

ただ、今ある社会資源がなくなったらどうするか、という問題はある。人口も少なく、他の地域と離れている島にとって、替わりを用意するのは、他の地域よりも困難である。社会資源の開発も必要であろう。まだ実現していないが、閉じこもりがちな人に、近所の単位でお茶飲み会に誘ってみる、という試みは注目される。こうした取組みを少しずつ重ねていくことは、地域づくりという面でも意味のあることと考えられる。

4) 各サービス主体の役割と課題

飛島における高齢者福祉サービスにおける各サービス主体の役割を簡単にまとめると、

次のようになる。まず、情報集約はとびしま総合センターの役割で、センターが島民と関係機関、関係機関間をつないでいる。介護サービスのキーマンは和楽である。和楽は介護サービスの他に生活支援（移送サービスなど）を行っており、その面でも島民から頼りにされている。見守りについては、もともと地域のつながりが強いところなので住民同士が支えあっているが、それを補完しているのがもちの木ヘルパー会である。地域包括支援センターやケアマネージャーは主に公的サービスに担っているが、島民が酒田に来てサービスを受ける際の支援はこの2つによるところが大きい。このようにそれぞれのサービス提供主体がある程度役割を分担しながら、互いに協力しあい、高齢者を含む島民の介護・生活を支えているといえる。

しかし、この状態がいつまでも続くとは限らない。島民も高齢化が進むし、介護ニーズも変化していくだろう。支え手もいつまでも同じ状態、というわけでもない。例えば、これまで医療・保健面も支えてきた診療所の医師が今年度いっぱい島を去るということは島民の生活に少なからぬ影響を与えるであろう。

このような変化の可能性も考慮にいれながら、今後のケアシステムの再構築を検討していく必要がある。

II 酒田市飛島における住民ニーズ調査～高齢者福祉分野を中心として～（案）

1. 目的

飛島における高齢者福祉サービス供給システム構築を検討するにあたり、住民のサービスに関する意識や福祉に関するニーズについて把握することを目的とする。

2. 対象

酒田市飛島に居住する全住民

3. 方法

訪問聞き取り調査（配票留置法にする場合も回収時に聞き取りを行う）

4. 想定される質問項目

1) 属性

年齢、性別、家族構成、同居家族の有無、職業、介護サービスの利用の有無とその種類や頻度等

2) 福祉に関するニーズ（現在、あるいは今後発生すると思われるニーズ認識）

介護、高齢者見守り、移動手段（定期船、通院、買い物等）、日常生活上の困り事、サ

ロン活動、除雪、その他

3) 家族や地域との関係

関係の種類と頻度、ニーズ発生時（何か困り事がある場合）の相談相手（家族・親戚、近所の人、職場の人、民生委員、とびしま総合センターの職員、学校、診療所の医師・看護師、和楽の職員、地域包括支援センター職員、相談する人がいない）等

4) 要介護になった際の介護希望場所

飛島の自宅、島外の自宅（家族の家）、島外の施設、島内の介護施設等

5) 居住の形態

飛島以外の自宅の有無、季節による移動の有無等

6) 社会福祉サービス利用に関する意識

介護サービス事業所「和楽」開設に関する意識（サービス利用の意識変化、期待する役割等）、島外における介護サービス利用に関する意識等

3-2. 2011年度の飛島における共創事業報告

1. 「とびしま未来協議会」の設立

近年、離島の多くは過疎高齢化の影響により、島民だけでは解決できない多くの問題に悩まされており、山形県酒田市飛島も例外ではない。本県唯一の離島である酒田市飛島には、自然・文化・歴史など魅力ある資源が多数存在しており、飛島を拠点に島外の団体が個々に精力的に活動しているのが特徴である。一方で、飛島は人口の減少、高齢化の進展、観光客数の伸び悩みなど、多くの課題を抱えている。

そこで、島民、島の応援団（市民、NPO、大学など）、酒田市、庄内総合支庁により構成する、合意形成による時節に応じた事業展開を図ることを通じて、総合力により飛島地域の振興を図るものとし、平成23年5月27日に「とびしま未来協議会」が設立された。

実際の協議会では、これまで飛島では合意形成の場が弱体化していたこともあり協議会の場での島民の発言があるか心配されたが、多くの意見が出され、島民それぞれが島づくりへのアイデアを持っていることがわかった。



2. とびしま未来協議会平成23年度事業

2-1. 「仙山交流味祭inせんだい」への参加

平成23年度の協議会の事業として、9月28日（水）、29日（木）に宮城県仙台市の勾当台公園内にて開催された「仙山交流味祭inせんだい」に飛島島民5名、東北公益文科大学学生、酒田市職員、山形県職員が参加した。

仙山交流味祭inせんだいは、宮城県仙台市と山形県山形市との交流事業で宮城県内や山形県内のさまざまな地域の特産品を集めた物産市と伝統芸能などで地域のPRを行うイベントである。今回はとびしま未来協議会として参加し、飛島産のサザエのつぼ焼きをその場で調理し焼きたてを提供した。その他にも飛島の特産品であるトビウオの焼き干しと、それを原料とした「とび魚だしめんつゆ」（JA山形の農工運・山形県漁協・東北公益文科大学の連携による）を販



売した。これらは大変好評ですべて完売した。完売後は、飛島の自然や生活などの写真を使って手作りしたポスターや写真パネルなどを展示し、島民も直接訪れた客に説明をした。

飛島島民が直接PR活動を行うことはまれであったし、また県外で行うこともほとんど行われてこなかった。しかし、今回参加した島民からは、「直接お客さんと話してみても、外からの飛島のイメージがわかったし、良いイメージを持っていることがわかってよかった」「飛島を知っていて、また、実際に行ったことがあるという人がたくさんいたので驚いた」「もっと飛島に観光客から来てもらうためにどうしたらいいか考えていかなければならないと思った」「楽しくできた」など前向きな意見が多かった。また、島民の意見や様子から、自分たちの住む場所への誇りや島づくりへの意欲の高まりが感じられた。



また、島民からは商品の種類をもっと増やしてもよかったかもしれないという意見や、次回は仙台ではなく山形市など山形県内でもPR活動を行いたいとの意見もあった。今後協議会内でも話し合うべき課題である。



2-2.「アイランダー2011」への参加

11月26日、27日には、東京池袋サンシャインシティでの全国の離島の祭典である「アイランダー2011」にも島民2名が参加し、東北公益文科大学学生や酒田市職員とともに飛鳥をPRした。飛鳥のアイランダーへの参加は今回で3回目であるがとびしま未来協議会の事業としての参加は今回が初めてである。

今回アイランダーに参加した島民からは、自分たちのふるさとである飛鳥をもっと良くしていくためにもっとがんばりたいとの島づくりへの意欲ある言葉を聞くことができた。

今後の課題としては仙山交流味祭inせんだい同様いかににより多くの島民に事業への関心をもって参加してもらうかである。協議会の場で今回の様子などをプレゼンテーションし来年度の参加に向けて多くの島民に事業自体の理解をしてもらい、関心を持ってもらいたい。

また、飛鳥ブースは毎回手作りのポスターなどでPRがメインとなっており、特産品の販売などはあまり行っていないが、今回の島民参加者からはもっと特産品を販売したいという声もあったため来年度の参加に向けて計画していきたい。手作り感あふれるブースは毎年好評であるが、認知度の低い飛鳥を多くの人に知ってもらうために新しい趣向も考えていかなければならない。



2-3. 第5回三島交流会への参加

→ 第4部 毛屋有貴論文P.35を参照のこと

【2011年度とびしま未来協議会の活動】（※色付き部分が協議会事業）

5月18日～19日	3地区事前説明会
5月27日	とびしま未来協議会設立総会
5月28日	飛鳥クリーンアップ作戦
6月19日	粟島クリーンアップ作戦
7月2日	とび魚だしプロジェクト飛鳥合宿（公益大・農工連）
7月9日～10日	ツールドSAKATA in 飛鳥
7月12日～14日	粟島漁業研究会飛鳥勉強会
7月14日	飛鳥小物忌神社火合わせ神事
7月28日	山形県飛鳥活性化プロジェクト会議
7月29日～31日	寒河江青年会議所子ども飛鳥体験学習
7月30日～31日	庄内若者交流会in飛鳥
8月8日～9日	島の未来を語り合う飛鳥島民会議（第1回）
8月22日	第2回とびしま未来協議会
8月22日～24日	公益大飛鳥調査合宿
9月28日～29日	仙山交流味祭inせんだい
10月17日～18日	三島交流会
11月26日～27日	アイランダー2011
3月	第3回とびしま未来協議会（予定）

3. 緑のふるさと協力隊の導入に向けて

平成23年度のとびしま未来協議会の一番の議題は、「緑のふるさと協力隊」の導入に向けての受け入れ態勢づくりである。緑のふるさと協力隊事業は、特定非営利活動法人地球緑化センターが、都会の若者と過疎化の進む農山村を結び、学びを支える双方国の関係を築く目的で平成6年からスタートさせた事業である。農山村という魅力あふれるフィールドを若者に知ってもらう一方、農山村に住む人たちに若者の助けを借りて地域の魅力を再発見してもらうプログラムである。平成22年3月末に終了した第16期までに465人の若者が協力隊に参加し、そのうち4割以上もの若者が就職したり結婚したりして派遣先の農山村に定住している。

飛鳥の隣の島である新潟県岩船郡粟島では、平成21年から導入し毎年2名の協力隊が1年間島で暮らし、島民と交流しながら島づくりにも一役買っている。また、粟島では1年の派遣期間後も2名の隊員が島に残った。

飛鳥は、過疎高齢化により、漁業・観光業などの後継者がいないという問題の他にも、忙しいトビウオ漁の時期の人手不足や冬場の除雪作業が困難であるなどの現在の生活に直接かかわってくる急務の問題が多いため若者の手が必要である。また、若者が島で暮らすことは島民の長年の願いであったため期待が寄せられている。

4. 今後の課題と来年度事業計画

今後のとびしま未来協議会の課題は、来年度の緑のふるさと協力隊の導入に向けてのサポート体制づくりである。今年度同様、島民と外部の応援団、また、島民と協力隊との間に入りコーディネートしていかなければならない。

また、来年度は協議会2年目として直接飛鳥の産業発展に結びついていくような事業も計画中である。例としては、飛鳥独自のお土産品の開発などが挙げられる。以前から、飛鳥の特産品であるトビウオの焼き干しを使用した「とび魚だしめんつゆ」が山形農工連・山形県漁協・東北公益文科大学の連携により開発され、現在では知名度も高

くなっているが、実際に飛島でのお土産品としては手に入りにくい状態にある。また、飛島で種の保存のために栽培している天保そばも全国的に有名になっているが、飛島では年に一度島で行われるの天保そば・ごども収穫感謝祭でしか食べられないのが現状である。そこで、この二つの飛島の名産をセットにし、パッケージやマーケティング方法を考え飛島独自の土産品として開発したい。

さらに、島民も観光客も気軽に交流しながら集まれるカフェがあれば良いのではないかと意見もあり、2008年度から東北公益文科大学で実施した「しまの家」のような機能をもたせたものの設置を構想している。飛島の食材を使用した飲み物やスイーツを提供し、島の文化や歴史、自然などの魅力が伝わるようなギャラリー展示や内装にもこだわる。また、島民と島民、島民と観光客の交流の場となるようなサロンの機能も持たせたものにしたい。全国的にも島などのゆったりした農山村で、地元の食材を利用したカフェやレストランなどは需要が高いようである。

その他には、飛島グッズの作成なども構想中である。隣の新潟県の粟島では、粟島独自のモチーフを利用したTシャツや粟島の方言手ぬぐいなどを作成し販売している。飛島にはお土産となるようなグッズはない。過去にはポストカードの販売もあったが、現在では在庫もすくなくなっており、写真も古いものなので売れ域は伸び悩んでいるようである。全国の離島でも、各離島の独自のグッズは年々アーティストチックなものとなっており、若い観光客などに人気があるという。例えば、飛島の自然や生活の写真コンテストを開き、優秀者の作品はポストカードとして販売するなど一つの案として考えられるのではないだろうか。島民の中には写真を趣味としている方もおり発表の場ともなるし、また、島民と観光客の目線の違いなど島づくりにもつながっていく要素があると考えられる。また、Tシャツや手ぬぐいもトビウオやトビシマカンゾウなどの飛島独自のモチーフでPRを含めたアーティストチックな商品を開発したい。

このように、観光と漁業を結びつけ、また、新しい産業にもつながっていくようなしくみづくりを考えていきたい。また、島民の島づくりに対する意識と意欲を保つためにもニュースになるようなPR方法も模索したい。

第四部

本調査研究および事業 にもとづく2011年度卒業論文

1. 進藤未夢「離島の福祉を考える ― 山形県飛島におけるその現状と課題 ―」
2. 讃岐彩華「山形県飛島の移住・定住促進を考える ― 全国の離島から学べること ―」
3. 毛屋有貴「トビシマカンゾウの利用と保全 ― 交流から生まれる島づくりと豊かな未来をめざして ―」

※プレゼンテーション資料は、2012年2月11日（土）開催の「2011年度・呉尚浩研究室卒業論文報告会（於：さかた街なかキャンパス）」の報告で使用したもの。

平成 23 年度卒業論文

離島の福祉を考える

—山形県飛島におけるその現状と課題—

東北公益文科大学 公益学部 公益学科 4 年

呉 尚浩 准教授

C1081131 進藤 未夢

目次

はじめに	2
第1章 福祉の現状・課題	3
1-1 福祉の概要	3
1-1-1 福祉とは	3
1-1-2 福祉の現状	3
1-2 離島の福祉の現状・課題	5
1-3 本土の福祉の現状・課題	6
第2章 離島の福祉の取り組み	9
2-1 香川県高松市男木島	9
2-2 島根県隠岐郡知夫里島「なごみの里」	10
2-3 沖縄県伊平屋島「高齢者生活福祉センター・とらず園」	10
第3章 飛島の福祉	12
3-1 飛島の現状・課題	12
3-1-1 「支え手」の減少	14
3-1-2 介護サービスの課題	14
3-2 飛島の担い手	15
3-2-1 和楽	15
3-2-2 もちの木ヘルパー会	16
3-2-3 診療所	16
第4章 他島から学べること	18
第5章 結論－飛島の未来の福祉を考える	20
おわりに	21
参考・引用文献リスト	23

はじめに

山形県飛島は、山形県唯一の離島である。島内には勝浦、中村、法木の3つの集落があり、昭和25年4月に酒田市と合併、昭和38年7月国定公園に指定された。飛島の産業は、漁業を中心として、恵まれた環境を生かした観光のほか採種等の育種栽培も行われている。

筆者の父親が飛島出身で、小さい頃飛島に遊びに行っていた。そこで、飛島の自然に惹かれた。東北公益文科大学が飛島と関わりがあると知り、大学に入学し、呉尚浩先生と出会い、飛島の自然だけでなく島が抱えている問題について知ることができた。その問題の1つとして、飛島での介護に注目した。父方の祖母が酒田で介護を受け、酒田で亡くなった。会いに行くと必ず飛島の話をし、帰りたいと言っていた。何度か家から脱走したこともある。そんなこともあり、島根県隠岐郡知夫里島の「なごみの里」のビデオを呉先生の授業で見て、心に響いた。

離島では、自分の生まれた島での安らかな最期を迎えたいという願いを持った高齢者が多い。しかし、離島に福祉関係の施設が少なく、島に残りたいが介護や病気のために島を離れなければならない。このような問題を持っている離島は数多くある。そこで、山形県飛島の福祉について、他島から学べることはないか、どのような介護があればいいかなど、離島の福祉に目を向け、離島の福祉の現状・取り組み、今後の課題について調べたいと思う。

本論文の第1章では、福祉の概要と現状・課題について述べる。第2章では、3つの島（香川県高松市男木島、島根県隠岐郡知夫里島、沖縄県伊平屋島）の福祉の取り組みや事例について触れる。そして、第3章では、本論文の中心となる飛島の福祉について、インタビューや資料を基に書いている。第4章では、第2章を基に飛島でなにか学べるものがあるか考察し、第5章では、飛島の未来の福祉について提案する。

第1章 福祉の現状・課題

1-1 福祉の概要

1-1-1 福祉とは

語源的な意味の「福祉」は、「福」という語と「祉」という語から成り立つ熟語だ。国語辞典で「福祉」を引くと、「幸福。みちたりた生活環境。さいわい」などと書いてある（『国語大辞典』小学館）。語源的に言えば「福」も「祉」も「豊かさ」や「幸い」のことである。

慣用的な意味「福祉」は、日本語も英語も「人々にとっての幸福」ということがわかった。語源的な意味と、人々がその言葉を用いるときの意味が一致しないこともある。

語源的な意味と慣用的な意味の違いは、福祉が誰のためかということだ。語源的な意味の場合、福祉の対象者はなく、誰の幸福かということが問題となる。慣用的な意味の場合は、福祉の対象者は限定的である。

（参考：武川 2001，岡本 1995）

「福祉」というものを、豊かで幸せな状態だとすると、いろいろな事情のために自分の努力だけでは、豊かな生活を維持できなくなった市民に、社会がなんらかのしくみや約束事を用意して、困難に陥っている市民を援助するシステムが「社会福祉制度」、この制度にもとづいて提案される援助が「社会福祉サービス」である。そういう意味でいえば、医療は福祉を実現するひとつの手段だ、ということになる。

（引用：岡本 1995 p.52）

1-1-2 福祉の現状

昔、人は生まれ育った地域で一生を過ごしていた。200年前まで、病を得るということは死に直結することであり、乳幼児の死亡率の高さとあいまって、長生きはまれなことだった。

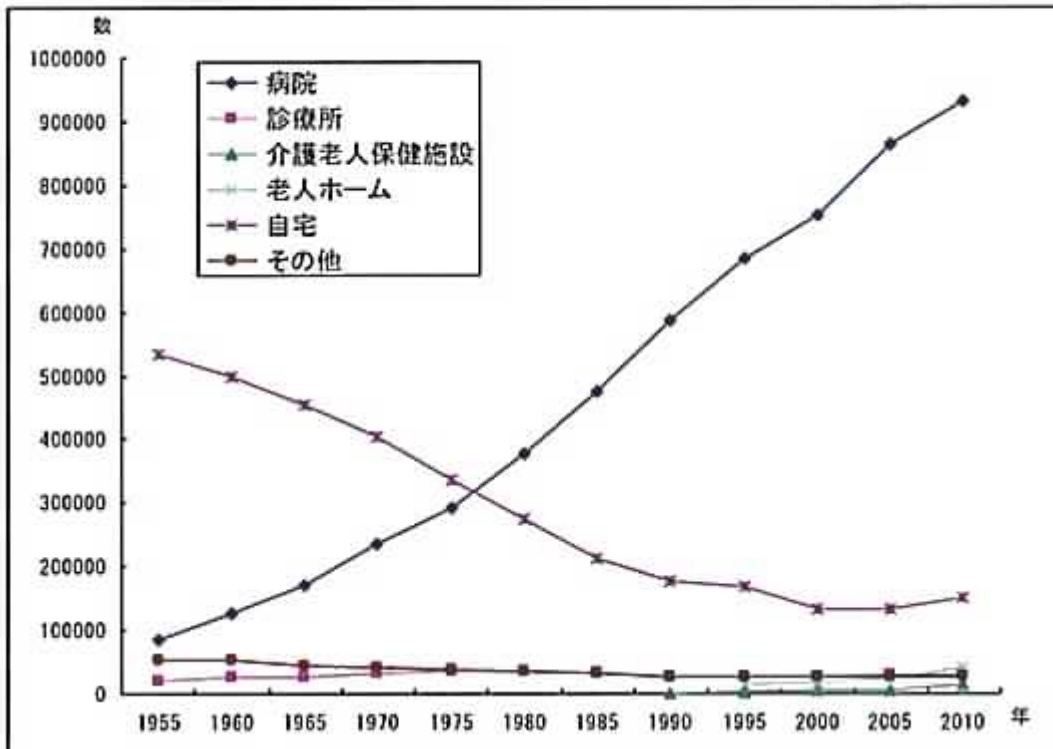
50年前まで、ほとんどの人は自宅で生まれ、老い、病んで死んでいった。図1でわかるように、人が人生の最期を迎える場所が自宅より病院が多くなるのは、1978年になってからだ。それまでは病院に入院するのはごく限られた一部の人だけで、むしろ経済的に豊かであればあるほど、自宅で療養する時代が長く続いていた。

（参考：笹岡 1997）

表 1 最期を迎える場所の表

年	病院	診療所	介護老人保健施設	老人ホーム	自宅	その他
1955	85086	21646			533098	53291
1960	128306	25941			499406	52155
1965	172091	27477			455081	45015
1970	234915	31949			403870	41800
1975	293352	34556			334980	39194
1980	376838	35102			274966	35865
1985	473691	32353			212763	33466
1990	587438	27968	351		177657	26889
1995	682943	27555	2080	14256	168756	26547
2000	751581	27087	4818	17807	133534	26824
2005	864338	28581	7346	23278	132702	27548
2010	931905	28869	15651	42099	150783	27704

図 1 最期を迎える場所



(表 1・図 1 参考:『人口動態調査』(平成 22 年) 厚生省をもとに筆者作成)

1-2 離島の福祉の現状・課題

(1) 離島の現状

日本の国土は、6,852 の島々により構成されている。このうち本州、北海道、四国、九州と沖縄本島を除いた 6,847 が離島とされる。このうち平成 17 年度現在、314 の有人離島に、69.2 万人が住んでいる。

離島振興対策実施地域の人口は、43.4 万人（平成 17 年度）で、平成 12 年度より、39 万人、8.2%の減少。7 割の離島が人口 500 人以下。65 歳以上の高齢者が 32.9%（全国 20.1%）。若者に魅力のある就業の機会が少ないので、高校卒業者で、島内に残るものは全体の 1 割程度。島の過疎化と高齢化が同時に進行している。対策実施地域の市町村が、合併の進展で、平成 15 年の 175 市町村から平成 19 年 4 月時点で 111 市町村に減少。「一部離島」が島数で 146 から 178 に増加、離島内に居住する職員数が減少するケースもあり。

昭和 40 年の国勢調査結果によると本土と離島地域の高齢化率の差はほとんどない。平成 12 年国勢調査結果によれば、高齢化は本土地域が 20.2%に対し、離島地域は 26.0%と 5.8%の差になっている。

（参考：長崎県 “第 10 章 離島地域の保健福祉対策”

<http://www.pref.nagasaki.jp/choju/fukushikeikaku/10.pdf>

及び、山口広文 2009)

(2) 福祉の現状

以下の文章は、国土交通省「離島振興法」を引用する。

・高齢者の福祉の増進

第十一条 国及び地方公共団体は、離島振興対策実施地域における高齢者の福祉の増進を図るため、老人福祉法（昭和三十八年法律第百三十三号）第五条の第二第三項に規定する便宜を供与し、あわせて高齢者の居住の用に供するための施設の整備等について適切な配慮をするものとする。

・高齢者の福祉その他の増進に関する基本的な事項（平成 19 年度までの評価）

高齢者が離島内で安心して生活できるよう、福祉については、通所介護、訪問介護をはじめ、高齢者の多様なニーズに配慮し、無料バス等の運行、生きがい活動支援等を行っているほか、NPO 法人がデイサービス事業の充実に努めている地域も見られる。

介護保険サービス施設がない離島では、本土の施設を利用する場合の航路補助や介護保険サービス事業者が島を訪れる際の運賃補助、また、島内でホームヘルパーを養成している事例が見られる。

一部の離島では、スポーツ大会等の実施により高齢者の健康増進を図ったり、地域住民のボランティアが集会所等を利用して閉じこもり予防、健康づくりや介護予防の取組を行っている。また、高齢者が社会的な活動に積極的に参加できるよう、公共施設・交通機関のバリアフリー化に併せて地域ボランティアのネットワークづくりを行っている事例も見られる。

児童福祉では、託児所、保育所の整備を行っているが、保育所に子育て支援センターを併設して子育てに関する電話相談を行っている事例もある。

(3) 福祉の課題

・今後の課題と施策の展開方向

離島住民の高齢化が進んでいるため、介護保険サービスの利用が増えることとなるが、離島内に介護施設等がない場合には、地域住民や高齢者同士で支えていかなければならず、このような取組に対する支援を検討する必要がある。

また、ボランティア活動をはじめ地域住民等が高齢者に対して健康づくり等の予防対策を実施しているところが増えているが、緊急時の対応に不安をもっている高齢者に対する支援体制を構築していく必要がある。

(引用：国土交通省，“離島振興法”

<http://www.mlit.go.jp/erd/chirit/pdf/follow-up2.pdf>, p.4.p.7)

1-3 本土の福祉の現状・課題

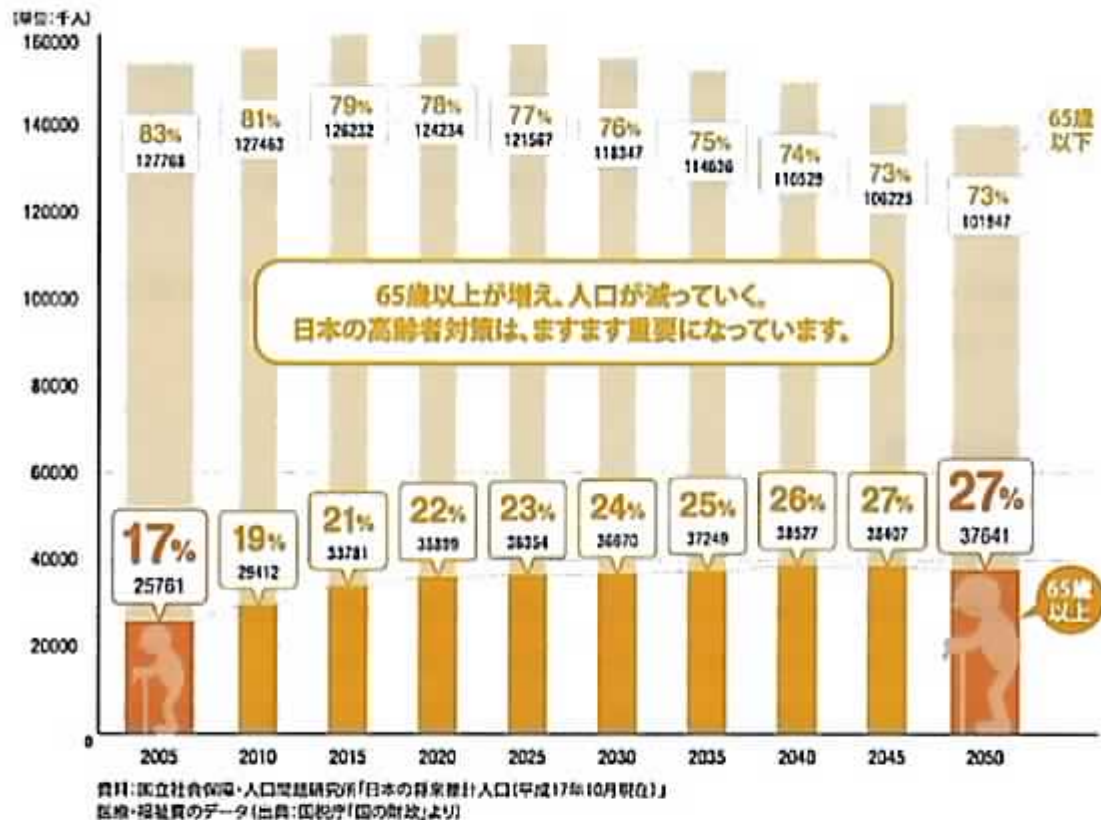
日本は、世界でも有数の高齢社会となっている。自分らしい生き方を楽しむお年寄りが多い一方で、寝たきりや認知症などで介護が必要なお年寄りも急増している。また、介護する側の状況も、核家族化や家族の高齢化など大きく変わりつつある。本人はもちろん、家族にとって大きな負担となつてのしかかつてきている介護の問題がある。

(1) 日本は超高齢社会になる

現在、5人に1人が65歳以上である。このままいけば、2015年、日本は4人に1人が65歳以上という超高齢社会になる。さまざまな問題を高齢社会が抱えているが、最優先しなければならないのは、お年寄りが安心して、健やかに日常生活をおくれるようサポ

トする国の医療・福祉対策である。

図 2 日本の将来推計人口



(出典: 大阪リハビリテーション専門学校 理学療法学科/夜間部 “医療・福祉の現状と課題”

<http://www.ocr.ac.jp/works/index.html>)

(2) 予防医療と健康増進が急務となっている

厚生労働省の2004年国民健康・栄養調査では、生活習慣病に進行する危険性の高いものが「メタボリック症候群(内臓脂肪症候群)」。成人の有病者1300万人、予備軍が1400万人と推計されている。

こうした生活習慣病対策は、国会の医療制度改革法案でも焦点のひとつとなっている。今後、予防と健康増進のためのスペシャリストが求められている。

(3) 医療・福祉に携わるリハビリテーションのスペシャリストが求められている

医療・福祉は、高齢者だけでなく、病気や怪我、精神障害などで入院・通院している人

に必要だ。日本の医療・福祉事業は欧米に比べて少なく、近年、国や地方自治体、病院や学校、福祉関連企業は必要な人材の育成・確保に乗り出した。今後の医療・福祉を多方面からサポートできる国家資格を持ったスペシャリストが求められている。

(参考：メディカル・ケア・サービス株式会社 “日本の福祉の現状”

<http://www.mcsg.co.jp/sub/genjyou.html>

及び、大阪リハビリテーション専門学校 理学療法学科/夜間部 “医療・福祉の現状と課題”

<http://www.ocr.ac.jp/works/index.html>)

第2章 離島の福祉の取り組み

2-1 香川県高松市男木島

瀬戸内海にある男木島（香川県高松市）は、人口 210 人（平成 22 年 10 月 1 日現在）、高齢化率は 6 割である。男木島には医者は常駐しておらず、高松市から週 4 日、医師が診察に来る。介護施設もなく、島民は重い病気にかかったり介護が必要ならば、島を出ていかなければならなかった。高松市や香川県に介護施設の必要性を訴えたが実現せず、民間事業者も採算が取れないという判断を下した。それでも、「島で生まれた人が島で最期を迎えるように」と考えた人が、島民らに呼びかけ、平成 17 年 8 月に特定非営利活動法人ハイ・フォロー・ステーションによるデイサービスセンター男木「湯遊の館」を立ち上げた。

金融機関から 3,500 万円を借り、廃屋になっていた木造 2 階建てのペンションを改造して通所介護¹を開始した。介護保険制度の適用を受けるには、サービスごとに定められた基準を満たして都道府県の指定を受ける必要があるが、離島などでは市町村の判断でその基準が緩和される。この仕組みを利用して、上記の施設は本来であれば基準を満たしていない施設であったが、短期入所の開始を認められた。

施設を利用しているのは 40 人弱である。「困った時に助けてくれるので、施設があるだけで気持ちが楽になる」。職員 10 人のうち島民が 6 人を占め、顔見知り同士できめ細かい介護をしている。6 人のうち 4 人はヘルパーの資格を取るため高松市に通い、受講料や船賃など約 10 万円を自己負担した。運営も軌道にのってきており、毎月人件費や運営費のほかに約 30 万円ずつを借金返済に充てることにもできるようになった。

男木島は、行政や事業者からは人口が少なく採算がとれないといわれながら、島民自らが NPO 法人を立ち上げ、自らの力で介護サービスを島民に提供するという形を実現したのである。

（参考：呉ほか 2008、トヨタ財団・NPO くまもと主催ワークショップ「島から学ぶ地域づくりの知恵～アイデアをアクションへ in 天草～」＜2011 年 3 月 6 日開催＞における NPO 法人ハイ・フォロー・ステーション・中條慎也理事長の講演録）

¹ 通所介護とは デイサービスの正式名称。自立した日常生活を営めるようにデイサービスセンター等に通い、入浴や食事の提供や機能訓練などを日帰り受ける老人介護の福祉サービスのこと。

2-2 島根県隠岐郡知夫里島「なごみの里」

島根県隠岐郡知夫里島は人口 700 人(平成 20 年 3 月 1 日現在)、在宅死亡率が 75%と高い。医師 1 人の診療所はあるが入院はできない。特別養護老人ホームがないため、要介護度が高くなれば島を離れなければならない。「島で死にたい」という高齢者のために、平成 14 年、小さな平屋を買い取って「なごみの里」を開いたのが、NPO 法人「なごみの里」の代表、柴田久美子さんである。柴田さんは島根県出雲市の出身で、40 歳の時に特別養護老人ホームでヘルパーになり、平成 10 年に島の社会福祉協議会のヘルパーに転じた。

「なごみの里」に現在入居している高齢者は 4 人である。全国から集まったスタッフやボランティア 10 人以上が 24 時間体制で生活の世話をしている。居室は畳の 3 部屋で自宅の雰囲気を保っている。公的な収入は介護保険制度による住宅給付だけで、その自己負担分と食費を合わせて月 6 万 5 千円は利用者が負担している。あとは柴田さんの講演料などで賄っている。

「なごみの里」は「自分が生まれ育った場所(島)で最期を迎えたい」という“当たり前の思い”を受け止め、最期まで人間らしく生きられるように介護する場である。(出典：朝日新聞、平成 19 年 1 月 20 日)

(参考：呉ほか 2008、柴田 2009)

2-3 沖縄県伊平屋島「高齢者生活福祉センター・とらず園」

沖縄県にある伊平屋島は人口約 1600 人、高齢化率 25% (年不明) の島である。豊かな自然と人情が溢れる島には、「高齢者生活福祉センター・とらず園」が設置されている。「高齢者生活福祉センター」とは、約 60 歳以上の高齢者を対象に、生活介護のほかに地域住民との交流などの機能を持たせた複合型施設である。制度創設当初は離島・過疎地域を中心に設置が進められ、県内には、伊平屋村に設置されている。現在では「生活支援ハウス」と呼ぶ場合が多い。

「とらず園」には居室部分として 20 人分が設置されており、内装や外観は小規模の特別養護老人ホームといったところである。この高齢者福祉センターの運営は村からの受託で社会福祉協議会が行っている。

とらず園には居室部分に加え、社協が設置主体の介護保険事業所(通所介護・訪問介護・居宅介護支援)が併設されており、入居者は介護保険の適用を受けて介護サービスを利用することができる。

とらず園の特徴は、介護保険事業の通所介護事業と「生きがい対応型ミニデイサービ

ス」を合同で実施している点にある。毎週火曜日～木曜日までの3日間は、伊平屋村内の各地域のミニデイサービスを同じ空間・同じ時間に行い、利用者や住民の健康維持と交流を図っている。

離島においては採算性や効率面の観点から民間事業者が参入しにくい状況にある中で、とらず園のような「多機能性」を有する社会資源は村民の福祉向上に大きな役割を果たしている。

(参考：沖縄県社会福祉協議会，“離島の介護を担う福祉の拠点”
<http://www.okishakyo.or.jp/html/kouhou/report/14torazu.html>)

第3章 飛島の福祉

3-1 飛島の現状・課題

飛島は、表1の通り、昭和25年をピークに人口が減っているのがわかる。平成23年3月31日現在、飛島は人口255人、118世帯であり、1世帯あたりの人員は1.93人である。そのうち65歳以上の高齢者人口は179人であり、全人口の63.3%を占めている。全国の高齢化率は20.8%であることからわかるように、表3でわかるよう飛島の高齢化率は年々高くなっている。

表2 飛島の人口推移

(人)

		昭和 25	昭和 35	昭和 50	昭和 55	昭和 60	平成 2	平成 7	平成 12	平成 13	平成 14	平成 15
勝浦	男		314	205	209	193	143	98	65	70	66	66
	女		289	211	186	166	140	104	77	87	83	82
中村	男		218	131	130	115	79	56	39	44	42	37
	女		200	134	122	102	82	53	39	43	42	41
法木	男		226	129	127	110	75	56	44	48	48	47
	女		204	122	107	111	78	67	52	53	53	47
男女別 計	男		758	465	466	418	297	210	148	162	156	150
	女		693	467	415	379	300	224	168	183	178	170
合計		1,618	1,451	932	881	797	597	434	316	345	334	320

表3 飛島の人口に対して高齢者率推移

昭和35	昭和45	昭和55	昭和60	平成2	平成7	平成12	平成15
10.8%	10.8%	15.7%	17.1%	23.1%	35.5%	47.8%	55.9%

(表2・表3参考：国土交通省“平成15年度離島の総合交流支援事業：「離島ツアー交流推進支援事業の概要」 1 飛島の概況”

<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/survey/tour03/tobigaiyou.pdf>

飛島には高校が存在しないため、中学校を卒業後本土へ渡る。そのため、飛島の居住形態の特徴として、ほとんどの世帯が島外にも住居を持っているマルチハビテーションが挙げられる。そのために、島内にある住居を留守にすることが多い。

飛島では、地区ごとに用事を頼み合い、互いに目を配り合う関係が築かれており、留守中も近隣の知り合いに留守を頼み、助け合う関係が築かれている。表4を見ても、同居家族内と同居家族以外の差が約20しかない。本土では考えられない結果だ。飛島では、このような日常生活での助け合いが根付いて、サポートネットワークが充実しているとわかる。しかし、生産年齢人口が少なく、島民の多くが50歳代以上である飛島の現状を考えると、家庭や地域での支え合いの体制を今後も継続していくことは難しい。

表4 手段的サポート

質問		はい	いいえ
あなたが病気で2～3日寝込んだときに、看病や世話をしてくれる人がいますか	同居家族内	107	20
	同居家族以外	76	51
あなたが病気で長期間寝込んだときに、家のことを手伝ってくれる人がいますか	同居家族内	103	24
	同居家族以外	83	43
ちょっとした用事や、留守番を頼める人はいますか	同居家族内	110	17
	同居家族以外	89	35

(参考：志水ほか(2004)「離島高齢者の社会とのかかわりの状況に関する研究 一山形県酒田市飛島における実施調査結果を中心に一」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第11号 pp.73-78より筆者作成)

飛島で介護保険制度による要介護認定を受けている高齢者は22人いる。そのうち8人は酒田市の老人保健施設やグループホームなどに入所している(平成19年4月現在)。また、とびしま総合センターで実施されている短期入所等事業の平成18年度利用状況は、延べ日数にして65日であり、利用人数は5人であった。

飛島では、平成15年度より介護保険サービスを実施しているが、島内での利用は少ない。島民が遠慮してしまうためにサービスを利用しにくい、他人に介護されることに抵抗があるなどの意識が根本に存在する。介護者に関していえば、同じ島民だからこそ介護をしてほしくないという意見もある。サービスの利用が少ない理由については今後の精査が必要だが、そのことがサービスを必要とする人が少ないと安易に結びつけることはできないため、ニーズの掘り起こしが必要であろう。

高齢者が島外へ移る目安としては、要介護度3がひとつの基準として考えられる。それ以上の要介護状態になると、現状では島内での生活は厳しい。たとえサービスの利用によって住宅生活が可能で高齢者であっても、早い段階で島外へ移動しているケースも見受

けられる。これは、離島ゆえの問題点と考えられる。

医療については昭和 34 年に開設されたへき地診療所である「飛島診療所」が担っている。だが、定期的に酒田市内の医療機関にも通院している者が多い。しかし、冬期は、悪天候により定期船が欠航することが多く、島民の不安は大きい。急患が発生した場合には、緊急用ヘリポートを活用し、本土の医療機関に搬送する体制をとっているが、重篤な場合のみに限られているものであり、健康面、医療面でのさらなる環境整備が望まれる。

3-1-1 「支え手」の減少

飛島では、50 歳代～60 歳代の人たちが、一つ上の世代を支えている。飛島の人口構成上、現在の「支え手」である 50～60 歳代の世代を支える、次世代の「支え手」が存在せず、島民同士が共に支えあうのに限界が見えてきている。「飛島に住み続けたい」と願う島民の思いを実現するためには、既存の共助機能を支えられるような「公益的な民の力」が必要であるといえよう。

飛島の 20 年後には、70 歳代以下がほとんどいなくなる。今後は高齢者 1 人世帯や高齢者のみの 2 人世帯がより一層増えることと思われる。現在は要介護度 3 以上の人は島にはいないが、要介護が低ければ家族や地域の人々の支えによって島で生活することは可能である。しかし、今後はより軽度の要介護状態であっても、支え手がいなかったために、島で生活することが現在よりも困難になるだろう。

(参考：真ほか 2009)

3-1-2 介護サービスの課題

飛島では人口の高齢化に伴う「介護」問題への取り組みが重要な課題である。島内には、最近まで介護事業所が常駐せず、島民への介護サービスは、ホームヘルパーが定期船を利用して酒田市内から来島し、酒田市役所の支所であるとびしま総合センターにおいて、通所介護・短期入所介護サービスが提供されていた。

また、島内での介護保険サービスの利用は多くなることが予想されるため、介護保険によるサービスのよりいっそうの活用が必要となる。そのためには、島民の生活に適したサービスのあり方を考えることが重要である。

介護サービスが地域の特性に適したものにできれば、サービス利用のインセンティブ²は

² インセンティブ 人や組織のモチベーションを誘引するもの。代表的なインセンティブとして、金銭的報酬、社会的評価、自己実現の場の提供などがある。

大きくなる。しかし、現在、飛島ではサービスの利用度が低いために、サービスを利用した場合のメリットを島民自身がイメージしにくい。そのことが、どのようなサービスが必要かという介護サービスに対するニーズを明確にすることを困難にしている。つまり、何があれば生活がよくなるのか、どのようなサービスがあれば、少しでも長く島で生活できるのかが分からず、このことがサービスの開発の妨げになっている。

さらに、ニーズがあっても、それに応えるサービスをどのようにデザインしたらよいかも難しい問題である。介護サービスとは少し異なるが、日々の生活の中で、支援を必要としていることは少なくない。例えば、冬期の自宅前の道路の除雪、灯油の詰め替え、食事の準備など、高齢者にとって容易ではないことはたくさんある。しかし、それを支援できる公的な仕組みは現在のところ存在しない。必要な人に必要なサービスを提供できるような体制の構築が必要である。

2009年3月より一家族が移住し、市から認定を受けた島内初の介護事業所「和楽」を開所した。島内の介護を支える拠点としてのみならず、福祉有償運送サービスの可能性なども模索され、豊かに住み続けることのできる島づくりのきっかけとなることが望まれる。
(参考：呉ほか 2009)

3-2 飛島の担い手

3-2-1 和楽

2009年3月、山形県酒田市の日本海沖合にある離島「飛島」に、一組の家族がやってきた。酒田市の市街地から、澁谷夫妻が子供3人を連れて移り住み、島で初めてとなる介護事業所「和楽」を立ち上げた。「とびしま総合センター」では、13人のお年寄りがデイサービスを利用している。近所の友人とともに利用する鈴木まさ子さんは、センターはみんなと話をし、歌を聴いたりできとても面白いと話す。

島には高齢者が多いのに、介護施設がない。公共交通機関がないため、車がない高齢者は、港から自宅まで日常品などの荷物を運ぶのにも苦勞している。

「島で1日でも長く暮らしたい人を手伝いたい。プラスの変化を起こしたかったし、自然の中で子供達を育てたい、という思いもあった。」澁谷氏は2年前、介護福祉士として介護施設で働いていた妻に相談し、移住を決めた。

長い間、離島ゆえに介護は立ち遅れた状況にあった。和楽ができる前は、島民の申し込みを受けて、市役所が介護事業者の介護福祉士とヘルパー2級の人を島に派遣していた。

しかし、「申し込みは1週間前まで」「船の欠航でヘルパーを派遣できない」など使い勝手の悪さと島民はわざわざ本土から来てもらうのは申し訳ないと思い、利用者はほとんど

どいなかった。

和楽はホームヘルパーに加え、市の委託事業として、デイサービスと泊まりのショートステイも提供している。ショートは家族が島を離れる間や漁の繁忙期などに、介護が必要なお年寄りを一時的に預かり、食事や身のまわりの世話をする。

(参考：朝日新聞、「一家5人、島を介護、3児連れ夫婦移住施設立ち上げ」

<http://www.asahi.com/national/update/1226/TKY200912260234/html>)

3-2-2 もちの木ヘルパー会

飛島では、「訪問介護員(3級)養成研修会」が平成16年度に実施されており、当時11人の島民が受講修了した。平成18年には、研修会の受講修了者によって「もちのきヘルパー会」が組織され活動をはじめている。

おもな活動内容としては、2ヶ月に1回程度で介護予防調査と冬期(平成18年度は12～2月に実施)のひとり暮らし高齢者(75歳以上)への配食サービスの取り組みである。実施にあたっては、酒田市社会福祉協議会の地区予算を活用している。平成19年度の利用実績は、12月9人、1月5人、2月5人であった。

この取り組みは、「75歳以上のひとり暮らし高齢者」を対象としているが、夫婦ともに75歳以上の高齢者などからもサービス利用の要望が寄せられている。会としては、要望がある世帯には実施したい意向だが、数を賄いきれない現状にあることから実現していない。この会は、輪投げ・ダンベル体操をすることによって孤立から引き離すことや、個人レベルでの悩みや、生活の場での困り事を共有する場としても活用されている。

(参考：呉ほか 2009)

3-2-3 診療所

飛島には昭和34年に開催されたへき地診療所が担っている。医師は杉山誠さんだ。平成12年4月に国立の病院を定年を少し残して辞め、山形県唯一の離島「飛島」の診療所に赴任した。定期的に酒田市内の医療機関にも通院している者が多い。しかし、冬期は特に、悪天候により定期船が欠航することが多く、島民の不安は大きい。急患が発症した場合には、緊急用ヘリポートを活用し本土の医療機関に搬送する体制をとっているが、重篤な場合のみに限られているものであり、健康面、医療面でのさらなる環境整備が望まれる。

(参考：杉山誠 “酒田市飛島診療所”

<http://www.hospital.sakata.yamagata.jp/tobisima/column1.html>

写真 1 飛島診療所



(出典：杉山誠, “Dr.杉山の飛島アルバム”

<http://www.4071.net/tobishima/dralbm/img03/k01.jpg>)

第4章 他島から学べること

飛島には介護サービスを受けられるのは介護施設「和楽」しかない。飛島の島民に和楽についてインタビューをした結果、「和楽」は島に家族で住んでいる方が利用するような場所だと言っていた。「和楽」は澁谷夫妻 2 人で頑張っているが、他島の介護施設と比べて従業員が少ない。飛島でヘルパー2 級を持っている人が 2 人しかいなく、その人たちは、手伝いには行くが本格的な従業員ではない。最後まで島に居続けたいと思っても現状では人手が足りなくて難しい。そこで、第 3 章で紹介した島々から学べるものはないか考えてみる。

(1) 香川県高松市男木島

男木島も飛島と同じく高齢化率が 6 割と高い。しかし、男木島では、「島で生まれた人が島で最期を迎えるように」と考えた人が、島民自ら呼びかけを行い、NPO 法人を立ち上げ、通所介護を開始した。

飛島の介護施設は、移住者である澁谷氏が立ち上げたもので、島民の力ではない。飛島は、行政や大学などの力に頼っている一面がある。そのため、男木島のように島民の力だけで行動できるよう働きかけるべきである。

(2) 島根県隠岐郡知夫里島

知夫里島の「なごみの里」は、最期を島で迎えたいと願う島民の想いを叶えた。この知夫里島は、診療所と医師が 1 人いるが入院することができない。特別養護老人ホームがないため、要介護度が高くなれば島を離れなければならない状況だった。このようなところが、飛島と似ている。知夫里島は柴田氏が中心となって「なごみの里」を開き、全国からスタッフを集め、島民の願いを叶えた。

飛島の場合、柴田氏のような福祉の中心人物となるのが澁谷氏である。「なごみの里」のような施設を目指すのも手である。

(3) 沖縄県伊平屋島

伊平屋島の「高齢者生活福祉センター・とらず園」は、介護保険事業の通所介護事業と「生きがい対応型ミニデイサービス」を合同で実施している。これは、「とらず園」だからこそ介護事業だ。毎週火曜日～木曜日の 3 日間で、伊平屋村内の各地域のミニデイサービスを同じ空間・同じ時間に行い、利用者や住民の健康維持と交流を図っている。

これを飛島に取り入れるとしたら、飛島の3地区（勝浦・中村・法木）ごとに、それぞれの集いの場を作り、地域住民が集まることで地域コミュニティの維持につながる。また、3地区合同で互いに集まり、飛島全体のつながりを深めることができる。そして、互いに助け合いながら1人暮らしの高齢者に対しても日配り気配りができ、島民の健康維持へとつなげられる。

第5章 結論—飛島の未来の福祉を考える

飛島は、高齢者が高齢者を支えるという問題がある。50歳代～60歳代の世代を支える、次世代の支え手がなくなり、20年後には、70歳代以下がほとんどいなくなる。そして、飛島では介護施設や介護サービスの利用度が低いため、島民自身がイメージしにくい。そのことから、介護サービスに対するニーズを明確にすることが困難だ。どのサービスを利用すれば、長く島で生活できるか分からず、サービスの開発の妨げになっている。

2009年3月より、酒田市から一組の家族が移住してきた。その家族の夫妻が、飛島で介護事業所「和楽」を立ち上げた。「和楽」ができる前は、市役所が島民の申し込みを受け、介護福祉士とヘルパー2級者を島に派遣していた。現在、飛島の福祉は渡谷氏を中心として発展段階にある。

そこで、飛島の福祉の発展のために、香川県高松市男木島・島根県隠岐郡知夫里島・沖縄県伊平屋島の三島の事例から飛島の福祉の未来を考えた。

男木島の事例から、飛島の介護施設は、移住者の渡谷氏が立ち上げたもので、島民の力ではない。飛島の島民は、行政をはじめ大学などの外発的な力に頼っている一面がある。なので、男木島のように、今後の福祉について積極的に活動をしなければならない。そのサポートとして、行政や大学の外発的な力を使う必要がある。

知夫里島の事例から、飛島の福祉の中心となるのは渡谷氏である。渡谷氏は、介護だけでなく、定期船からきた荷物を運ぶこともしている。これは、福祉＝人々にとっての幸福とも言える。人々の幸せのために動ける渡谷氏はこれからのキーとなる。

伊平屋島の事例から、飛島の3地区（勝浦・中村・法木）ごとに、それぞれの集いの場を作り、地域住民が集まることで地域コミュニティの維持につながる。また、3地区合同で互いにあつまり、飛島全体のつながりを深めることができる。そして、互いに助け合いながら1人暮らしの高齢者に対しても日配り気配りができ、島民の健康維持へとつながられる。

以上のことから、福祉は、島民が長く島に暮らしていくために重要なものである。これらは、島民、島の応援団、行政により構成される「とびしま未来協議会」と「緑のふるさと協力隊」の導入により、解決が望める。

おわりに

今回の論文を書いてみて、離島の福祉について多くのことを学ぶことができた。この論文を通して一番印象に残ったのは、島根県隠岐郡知夫里島の「なごみの里」についてである。「離島で最期を迎えたい」という島民の願いは、どの島も一緒だと知り、祖母を見ていてその願いの強さがわかった。離島の福祉について調べたいと思ったのは、祖母の影響が強い。はじめに書いたように、祖母は島を出て酒田で最後を迎えた。もし、飛島に「なごみの里」のような介護施設があればと思っていた。

2009年に澁谷氏が飛島に移住してきて、介護事業所「和楽」を立ち上げた。現在では、飛島の福祉の中心は澁谷氏だといっても過言ではない。飛島ではサービスの利用度が低いため、どのようなサービスが必要かというニーズを明確にするのは困難だ。この問題をこれからの「和楽」に期待していきたい。

論文で調べたように、いろいろな島でそれぞれの福祉を実施している。その島それぞれの特徴があり、飛島も飛島ならではの福祉を見つけて欲しいと願う。

謝辞

本論文を作成するにあたり、お忙しいにも関わらず、インタビューに協力してくださった飛島の和島みよ子氏、澁谷聡氏、奥山氏はじめ、お世話になった島民の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。また、さまざまなアドバイス、ご指導をくださった呉尚浩准教授、林久美子氏、飛島調査でお世話になった小関久恵講師、澤邊みさ子准教授に感謝いたします。

みなさまがご協力してくださったからこそ、この論文を完成させることができました。心よりお礼申し上げます。

参考・引用文献リスト

<書籍・論文>

- ・岡本祐三（1995）『医療と福祉の新時代「寝たきり老人」はゼロにできる』日本評論社
- ・岡本祐三・鈴木祐司・NHK 取材班（1998）『福祉で町がよみがえる 介護保険と自治体戦略』日本評論社
- ・國武輝久・斎藤忠雄・駒宮史博・羽貝正美・山ノ内敏隆・加藤智章・池上岳彦・石田千代子（1999）『高齢者社会の政策課題』同文館出版株式会社
- ・駒村康平（2001）『福祉の総合政策』創成社
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔（2008）「社会環境調査編」『平成 19 年度山形県離島振興推進調査（受託研究）報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、山形県庄内総合支庁総務企画部企画振興課
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔（2009）「内発的地域づくりにおける「公益的な民の力」の果たす役割～山形県酒田市飛島に事例を中心に～」『大会予稿集』（日本公益学会）、pp.44-47
- ・笹岡眞弓（1997）『病院をめぐる介護関係と家族—医療ソーシャルワークの視点から—』一橋出版株式会社
- ・柴田久美子（2004）『「ありがとう」は祈りの言葉』佼成出版社
- ・武川正吾（2001）『社会福祉—社会政策とその考え方』有斐閣
- ・樋口恵子・堀田力（1999）『介護保険の利用法がわかる本』法研
- ・志水幸・小関久恵・亀山育海（2004）「離島高齢者の社会とのかかわりの状況に関する研究—山形県酒田市飛島における実施調査結果を中心に—」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第 11 号、pp.73-78
- ・山口広文（2009）「離島振興の現況と課題」『調査と情報』（国立国会図書館）第 635 号 pp.1-10

<Web ページ>

- ・国土交通省 “平成 15 年度離島の総合交流支援事業：「離島ツアー交流推進支援事業の概要」 1 飛島の概況” （2012.1.11 取得）
<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/survey/tour03/tobigaiyou.pdf>
- ・山下匡将・村山くみ・宮本雅史・小関久恵・嘉村藍・竹内夕紀子・古川葵・大月和彦・志水幸 “島嶼地域高齢者の楽観性に関する—山形県酒田市飛島住民のライフスタイルとの関連—”（2012. 1.11 取得）

- http://www2.ngu.ac.jp/uri/syakai/pdf/syakai_vol4402_11.pdf
- ・ 沖縄県社会福祉協議会 “離島の介護を担う福祉拠点 高齢者生活福祉センター・とら
ず園（伊平屋島）”（2012. 1.11 取得）
<http://www.okishakyo.or.jp/html/kouhou/report/14torazu.html>
 - ・ 総務省 統計局 “政府統計の総合窓口”（2012.1.11 取得）
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001082327>
 - ・ 杉山誠 “酒田市飛島診療所”（2012.1.11 取得）
<http://www.hospital.sakata.yamagata.jp/tobisima/column1.html>
 - ・ はてな “通所介護とは”（2012.1.11 取得）
<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%C4%CC%BD%EA%B2%F0%B8%EE>
 - ・ 大阪リハビリテーション専門学校 理学療法学科／夜間部 “医療・福祉の現状と課
題”（2012.1.11 取得）
<http://www.ocr.ac.jp/works/index.html>
 - ・ メディカル・ケア・サービス株式会社 “日本の福祉の現状”（2012.1.11 取得）
<http://www.mcsj.co.jp/sub/genjyou.html>
 - ・ グロービス “インセンティブ”（2012.1.11 取得）
<http://gms.globis.co.jp/dic/00352.php>
 - ・ 長崎県 “第 10 章 離島地域の保健福祉対策”（2012.1.11 取得）
<http://www.pref.nagasaki.jp/choju/fukushikeikaku/10.pdf>
 - ・ 国土交通省 “離島振興法”（2012.1.11 取得）
<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/pdf/follow-up2.pdf>
 - ・ 厚生労働省 “平成 16 年国民健康・栄養調査結果の概要”（2012.1.11 取得）
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/05/h0508-1a.html>

東北公益文科大学
平成23年度 卒業論文

離島の福祉を考える

—山形県飛島におけるその現状と課題—

C1081131
進藤未夢

1

はじめに

- 小さい頃飛島に行き、飛島の自然に惹かれた。
- ゼミで飛島の現状を知り、飛島の福祉に関心を持った。
- 島民は今まで福祉についてイメージをつかめていなかったため、利用者が少ないことがわかった。

そこで

- 飛島ではじめての介護事業「和楽」ができ、島民のニーズにあった介護ができるか考えていきたいと思った。

2

研究の背景・目的

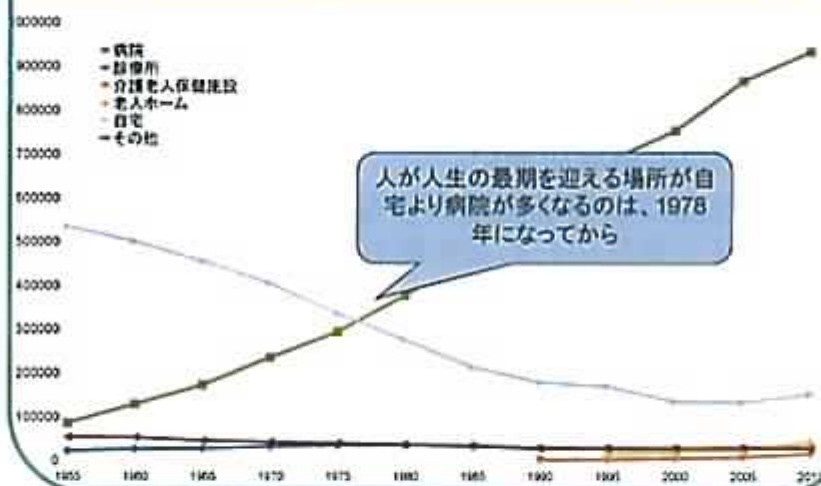
- 背景
 - 「生まれた島で最期を迎えたい」という願いを
持った島民が多い。
 - 離島には福祉施設が少なく、島に残りたいが介
護や病気のため島を離れなければならない。
- 目的・方法
 - 飛島と全国の離島の福祉の現状・課題、他島
の取り組みについて、飛島で学べることはない
か、文献・インタビューで調べた。

3

全国的な福祉の現状・課題

4

最期を迎える場所



参考:『人口動態調査』(平成22年)厚生省をもとに作成

離島の福祉の現状

- 介護保険サービス施設がない離島
 - 本土の施設を利用する場合の航路補助
 - 介護保険サービス事業者が島を訪れる際の運賃補助
 - 島内でホームヘルパーを養成している
- 一部の離島
 - スポーツ大会
 - 閉じこもり予防
 - 健康づくりや介護予防の取り組み

(参考:国土交通省, “離島振興法”
<http://www.mlit.go.jp/crd/chiri/pdf/follow-up2.pdf>)

離島の福祉の課題

- 離島内に介護施設等がない場合
 - 地域住民や高齢者同士で支えていかなければならない。
 - 地域住民などが高齢者に対して健康づくり等の予防対策を実施しているところが増えている。



支援体制を構築していく必要がある。

7

飛島の概要

8

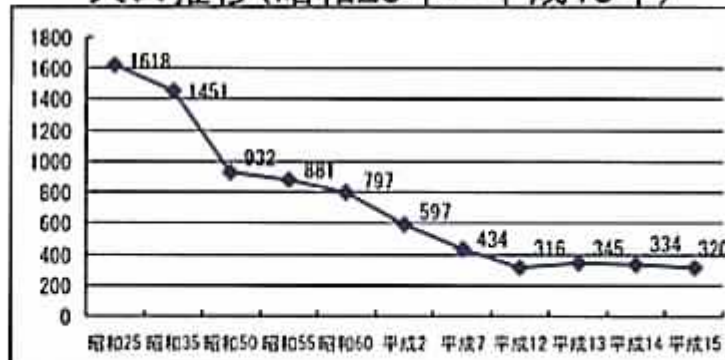
飛島とは

- 山形県酒田市に属する、県唯一の離島
- 酒田より北北西約39.3kmの沖に位置する
- 面積2.32km²、周囲10.2km
- 定期船で約75分
- 島内は勝浦、中村、法木の3つの地区がある。
- 昭和25年4月に酒田市と合併。一部離島となる。

9

飛島の人口推移

人口推移(昭和25年～平成15年)

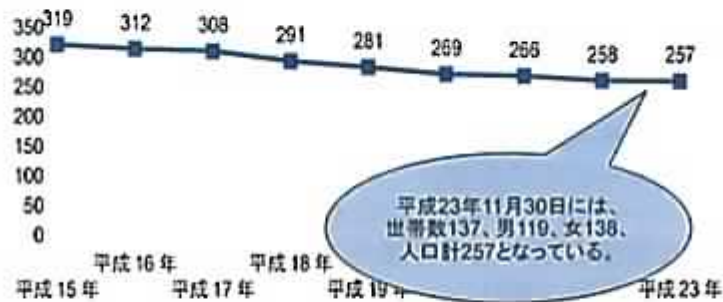


(参考:国土交通省“平成15年度離島の総合交流支援事業:「離島ツアー交流推進支援事業の概要」飛島の現状”<http://www.mlit.go.jp/iod/chu/1304evy330493306ed8a.pdf>
平成15年～平成23年のExcelファイルより筆者作成)

10

飛島の現状(人口推移)

人口推移(平成15年～平成23年1月末)



(酒田市「住民基本台帳資料 町丁字別男女別人口・世帯数」
<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/2011/10kei/10kei.html>
 平成15年～平成23年のExcelファイルより抜粋作成)

11

飛島の現状(人口構成)

年齢区分別人口・世帯数

年次	世帯数	人口計	0~14歳	15~64歳	65歳~	75歳~	高齢化率	総世帯率
H7	165	434	34	246	154	70	35.5%	16.1%
H12	144	316	2	163	151	53	47.8%	16.8%
H17	136	275	1	119	155	66	56.4%	24.0%

(酒田市「平成17年国勢調査 酒田市結果報告書(簿冊)」
<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/2017/10kei/10kei.html> より抜粋)

12

飛島の課題

- 生産年齢人口が少ない
 - ・ 若者が中学卒業と同時に島を出て行く
- 次世代の「支え手」が存在しない
 - ・ 40代～50代が、高齢者を支えている
- 介護サービスを利用した場合のメリットをイメージしにくい
 - ・ 介護サービスの開発の妨げになっている
- 介護サービスが少ない
 - ・ ショートステイ、デイサービスしかない
- 要介護度の高い人の介護ができない
 - ・ 一人暮らしできない
 - ・ 家族が本土にいるため一緒に暮らしたほうがいい

13

他島の福祉の取り組み

14

香川県高松市男木島(NPO法人湯遊の館)

- 人口198人、高齢化率7割(平成23年1月現在)
- 医者は常駐しておらず、週4日医者が診療に来る。
- 「島で生まれた人が島で最期を迎えるように」と考えた1ターン者が、島民らに呼びかけ、平成17年8月NPO法人を立ち上げた。
- 廃屋になっていた木造2階建てのペンションを改造して通所介護を開始した。
- 島民自らがNPO法人を立ち上げ、自らの力で介護サービスを島民に提供するという形で実現した。

15

香川県高松市男木島(NPO法人湯遊の館)

- 原点
 - 島民には島と町のどちらで暮らすか選択できなかった。
 - →この人たちに選択肢を作りたいと思ったから。
- 特徴
 - 行政や事業者から採算が取れないといわれながら、島民自らがNPO法人を立ち上げ、介護サービスを島民に提供することができた。

16

島根県隠岐郡知夫里島(なごみの里)

- 人口700人、在宅死亡率が75%(平成20年3月1日現在)
- 医師1人の診療所はあるが入院はできない。
- 「島で死にたい」という高齢者のために、NPO法人代表柴田久美子氏が、平成14年度に「なごみの里」を開いた。
- 全国から集まったスタッフやボランティア10人以上で24時間体制で生活の世話をしている。
- 「自分が生まれ育った場所で最期を迎えたい」という当たり前の思いを受け止めた場である。

17

沖縄県伊平屋島(とらず園)

- 人口1600人、高齢化率25%(年不明)
- 「高齢者生活福祉センター・とらず園」が設置されている。
- とらず園は、60歳以上の高齢者を対象に、生活介護のほかには地域住民との交流などの機能を持たせた複合施設
- 行政からの受託で社会福祉協議会が運営。

18

沖縄県伊平屋島(とらず園)

- 特徴
 - 介護保険事業の通所介護と「生きがい対応型ミニデイサービス」を合同で実施している点である。
 - 毎週火曜日～木曜日までの3日間は、伊平屋村内の各地域のミニデイサービスを同じ空間・同じ時間に行い、利用者や住民の健康維持と交流を図っている。
- このような「多機能性」を有する施設は村民の福祉向上に大きな役割を果たしている。

19

飛島の福祉の担い手

20

和楽

- 2009年3月、5人家族の一家(夫婦2人、子供3人)が飛島に移住してきた。
- その家族、澁谷夫妻が飛島で初めて介護事情「和楽」を立ち上げた。
- 和楽では、デイサービスとショートステイを提供している。
- 家族が島を離れる間や漁の繁忙期などに、介護が必要なお年寄りを一時的に預かり、食事や身の回りの世話をしている。

21

和楽(その他の効果)

- 飛島小中学校復活
 - →休校になっていた小学校が夫妻の子供が来たことにより9年ぶりに復活した(今年から中学校も復活)。
 - これにより、島外から先生方が島に来た。
- 定期船できた荷物の配達することによって足腰の弱いお年寄りの助けになる
 - 配達の間際に島民とコミュニケーションをとっている。

22

もちの木ヘルパー会

- 平成16年に、「訪問介護員養成研修会」が実施され、11人の島民が受講修了した。
- 平成18年度に、研修会の受講修了者によって「もちの木ヘルパー会」が組織され活動をはじめた。
- 活動内容として、2ヶ月に1回程度で介護予防調査の実施と冬期の一人暮らし高齢者への配食サービスの取り組み。

23

診療所

- 昭和34年に開設されたへき地診療所
- 医師1人、看護師2人
- 定期的に酒田市の医療機関にも通院している者が多い
- 冬期は、悪天候により定期船が欠航することが多く、島民の不安が大きい



写真: 杉山誠, "Dr. 杉山の飛島アルバム", <http://www.4071.net/tobishima/draibn/img03b01/pg>

飛島島民へのインタビュー

25

W氏(島民、女性)

- 介護について思っていること
 - 和楽のショートステイを利用(1ヶ月20日間)
 - →17年度から母親が認知症のため、漁が忙しい時期に利用
 - 訪問介護は嫌だが、ショートステイは利用しやすい。
 - W氏は、ヘルパー2級の資格を持っており、和楽が忙しいときに手伝いに行っている。
 - W氏は元気があるうちに酒田に行き、その後介護を受けたいと思っている。

26

渋谷聡氏(和楽、男性)

- 和楽について
 - 平成19年度から開始
 - →ロコミで広がり、ショートステイ利用者が増加
 - ショートステイ、デイサービス、ボランティア移送、軽度生活援助事業などのサービス内容
 - サービス利用の申し込みはいつでもOK

27

渋谷聡氏(和楽、男性)

- 新しい事業について
 - 要介護状態にある人で、あまり足は動かなくても、ある程度手は動くという人たちに加工場で仕事をしてもらうのはどうか。
 - 話しながらでも作業できれば、それが生きがいになる。
 - 自分はまだ働けるという自信が持てるし、機能訓練にもなる。
 - →定年のない飛島ならではのもの。

28

○氏(もちの木ヘルパー会代表)

- 地域について
 - 目配り、気配りが大切。
 - 人と人とのつながりが大切。
 - →自宅訪問をしている。
 - 島に寝たきりの人はいない。
 - 年を取ると地域付き合いがなくなる。
 - →1人で頑張ろうとする人が多くなる。

29

島民の方々

- 島に住み続けたいが、自分の身の回りの世話ができなくなれば酒田へ
- 和楽があっても島にはいられない
 - →デイサービス、ショートステイを提供している。しかし、島で最期を迎えたいという願いを叶えることは難しい。
- 若い人に来てほしい
 - →働くところがない
- 一度出て行った人に戻ってきてほしい
- 働けなくなれば酒田へ

30

インタビューからわかったこと

- 飛島で最期を迎えたい人もいれば、酒田で最期を迎えたいという人もいる。
- 和楽の利用者が年々増えている。
 - →介護に対するイメージがつかめてきている。
- 介護の必要な親を和楽のショートステイに預け、自分の仕事に集中できるようになった人もいる。

31

おわりに

32

他島から学べること

1. 島で最期を迎えたいと願う島民が集まり、呼びかけをし、島外のNPO法人などと協力し介護事業を始める。
2. 看取り専用の事業を開始する。
3. 飛島の3地区ごとに集いの場をつくり、3地区合同で互いに集まり、飛島全体のつながりを深める。

33

まとめ

- 飛島は、40代～50代が高齢者を支えている。
 - →次世代の支え手がない。
- 飛島では介護施設や介護サービスの利用度が低い。そのため、介護サービスに対するニーズを明確にすることが困難だった。
 - →和楽ができたことによって、ニーズの把握や介護サービスの利用が増えていき、島に長く居られるようになった。
- 福祉について、島民、島の応援団、行政により構成される「とびしま未来協議会」と「緑のふるさと協力隊」の導入により島民のニーズの掘り起こしに協力してもらうことができる。

34

参考文献

- ・ 吳尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔(2008)「社会環境調査編」『平成19年度山形県離島振興推進調査(受託研究)報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、山形県庄内総合支庁総務企画部企画振興課
- ・ 吳尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔(2009)「内発的地域づくりにおける「公益的な民の力」の果たす役割～山形県酒田市飛島に事例を中心に～」『大会予稿集』(日本公益学会)
- ・ 柴田久美子(2004)『「ありがとう」は折りの言葉』佼成出版社
- ・ 國武輝久・斎藤忠雄・駒宮史博・羽貝正美・山ノ内敏隆・加藤智章・池上岳彦・石田千代子(1999)『高齢者社会の政策課題』同文館出版株式会社
- ・ 笹岡真弓(1997)『病院をめぐる介護関係と家族—医療ソーシャルワークの視点から—』一橋出版株式会社
- ・ 武川正吾(2001)『社会福祉—社会政策とその考え方』有斐閣
- ・ 樋口恵子・堀田力(1999)『介護保険の利用法がわかる本』法研

35

ご清聴ありがとうございました

36

平成 23 年度卒業論文

山形県飛島の移住・定住促進を考える

—全国の離島から学べること—

東北公益文科大学 公益学部 公益学科 4 年

呉 尚浩 准教授

C1081042 讃岐彩華

目次

はじめに.....	3
第1章 全国の離島の概況.....	4
1-1 離島の役割.....	4
1-2 離島振興対策実施地域の現状.....	5
第2章 飛島の現状と課題.....	8
2-1 飛島の現状.....	8
2-1-1 飛島とは.....	8
2-1-2 飛島の人口推移と高齢化率.....	8
2-1-3 飛島の産業.....	10
2-2 山形県離島振興計画の現状.....	11
2-3 とびしま未来協議会と緑のふるさと協力隊.....	13
第3章 全国の離島の移住対策.....	14
3-1 離島振興計画の最終報告.....	14
3-2 インターネットにおける全国の離島定住情報.....	14
3-3 島の暮らしを発信.....	17
3-4 移住体験について.....	17
3-5 仕事の募集.....	19
第4章 全国の離島から学べること.....	21
4-1 インターネットでの情報提供.....	21
4-1-1 公式ホームページを作る.....	21
4-1-2 島の様子を伝える.....	21
4-1-3 飛島での移住体験.....	22
4-2 島民のイベントへの参加.....	22
4-3 飛島のUターン者の意見.....	23
第5章 結論—飛島のより良い未来を考える.....	25
おわりに.....	27
謝辞.....	28
参考・引用文献.....	29

はじめに

山形県飛島で2年間の活動を通して、飛島の移住対策はどうなっているのかを考えた。島を歩いていると目につくのは高齢者ばかりで、このまま時が過ぎれば飛島に人がいなくなってしまうのではないかと危機感を覚えた。それは飛島だけではなく、全国の離島が少子高齢化や人口減少に悩まされているのだと知った。

日本において、離島は重要な役割を持っている。しかし、ほとんどの離島は本土との生活水準の格差が広がっており、その問題が認識されたことにより離島振興法が成立された。それによってだいぶ生活は改善されてきたが、人口減少の問題は未だ解決できていない。今も長期に渡って減少を続けている。

山形県にある飛島も例外ではない。飛島も子供がいなくなって小中学校が休校するまでに至った。2009年に5大家族が移住してきて小中学校は再開され、さらに介護サービスも始まったが、人口の減少は止まっていない。特に移住対策に関しては遅れており、飛島では2011年に「とびしま未来協議会」が設立し、ようやく移住対策に本腰を入れるようになってきた。2012年には緑のふるさと協力隊も島に入り、飛島の活性化に期待を寄せている。さらに離島振興計画の見直しも平成24年度に行われるため、離島の移住対策も盛んになってきている。

そこで、全国の離島の移住対策を調べて飛島に生かせることはないか模索する。全国の離島の移住対策については、自治体のウェブサイトや国土交通省の離島振興のウェブページを検索して、どのような移住・定住対策を行なっているのかを調べた。これにより飛島に活用できる方法はないのかを考える。また、飛島の現状などを島民へのインタビューや、飛島に関わっている方々にお話を聞いてまとめた。

本論文の構成は以下のようになっている。

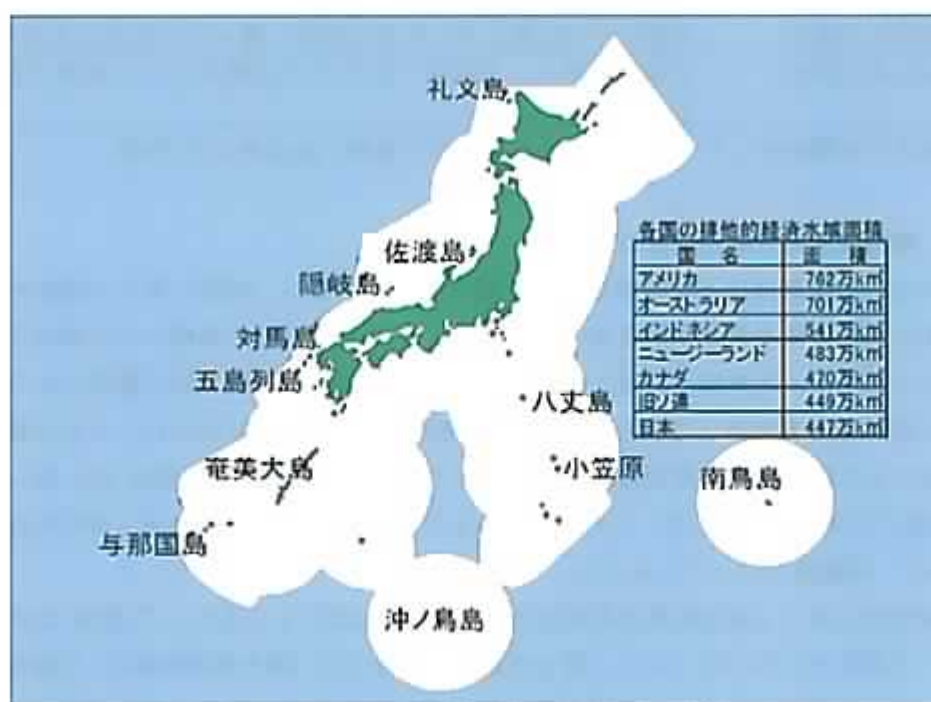
第1章では我が国において離島がどのような役割を持ち、現在どのような問題を抱えているのか、第2章では飛島の現状と課題について最新のものをまとめる。第3章では全国の離島がどのような移住対策を行っているのかをインターネットで調べ、分類整理した。第4章では、第3章でまとめたものなどを参考に、飛島に活用できる移住対策はないのかを考え、インタビューなどで得た情報を述べる。第5章は結論として、飛島のより良い未来のためにどうすればよいのかを提案する。

第1章 全国の離島の概況

1-1 離島の役割

日本において、島は本土に暮らす人々にとって重要な役割を持っている。日本は世界有数の海洋多島国であり、島は経済水域の50%を有しており、200カイリ排他的経済水域や大陸棚などの確保にとって大切な存在である。離島（沖縄、奄美、小笠原を含む）の存在により、日本の排他的経済水域等の面積は本土に比べ約2倍（447万km²）となっている。また、密漁監視や海難救助、船の緊急寄港地にもなっている。特に外海の島々はロシア、中国、韓国などの外国の地域と接点を形作っている。以下の図1は平成8年の排他的経済水域及び大陸棚に関する法律で、日本の200カイリ排他的経済水域を試算した結果を表したものである。日本は排他的経済水域を含めると世界でも高い領域を持っている。島は領海の保護のためにも重要な存在となっている。

図1 日本の排他的経済水域



（国土交通省「200カイリ排他的経済水域の試算結果」

<http://www.mlit.go.jp/erd/chirit/pdf/haita.pdf>より抜粋）

さらに、島は海上交通の先進地であり、外国との交流拠点でもあるという歴史背景と、海に囲まれそれぞれが独立しているという特性なども相まって、古くから個性ゆたかな暮らしが営まれ、日本の文化に多様性と深みを与えている。隔絶された土地である特性により、たくさんの貴重な文化・伝統・歴史遺産が受け継がれ、優れた自然環境にも恵まれている。都市の人々が忘れかけている、ゆったりとした時間の流れが島にはある。島は癒し

の空間であり、自然文化を守る貴重な場所でもある。しかし、これらは少子高齢化・人口減少等により消失に向かっているものもあることが問題だ。

表1のように、離島は地理的特性、自然特性、文化特性の3つに分類される役割を持っており、これらは人が島に住んでこそ発揮されるものとなっている。

表1 離島の国家的・国民的役割

地理的 特性	国土・海域確保	国境、領土や領海、経済水域、大陸棚などを確保し、海洋資源を守る
	海の治安維持	密漁や密航、密輸の監視など、海の治安を守る
	海の安全確保	海難救助や緊急時の船の寄航など、海の安全を守る
	食糧確保・補給	魚介類を中心とした食糧確保の拠点となる
自然 特性	生物・生態系保全	様々な生き物の住む環境を守る
	環境浄化・維持	藻場・干潟、森林、農地などが空気や水をきれいに保つ
	アメニティ提供	海のレクリエーションや観光、保養、環境教育の場となる
文化 特性	学習・交流の場提供	地域文化などを生かした体験学習や、相互交流の場となる
	地域社会継承	海などの自然と共に生きる社会、様々な生活文化を育む
	伝統文化保存	固有の祭り、文化財・技などの伝統文化や、独特の景観を守る

(財団法人日本離島センター「日本の島々が果たす役割」pp.3・8より作成)

1-2 離島振興対策実施地域の現状

前述のように離島は様々な役割を持つ重要な存在であるが、同時に多くの課題を抱えている。国土交通省によると、平成22年4月現在、日本は6,852の島嶼により構成されている。このうち本州、北海道、四国、九州及び沖縄本島を除く6,847島が離島である。そのうち有人島が422島あり、これらのうち、76地域(258島、110市町村)の有人離島が離島振興法による離島振興対策実施地域に含まれている。さらに、有人離島258島のうち、83の離島が全部離島であるが、これは平成15年には115島であったが、市町村合併により32島が一部離島となってしまった。

離島振興法に基づく離島振興対策実施地域は、平成22年4月現在、76地域(258島110市町村)が指定されている(以下、国土交通省「離島とは(島の基礎知識)」を参考)。このうち、国土交通省が毎年度、離島振興計画の実施のために必要な公共事業関係予算を一括計上し、その振興を図っている島は北海道内の6島を除く252島(104市町村)である。258島の面積は5,225k㎡で、わが国の総面積に対して11.38%にあたる。

離島振興対策実施地域の人口総数は長期間に渡り減少を続けている。その減少率は昭和40年から昭和45年の12.1%をピークに、昭和50年代からは鈍化傾向を続けており、平成12年から平成17年までの最近の5カ年では8.2%となっている。それでも人口が減っていることに変わりはなく、最も人口が多かった昭和35年と比べると、平成17年には半数近くまで減少している。

年齢階層別人口割合(平成17年国調)は、14歳以下の年少人口は12.6%(全国13.7%)、15～64歳までの生産年齢人口は54.4%(同65.8%)、65歳以上の老年人口は33.0%(同20.1%)となっており、特に高齢化比率(高齢人口)の33.0%は、過疎地域、奄美等のハンデキャップ地域と比べても高いという状況になっている。このような点から、離島は少子高齢化社会の先進モデルにも成り得ると言える。

また、産業別の就業人口構成(平成17年国調)は、第1次産業24.2%、第2次産業17.6%、第3次産業58.2%となっており、全国の値である4.9%、26.6%、68.5%に比べて、第1次産業の比率が大きく、島の経済活動における漁業や農業等の第1次産業の役割が相対的に大きいことが特徴だ。

表2 離島振興対策実施地域の概要(平成22年4月)

区分	合計	内地	北海道
地域数	76	71	5
指定有人島数	258	252	6
面積	5,225 k m ²	4,808 k m ²	417 k m ²
対全国比	1.38%	1.27%	0.11%
人口	429 千人	415 千人	14 千人
対全国比	0.34%	0.33%	0.01%
関係市町村数	110	104	6

□人口は平成17年国勢調査による

表3 離島人口の推移

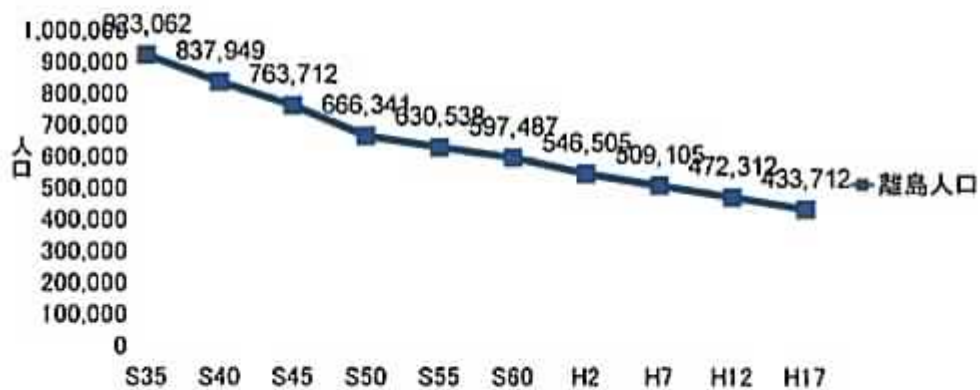
	離島人口	対前5年比	全国人口	対前5年比
昭和35年	923,062	—	94,301,623	—
昭和40年	837,949	-9.2%	99,209,137	+5.2%
昭和45年	736,712	-12.1%	104,665,171	+5.5%
昭和50年	666,341	-9.6%	111,939,643	+7.0%
昭和55年	630,538	-5.4%	117,060,396	+4.6%
昭和60年	597,487	-5.2%	121,048,923	+3.4%
平成2年	546,505	-8.5%	123,611,167	+2.1%
平成7年	509,105	-6.8%	125,570,246	+1.6%
平成12年	472,312	-7.2%	126,925,843	+1.1%
平成17年	433,712	-8.2%	127,767,994	+0.7%

表4 人口減少率と高齢者比率

	年度	離島	過疎	半島	奄美	全国
人口減少率	H2～H7	▲6.8%	▲5.2%	▲1.7%	▲4.9%	+1.6%
	H7～H12	▲7.2%	▲5.4%	▲2.3%	▲2.6%	+1.1%
	H12～H17	▲8.2%	▲5.4%	▲3.7%	▲4.4%	+0.7%
高齢者比率	H7	24.9%	25.2%	21.1%	22.9%	14.5%
	H12	29.4%	29.5%	24.6%	25.8%	17.3%
	H17	33.0%	30.2%	27.5%	27.7%	20.1%

(表3、表4、表5は国土交通省「離島とは(島の基礎知識)」
<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/ritoutoha.html>より引用)

図2 離島人口の推移



(国土交通省「離島とは(島の基礎知識) 人口の推移」
<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/ritoutoha.html>より作成)

第2章 飛島の現状と課題

2-1 飛島の現状

2-1-1 飛島とは

以下の文章は、酒田市観光ガイドの飛島の概要を参考に書いたものである。

(1) 地理・地形

飛島は山形県唯一の離島である。周囲 10.2km、面積 2.7 平方キロメートルの小さな島で、酒田市の港から北西に約 39km の日本海に浮かんでいる。島海国定公園に指定されており、ウミネコの繁殖地として国の天然記念物になっている場所もある。

地形はほぼ偏平な台地状で、本島は海岸低地面、海蝕台からなっている。島の周囲には対馬海流が流れているため、山形県の最北に位置するにもかかわらず年平均気温は 12 度以上と高い。そのため、タブノキやヒサカキなどの常緑広葉樹に覆われている。

(2) 自然

飛島は渡り鳥の中継地となっており、春は大陸から来る鳥と列島を南下する鳥で賑わっている。珍鳥や迷鳥を見ることもあり、バードウォッチャーが県内外から多く訪れている。

また、草花も豊富で、飛島が北限と見られる暖地系植物のムベ、ヤブミョウガ、ハイビヤクシン等のほか、オオイタドリ、ハマナス、アカネムグラ等の寒地系植物が共存している。

飛島の海は対馬海流の影響で暖かく透明度も高い。そのため海水浴やスキューバダイビングに来る観光客に人気だ。オノミチキサンゴやムツサンゴに加え、亜熱帯性の魚も多く、御積島の海底には穏やかなサメであるドチザメを繁殖期に見ることができる。

(3) 歴史・文化

飛島では 6000 年前の縄文時代前期の遺物が発見されている。また、島にある遺跡の特色として、北方系と南方系が混在したものがあり、その時代から飛島は重要な文化交流地点だったことがうかがえる。

平安時代のもと思われる人骨が発見されたテキ穴や、壇ノ浦の戦いに敗れた平家の武者達が落ち延び、刀剣や甲冑を埋めたといわれる源氏盛・平家盛などの名所が残されている。

昭和 25 年（1950）4 月、酒田市と合併し、昭和 38 年（1963）7 月に国定公園に指定されている。

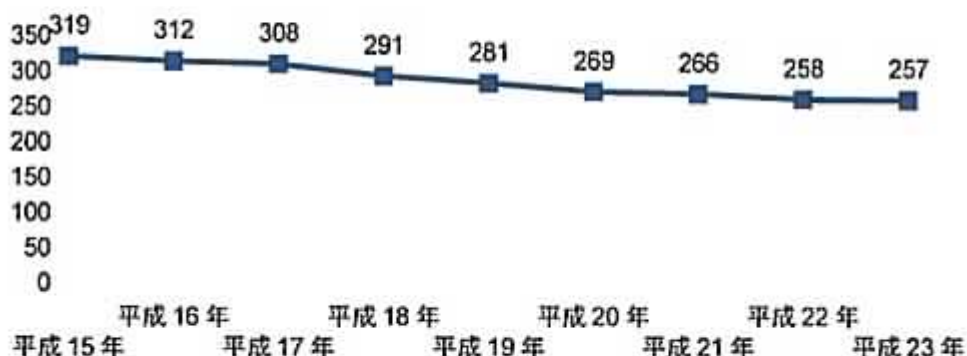
（参考：社団法人酒田観光物産協会「酒田市観光ガイド 飛島の概要」

http://www.sakata-kankou.gr.jp/tobishima/tobishima_gaiyou.html)

2-1-2 飛島の人口推移と高齢化率

全国の離島と同じく、飛島も離島振興対策実施地域に指定されており、人口は248人(平成23年11月30日現在)となっている。以下は平成15年から平成23年の各1月末時の人口をグラフにしたものだ。

図3 飛島の人口推移



(酒田市「住民基本台帳資料 町丁字別男女別人口・世帯数」)

<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/2820.html>

平成15年～平成23年のExcelファイルより筆者作成)

平成23年1月31日には、世帯数は135、男119、女138、人口合計257となっている。これが同年11月30日には世帯数137、男116、女132、人口合計248とわずかな減少が見られた。月によっては人口が微増している時もあるが、毎年、ゆるやかながら確実に人口は減ってきている。

さらに平成17年国勢調査によると、飛島の年齢別人口は表5のように推移している。平成17年時点で飛島の人口は275人で、前回の平成12年調査時に比べ41人、13.0%の減である。世帯数は136世帯で、前回に比べ8世帯、5.6%の減少となった。1世帯あたりの人員は、2.02人で、前回に比べ0.17人減少した。また、飛島の高齢化率は56.4%にものぼり、超高齢社会だということがわかる。全人口275人のうち、半数以上が高齢者だ。若者も極端に少ない。平成7年には34人もいた0～14歳の若者が、10年経過した平成17年にはたった1人になっている。高校進学などのために飛島を出て行ってしまったのだ。後にこの1人もいなくなり、2009年に1ターン者の5人家族が移住してくるまで、小中学校は閉校してしまっている。そして高校や大学まで進学した若者たちは、15～64歳の人口が減少していることからわかるように、本土での仕事に就くために島に帰ってこない。若者がいないために島のあとを継いでくれるものがないことも問題だ。

表5 年齢区分別人口・世帯数（飛島）

年次	世帯数	人口計	0～14歳	15～64歳	65歳～	75歳～	高齢化率	後期高齢化率
H7	165	434	34	246	154	70	35.5%	16.1%
H12	144	316	2	163	151	53	47.8%	16.8%
H17	136	275	1	119	155	66	56.4%	24.0%

（酒田市「平成17年国勢調査 酒田市結果報告書(確報)」

http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/files/2826_1.pdf より抜粋)

2-1-3 飛島の産業

飛島の主な産業といえば漁業と観光である。平成17年国勢調査(表6、図5、図6参照)によると、飛島で漁業を営む人は94人いる。飛島は勝浦、中村、法木の3地区に分かれているが、就業者数が最も多いのは勝浦である。表6では甲と乙に分かれているが、どちらも合わせると74人になる。次に中村の55人、最後に法木の31人である。中村地区では農業もさかんだ。さらに勝浦地区では飲食店・宿泊業も多い。逆に法木地区はほとんどが漁業で、他の産業は少ない。ちなみに、酒田市全体での漁業就業者数は238人であり、飛島の漁業が市の漁業を支えていることがわかる。

飛島では高齢者であっても漁業を続けており、体が動かなくまでやり続けるつもりだという人が多い。逆に言えば、体が健康でなければ漁業を続けられないということである。高齢になれば体に不自由が生じることも増え、漁に出ることは難しくなっていく。さらに後継者がいないので、それまで伝わっていた漁法も途絶えてしまう。また、観光業においては、旅館経営者の高齢化と後継ぎがいないことから閉店してしまう旅館もある。すでに飛島には空き家となった民宿等が存在する。高齢者だけではそれほどたくさんの客を相手にできないし、どんなに旅館に泊まりたい客がいたとしても、対応できないのであれば泊まらせることができない。神事も昔に比べて少なくなり、島内での娯楽イベントも行わなくなってしまったものもある。島内での伝統文化・風習も、人口が減少するごとに消えていっているのだ。

表6 飛島産業大分類別就業者数の表

地域名	農業	漁業	建設業	製造業	建設の入組関係の漁業	運輸業	
飛島合計	13	94	1	1	2	4	
飛島甲勝浦甲	—	11	1	1	—	1	
飛島甲中村	13	23	—	—	2	1	
飛島甲法木	—	50	—	—	—	—	
飛島甲勝浦乙	—	19	—	—	—	1	
地域名	卸売・小売業	飲食店・宿泊業	医療、福祉	接客サービス業	サービス業	公務、他に分類されないもの	計数
飛島合計	4	11	3	4	2	4	160
飛島甲勝浦甲	—	12	—	2	1	1	27
飛島甲中村	—	—	2	—	1	—	55
飛島甲法木	—	—	—	1	—	—	11
飛島甲勝浦乙	4	3	1	1	—	2	27

図5 飛島地区別産業大分類別就業者数の割合

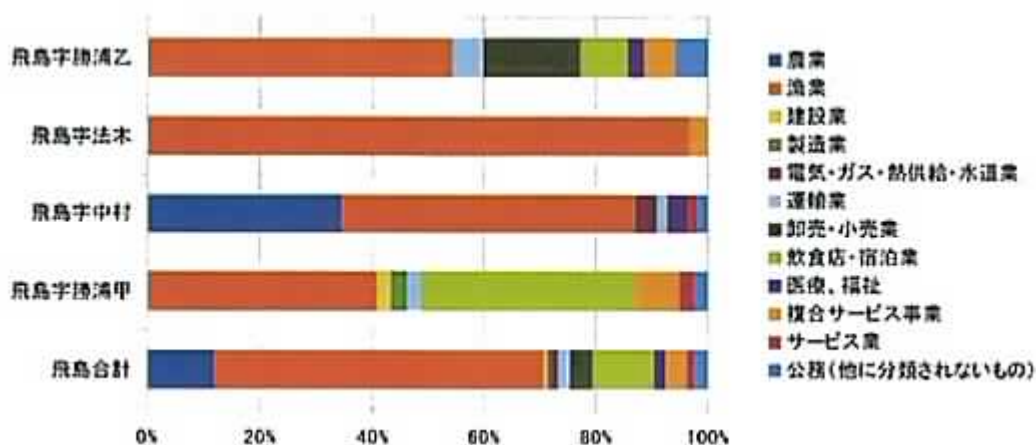
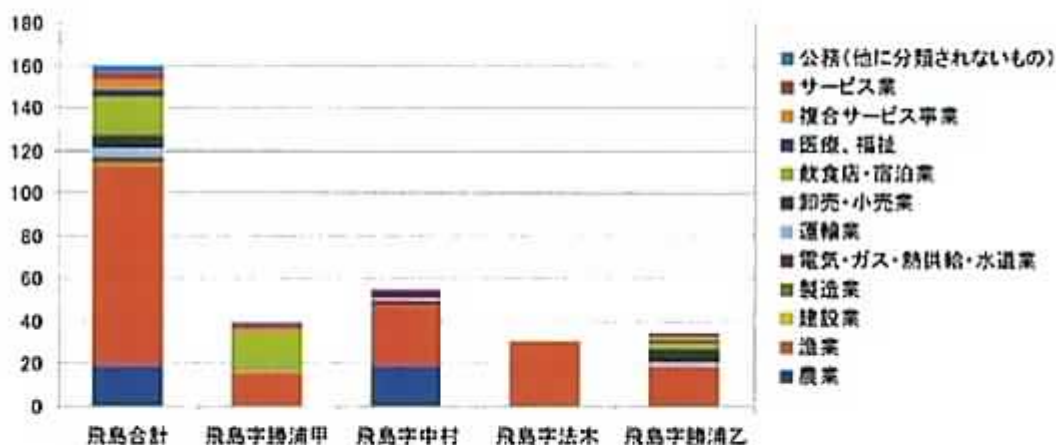


図6 飛島地区別産業大分類別就業者数



(表6、図5、図6は、酒田市「平成17年国勢調査 酒田市結果報告書(確報)」
http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/files/2826_1.pdfより作成)

2-2 山形県離島振興計画の現状

離島振興実施対策地域を含む都道府県は、平成15年～平成24年までの離島振興計画を掲げている。山形県でも離島振興計画を策定した。山形県離島振興計画では、飛島を「漁業と観光の島」と位置づけ、地域資源として本土では見ることのできない暖地系の動植物など貴重な自然資源、島の周囲に広がる豊かな海洋資源、離島という環境が生み出す「癒しを感じる空間」などを挙げている。このような地域資源を活用しながら、これまでのような外発的な発展(外からの支援に過度な依存)ではなく、地域の創意工夫による内発的(自立的)な発展を目指す方向が示された。以下は計画の進捗情報をまとめたものである。

(参考：山形県離島振興計画の進捗状況

<http://www.pref.yamagata.jp/ou/sogoshicho/shonai/337003/04-03huroku.pdf>

及び、東北公益文科大学・山形大学農学部,2009,pp.4-17)

(1) 交通

定期航路と島内交通の整備として、平成 22 年に新定期船「とびしま」が就航した。船型はこれまで運航していた「ニューとびしま」と同型の双胴船で、旅客定員は 150 人となる。航海時間は 10 分短縮されて 80 分となり、バリアフリーにも対応している。

島内の道路整備については、市道、県道の延長については検討に至っていない。島一周道路は地形の問題から実現が困難な状態にあるが、農免農道及び保健保安林作業道の整備により、自動車による一定区域での通行は可能となっている。また、公共的な交通手段についても具体的な検討はされていない。

(2) 情報通信環境の整備

西海岸において平成 19 年に au とドコモの通信用鉄塔の設置が完了し、島内全域において携帯電話の通話が可能になっている。

(3) 生活環境の整備

浄化槽の整備は島民の希望に応じて順次整備している。水道施設についても、計画に沿った更新・改修工事が進められている。

また、有線放送、防災行政無線はすでに整備済みであるが、災害発生時の多様な連絡手段のいっそうの確保が検討されている。

(4) 医療・保健・福祉の連携強化

医療については、へき地診療所に医師 1 名が常駐しており、引き続き医師確保に努めている。介護保険サービスの実施例は表 7 の通りである。また、計画では、離島環境を活かした健康保養地づくりの検討が挙げられている。平成 21 年に移住してきた家族によって介護サービスも始められている。

表 7 飛島での介護保険サービスの実施

平成 15 年度	離島における介護保険制度のサービスを実施。
平成 16 年度	島民向け「訪問介護員 (3 級) 養成研修」を開催。11 人が資格取得。
平成 18 年度	研修受講者を中心に「もちのきヘルパー会」を組織。配食サービスなどを実施。

東北公益文科大学・山形大学農学部 (2009) pp.13-14 より表を作成

(5) 国土保全

高潮対策などの海岸事業を計画。治水事業は平成16年度に完了している。治山事業も計画通りに進捗しているが、今後も継続していく必要がある。また急傾斜崩壊対策事業も平成24年度に完了を予定している。

(6) 教育・文化・歴史

酒田市教育委員会主催の飛島いきいき体験スクールなど、島外の小中学校や各種団体による自然体験学習活動の拠点として学校施設が活用されている。

2-3 とびしま未来協議会と緑のふるさと協力隊

島民、島の応援団（市民、NPO、大学など）、酒田市、庄内総合支庁により構成される「とびしま未来協議会」が2011年（平成23年）に発足した。2-1の通り、飛島は人口減少、高齢化など、離島コミュニティの維持が危ぶまれるような多くの問題を抱えている。このような中、東北公益文科大学と山形大学農学部によって、飛島の離島振興調査が実施された。飛島の現状・課題の分析が行われ、その結果、島内外との多様な交流を図ることや、島づくりのための合意形成の場づくりがこれからの離島振興にとって重要であることが示された。そして発足したのがとびしま未来協議会であり、合意形成のもとに、総合力による事業を運営・実施、または協議、支援していくことを目的としている。平成23年度の協議会の主要協議テーマは「U・Iターン移住者誘致等」であった。

第2回とびしま未来協議会（平成23年8月22日）では、外部人材活用事業について会議が行われ、外部人材として「緑のふるさと協力隊」を各地区に1人ずつ配置することが考えられた。「緑のふるさと協力隊」はNPO法人地球緑化センターが運営する、農山村に興味を持つ若者を地域活性化をめざす地方自治体に1年間派遣するプログラムだ。活動分野は多岐に渡り、農作業だけでなく特産品づくりや地域行事・イベント、施設運営の手伝いなどがある。これは三島交流会で新潟県粟島が毎年2名ずつ受け入れ、比較的成功していることを知って、飛島も各地区に配置してはどうかと提案された。

島民の協力隊員へのニーズは多く、春から冬にかけて手伝ってほしいことの例がたくさん挙げられた。飛島の産業といえば漁業と観光であるが、それらを手伝ってほしいのはもちろんのこと、農作業やイベントの復活、企画などから、雪かきや1人暮らしの方との相談と会話によるコミュニケーションなど、協力隊員へのニーズは多岐に渡る。また、どんな隊員に飛島へ来てほしいかという質問項目では、40代～50代が一番多かった。

第3章 全国の離島の移住対策

3-1 離島振興計画の最終報告

平成23年5月に、離島振興計画フォローアップの最終報告が行われた。そのうち、定住環境を整えるために地方公共団体が行ってきたことの報告があった。それによると、地方公共団体では、定住環境の整理のために空き家情報や移住者向けの相談窓口の設置、UIJ ターン者への住居費用の一部補助など、様々な取り組みを行っていることが分かる。これらは人口減少を食い止めるまでには至っていないが、一部の離島では成果があらわれているようである。離島全体として、平成15年～平成21年の7年間で、UIJ ターンに関する取り組みにより行政で把握できた人数は1,027人であるという。また、少なくとも1人以上のUIJ ターン者がいた離島は47島であり、全体の約18%にあたる。定住のための条件として、働く場の確保・創出が問題であるという声が多い。

また、各自治体に取り組、成果、課題、今後の意向等の把握を目的として、有人離島を所管する都道府県及び市町村に対してアンケート調査が実施された。調査の対象は平成22年4月1日時点の有人離島を所管する25都道府県及び108市町村である。このアンケート調査の結果、これまで重点的に取り組んできたこととして「インフラ整備」「観光・交流」「島外交流」の3つが最も多かった。今後の取り組みとして、「観光・交流」「産業」「島外交通」の3つを重点的に行う予定だ。また、国への支援については、「島外交通」「医療」「インフラ」の分野での期待が大きい。自治体の自己評価では「インフラ整備」「生活」「医療」の分野でこれまでの取り組みに対する評価が高く、まずは島民の生活環境を整えることから始まり、今後定住への取り組みを行っていくように感じる。

(参考：国土交通「離島振興計画フォローアップ(最終報告)説明参考資料」

<http://www.mlit.go.jp/common/000143934.pdf>

及び、国土交通省「離島振興計画フォローアップ(最終報告)」

<http://www.mlit.go.jp/common/000143935.pdf>

3-2 インターネットにおける全国の離島定住情報

離島を集める方法として、情報通信が発達した今日、インターネットの活用が最も手軽な方法だ。離島におけるブロードバンドの利用も普及してきており、利用できない離島は258島のうち10島のみで、島内でもブロードバンドが様々な分野で活用されている。だからこそ離島から情報を発信し、定住に関する様々な情報を積極的に公開していくべきだろう。

そこで筆者は、離島振興対策実施地域である島の自治体(市町村)のウェブサイトを見て、どの程度移住・定住に関する情報が掲載されているのか調べてみた。参考にするのは自治体の公式ホームページと、そこからリンクが張られてあるウェブページだ。まず、自治体のあり方の違いとして、離島を一部離島と全部離島に大別した。さらに調査項目の分類として、「空き家、分譲地等の情報提供」「空き家、分譲地等の補助制度」「移住相談窓

口「移住体験」「移住者の声」の5項目を作った。

表8 定住情報の項目説明

全部離島	島がそのまま自治体となっている。
一部離島	島の自治体が本土と一緒にいる。
空き家、分譲地等の情報提供	移住・定住者向けの空き家や分譲地等の情報を自治体のホームページやそれに付随するウェブページに掲載している。又はNPO等で詳しく掲載しており、そのページが自治体のホームページからリンクされている。
空き家、分譲地等の補助制度	移住・定住者向けの空き家や分譲地等の補助金、助成金など、支援制度が整っており、その情報がウェブページで公開されている。
移住相談窓口	移住・定住に関する問い合わせをどこにすればよいのか示してある。
移住体験	移住・定住に関する体験ツアーやプログラムがある。
移住者の声	これまで移住してきた人の体験談等が載っている。

自治体の移住・定住情報をもとに筆者作成

これらの情報が載っていれば、その項目に「○」を、載っていなければ「-」をつけた。また、いずれの情報も載っていなければその島は除外する。「○」が多い自治体ほど、移住・定住に対しての活動が活発的であることがわかる。このようにして表を作り、何らかの情報が載っている地域を一部離島と全部離島に分けて項目をまとめたのが表9である。なお、情報が一切ない地域は以下の表9、表10、図7に反映させていない。

表9 一部離島と全部離島の比較

	自治体数	空き家、分譲地等		移住相談窓口	移住体験	移住者の声
		情報提供	補助制度			
一部離島	39	22	10	33	2	12
全部離島	25	18	4	22	10	16

自治体の移住・定住情報をもとに筆者作成

筆者の把握した限りの自治体（市町村）数107のうち、64の自治体が離島の移住・定住に関する何らかの情報を載せていることがわかった。しかし、空き家情報に関しては調査中であつたり、情報提供していても空き家がない場合もある。また、一部離島だと本土の空き家も掲載されているので、必ずしも離島だけの空き家が見れるというわけではない。さらに移住相談窓口では、離島の移住について受け付けているかはっきりとしない。移住体験においては、島は島でも離島振興対策実施地域に入っていない島であつたり、本土のみであつたりすることも多かった。また、これらの項目が自治体数に対してどれほどの割合なのかをまとめたのが表10で、それをグラフにしたものが図7だ。

表10 一部離島と全部離島の各項目における自治体数に対する割合

	自治体数	空き家、分譲地等				
		情報提供	補助制度	移住相談窓口	移住体験	移住者の声
一部離島	39	56.4%	25.6%	84.6%	5.1%	30.8%
全部離島	25	72.0%	16.0%	88.0%	40.0%	64.0%

自治体の移住・定住情報をもとに筆者作成

図7 自治体数に対する定住情報の割合

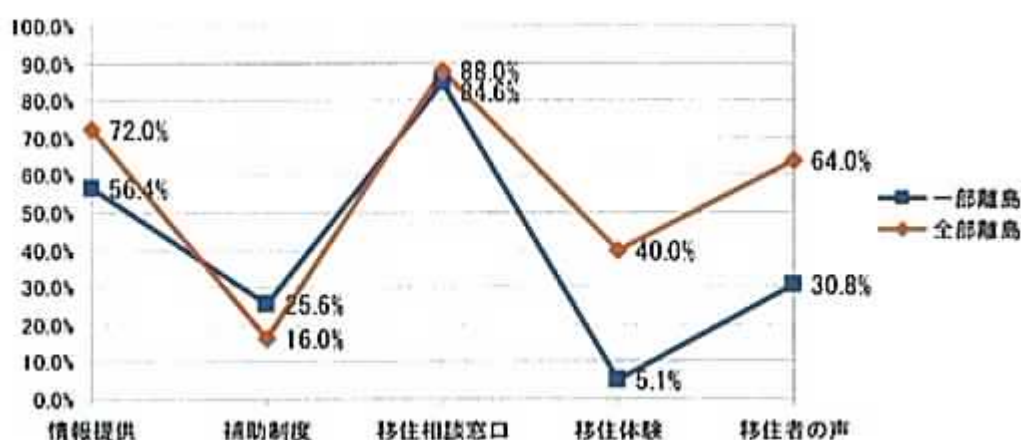


表10から筆者作成

□補足：情報提供は「空き家、分譲地等の情報提供」、補助は「空き家、分譲地等の補助制度」のこと。

表9、表10、図7によると、全部離島のほうが移住・定住促進について活発的だ。空き家・分譲地等の情報提供、移住体験、移住者の声に関しては全部離島のほうが多い。一部離島では本土の情報も提供しているため、移住したいと考えている人にとって離島だけの情報は見つけづらい。補助制度と移住相談窓口に関してはどちらも大差ないようだ。しかし、先程述べたように一部離島の自治体は離島への移住相談も受け付けているのかははっきりとしていない。今後確認していく必要がある。また、移住体験と移住者の声も全部離島のほうが多い。これも離島類型の違いが原因だと思われる。

(1) 一部離島を所有する自治体ホームページの特徴

島以外の情報も混ざるため、島だけの情報を求めるのが難しい。わかりにくいところに情報が置いてあることもあり、探すのが大変だった。また、本土も含めて移住者を求めているという情報が全くない自治体も存在する。特に広島県尾道市の百島では、自治体のホームページを見ても何も載っていないのだが、検索すると農園会社が運営するサイトが出

てきて、そこで移住体験プログラムを紹介している。岡山県笠岡市の笠岡諸島では、NPO法人かさおか島づくり海社が主体となって運営するホームページがある。笠岡市のホームページにも空き家等の情報が載っているのだが、笠岡諸島関係のリンクとしてNPOのページが紹介されており、そこで島情報を集中的に見ることが可能だ。

他にも、長崎県や鹿児島県のように、自治体が情報提供に積極的なところもある。県で離島専用の情報を発信しているし、市町村単位でも一部離島・全部離島含めてほとんどのところが情報を載せている。

このように、一部離島の自治体ホームページには、

1. 本土と島の情報を分けずに載せている。
2. 本土の情報しか載っていない（島の情報がない、調査中等）。
3. 本土と島の情報を分けて載せている。
4. そもそも定住情報がない。

の4つに分類できると考えられる。

（2）全部離島を所有する自治体ホームページの特徴

全部離島は自治体そのまま島になっているので情報を集めやすい。空き家情報があれば、それは島にある空き家なのだとすぐに分かる。グラフのように、移住体験プログラムを作成しやすいのも特徴だろう。だが、それは一部の活動的な自治体のみである。離島振興実施対策地域において、全部離島は83あるのに対し、筆者が情報収集できた全部離島の自治体数は21である。例として、東京都の離島は8つの市町村と9つの有人島が存在するが、いずれもホームページはあるものの移住・定住に関する情報はなかった。一部離島も島の情報提供不足を感じるが、全部離島においてもインターネット上での情報発信は遅れていると言える。

3-3 島の暮らしを発信

移住・定住情報に限らなければ、島の情報を伝えているウェブサイトは多く存在する。特に多いのは観光に関するものだろう。これはほとんどの自治体でも島の観光ページを作っているし、個人で運営されているサイトもある。その中でも島で実際に暮らしている人による生活の情報は移住希望者にとって有用なものである。北海道利尻島では、地域おこし協力隊として島に入り、そのまま定住した人が書くブログが自治体ホームページに掲載されている。鹿児島県の種子島UIターンサポートセンターでは「移住者たちのHP」と多くのリンクが張られている。特にリンクされていない、公式として扱われていないが、石川県の舳倉島の診療日誌ブログなど、島民や移住者が自ら島の暮らしを発信しているところもある。

3-4 移住体験について

島を知ってもらうには実際に来てもらったほうが良い。その島で本当に暮らしていけるかどうか分かるからだ。そのため、移住体験ツアーなどを組んで島を紹介しているという自治体も多い。移住体験にもいくつかの種類があり、以下の表11のように仕事体験、観光案内、住宅案内、島民・定住者との交流の4つに分類した。これらの種類を組み合わせるツアーをしているところが多い。

仕事体験と住宅案内に関しては、島暮らしがどういうものかを知ってもらうのが主な狙いだ。島の暮らしは不便なことも多く、仕事についても、新しく起業する以外は既存のもので働くしかない。特に島といえば漁業が中心なので、仕事の体験にも漁業が多いし、漁師がしたくて島に移住したという話も聞く。

住宅案内については空き家の紹介と短期滞在・中長期滞在の体験に分けられる。短期滞在や中長期滞在は施設に何泊かして島暮らしを体験してもらうのだが、その施設は島にあった空き家を改良したり、専用の建物を作ったり、自治体所有のものを貸したりするなど、滞在に使う建物の種類は様々である。期間も島によって異なり、2~3泊が多いが、他には十数日から最長5ヶ月のものもある。観光案内では島の自然や文化を知ってもらう。単体で行われることはなく、ほとんどがツアーに組み込まれている。

島民・定住者との交流はツアーの最後に行われ、懇談会や交流会と称して島民や移住した人に、これから移住を考えているという人が話を聞いたり相談したりしている。移住するにあたってはどのような人が暮らしているのかを知るのも重要だし、先に移住した人から話を聞くことで注意することなどを学べる。移住体験は移住したいと考えている人にとってはその島を詳しく知ることができるし、受け入れる島民側にとってもどのような人が来たいと思っているのかを知ることができる。

表11 移住体験プログラム

1.仕事体験	島での仕事を体験できる。特に一次産業が多く、農業、漁業、畜産業等の仕事を体験してみて、島での暮らしを知ってもらうということが狙い。
2.観光案内	観光ツアーと似たようなもので、島の伝統芸能や観光地の紹介から、島での遊びを体験するものまで様々。
3.住宅案内(空き家紹介と滞在体験)	空き家の下見や紹介をする。 短期滞在や中長期滞在用の施設に何泊か滞在してもらうことで島での暮らしを体験してもらう。実際の空き家を使うところもあれば、移住者専用の体験施設を作るところもある。期間は様々で、2泊3日や最長5ヶ月のところなど。
4.島民・定住者との交流	ツアーの最後に懇談会や交流会と称して島民や実際に島に移住した人との交流ができる。そこで移住に

	ついて相談したり、意見を交換しあったりすることも可能。
--	-----------------------------

自治体の移住・定住情報をもとに筆者作成

3-5 仕事の募集

移住・定住情報以外にも、地域おこしや島おこし協力隊の募集や、農業・漁業従事者等を募集している島がある。北海道利尻富士町では、漁師になりたいという人を募集している。利尻富士町では人口減少や後継者不足により漁業従事者の減少が問題となっているが、安定した水揚げや資源の維持・増大を図るため、コンブ養殖漁業といった「つくり育てる事業」に取り組んでいる。さらに人員募集も行い、漁業体験研修や漁業就業支援フェアを開催し、ベテランの漁師から漁業を習えることをアピールして漁師に興味がある人を募集している。

(参考：利尻富士町「観光ガイド 利尻で漁師になりたい方を募集します！」)

<http://www.town.rishirifuji.hokkaido.jp/guide/ryousi.html>

3-6 しまづくりサミット

平成23年、池袋サンシャインシティにて、アイランダーと同時開催されたのがしまづくりサミット2011『挑戦できる島づくりの実現に向けて』だ。これは新しい離島振興の実現に向けて提言をまとめたもので、その中でも移住に関する問題がいくつか挙げられた。

まず、都会の人間は島に憧れを持ってきてしまい、実際に住んでみると幻滅するというイメージギャップにより、移住の失敗談が語られた。これは移住してもらいたいという思いで良い情報ばかりを提供し、移住希望者の期待値を上げ過ぎてしまうのだ。インターネットでもパンフレットでも、情報提供においては島の本当の生活を知ってもらうためにも、明確な情報発信が必要となる。また、島民にとっては当たり前のことでも、移住者にとっては普通ではないこととして、『島に病院がなく、船で何時間もかけて本土の病院へ行く』ということだ。さらによそ者は何年経ってもよそ者と思われ、それが孫の代まで続くという話もあった。これにはよそ者としてのアイデンティティーを持ち、よそ者視点で島を見ていけばよいのではないかという意見があった。最後に、島内で地区ごとの対立があり、ギスギスしていて入りづらいという課題もあり、これは飛島にも少し当てはまることだろう。勝浦、中村、法木と分かれているため、昔は対立していたこともあった。島外者にとっては、島の中が区分けされているとは知らないし、その地区の人間というよりその島の人間という考えになるので、このような対立には辟易してしまう。島そのものを良くしていこうという考えの下、島民同士が仲良くしていく必要がある。

その他、離島の振興例として愛知県南知多町の日間賀島の現状を紹介された。日間賀島は面積0.77k㎡、周囲約5.5kmと飛島よりも小さい島だ。しかし、その人口は2,155人とかなりの人数で、島でありながら人口減少が少ないことも特徴だ。その要因として、島民が島に末代まで住み続けたいという思いを持つことや、漁業を孫の代まで続けたい、島が

良くなれば自分も良くなるという考えを持って行動していることが挙げられた。さらに島民だけでなく、漁協も漁業者のために積極的で自立した活動を行い、また観光を支援することで漁師の妻にも働き場を提供している。観光業者も、自社の利益追求だけでなく、「島が良くなるか、ならないか」で判断しており、漁業との一体化を進めている。このように、島外の企業と連携して観光の魅力づくりや島づくりを行っていることが日間賀島の特徴だ。「地域の『自慢』を見ることが観光」として、島内外が一致団結して島を良くしようと考えている。移住促進においても、島を良くしたいという思いが最も必要であろう。

第4章 全国の離島から学べること

4-1 インターネットでの情報提供

4-1-1 公式ホームページを作る

現代社会において、インターネットは情報を集めるための重要な媒体となっている。観光地の情報もインターネットを調べればすぐにたくさんの情報が出てくる時代だ。

それでは、飛島を検索するとどのような情報が出てくるだろう。真っ先に表示されるのは社団法人酒田観光物産協会の運営する酒田観光ガイドだ。そこでは飛島の概要や定期船の運航ダイヤ、自然や釣り情報等の観光に関することが載っている。観光に関する基本的なことならここを見ればすぐに分かる。他にも、県や市のホームページにも飛島の観光関係について載っている。しかし、観光以外のこととなると探すのが難しくなる。例えば飛島を観光して移住してみたいと思った人がいたとする。県や市のホームページで移住について調べてみるが、飛島に限定した情報は掲載していないので、直接電話して聞く以外に方法がない。酒田市にも「U1」ポータルサイトがあり、空き家情報等について発信しているのだが、そこに飛島のことはないし、今後空き家情報が載るのかも不明だ。飛島だけの情報を求めたいとき、どうしても不便になってしまう。

そこで、飛島専用の移住・定住情報を掲載するウェブサイトを作ってはどうか。現在、飛島について情報を発信しているウェブサイトは観光関係がほとんどである。観光で飛島を知ってもらい、実際に飛島に来て遊んでもらったり、レジャー体験してもらったりするのもいいが、飛島でも移住者を募集しているのだということを知ってもらいたい。兵庫県南あわじ市では、市と社団法人とNPO法人が協働で運営している定住情報のウェブサイトがある。幸い、飛島には島での活動も行っているNPO法人やとびしま未来協議会がある。酒田市だけでは手が回らないのであれば、その団体と協力してウェブサイトを立ち上げることも可能なのではないだろうか。

4-1-2 島の様子を伝える

各島の取り組みを見ていると、島民や島に移住した人の運営するブログ・Twitterなどがあり、そこから島の様子を知ることができる。新潟県粟島などでは島の様子を伝えるブログがある。北海道利尻島（利尻町）では地域おこし協力隊の活動を経て島に移住した方のブログが利尻町公式ホームページから行くことができ、現在でも随時更新されている。このように、島の様子を伝えることも島を知ってもらうことにつながり、移住希望者にとっては移住後のイメージを明確にできるという効果がある。さらに島民と島外者とのコミュニケーションツールにもなるだろう。ただし、飛島の島民はほとんどインターネットを使っていないので、そこは島の応援団が支援していく必要がある。

飛島にも東北公益文科大学が運営する「飛島ふあんくらぶ」やNPO法人パートナーシップオフィスのウェブサイト、飛島の旅館である沢口旅館のホームページ、しまの家通信など、飛島の活動や島の様子を伝えるウェブページはたくさんある。そこで、酒田市のホー

ムページから、それらのページに行けるようにすることで、移住希望者やそれ以外の人々にも広く公開できるだろう。さらに飛島に住んでいる人々や、実際に移住した方の声などを載せることで、島内の生活を詳しく知らせることができる。

4-1-3 飛島での移住体験

全国の離島で行われている移住体験ツアーを参考にしてみると、飛島では仕事体験として漁業や農業、観光業としての旅館経営などが当てはまる。観光案内は飛島の自然や名所を案内する。住宅案内は難しいだろう。飛島に空き家はたくさんあるが、貸してもいいという人は少ない。現在空き家となっている建物は本土に引っ越し、飛島に戻ってこないものが多い。今回、緑のふるさと協力隊を募集するにあたって、NPO 法人パートナーシップオフィスの方が協力隊員の泊まる空き家を探したのだが、どの人からも断られてしまったのだという。それとは少し違うが、もし移住者が来るとしたらどのような人に来てもらいたいかということを経島の人に聞いたときに、身元がしっかりとしている人という声があった。飛島に限らず、離島という閉鎖的空間の中で、わけの分からない人が島に来るのは不安になるのかもしれない。空き家を利用できれば良いが、できない場合の対策として、短期滞在用の建物を建てている島や、空き家を用意している島があり、飛島もいずれはそのような建物を用意してみてもどうだろうか。島民・定住者との交流については、移住者誘致に積極的な島民や移住してきた家族もいる。新しく移住したいという人と意見交換などができれば島民にとっても良い刺激になり、島の活性化につながるかもしれない。また、NPO が移住体験ツアーを行っている島もあり、これからは行政に頼らず島民たちが島を良くして行こうという思いが必要になってくるのではないか。これはインターネットでの情報発信に限らず、パンフレット等で広報するのもよい。

4-2 島民のイベントへの参加

離島を宣伝する大規模なイベントとして、東京池袋で開催されるアイランダーがある。そこでは各離島の島民たちがブースに立って島を宣伝したり、島の商品を売ったりして、観光客との交流の場となっている。移住の相談を受け付けている島もあり、何人かの客が話を聞いている光景を見た。2009年から飛島も参加を始めたが、当初の2年は島民が参加することがなかった。東北公益文科大学のゼミ生等、島の応援団だけで飛島を宣伝していた。

筆者も2回参加したが、1回目は飛島の人はいなかった。他の離島のブースを見てその島の人たちが話しているのを聞いていると、飛島も島の人に参加してもらいたいと感じた。ブースに来た客からも島の人ではないのかと聞かれ、否定するたびにがっかりされた気がした。また、旅館・民宿の値段など、事前に調べておかないとわからないようなことも聞かれた。2回目は飛島の沢口旅館の夫婦が参加してくれた。ブースに来たお客さんの中にはその旅館に泊まったことがあると言う人がいて、沢口夫妻と話が盛り上がっている様子

を伺えた。さらに他の島のブースを見て、奥さんのほうからブース改善のアドバイスも聞くことができた。旅館に泊まっていたお客さんが飛島で大きな寒鯛を釣り、その魚拓をブースに飾ったらどうかというものだ。他の島を見るとどこも似たような感じで、そのような魚拓を飾るとインパクトがあつていいかもしれないと言っていた。飛島にこもるだけでなく、このようなイベントに参加することで他島の様子から刺激を受け、良いアイデアを出すことができるのではないか。

4-3 飛島のUターン者の意見

飛島には、飛島の出身でありながら一度島を離れ、また飛島に戻ってきたという方（Uターン者）がいる。なぜ島に戻ってきたのか、UターンやIターンが増えるにはどのような制度があればいいのかなどのお話を聞き、以下にまとめた。

日時：2011年8月22日 13:00～14:00

場所：和島氏宅

対象：和島みよ子氏

和島氏は子供が高校生の時に家族で飛島を離れた。夫が東京勤めのため、最初は東京に住み、異動に伴って酒田に移り住んだ経験を持つ。

(1) 飛島に戻ってきた理由

夫が漁師の仕事に戻りたいと考え、さらに母親も飛島に戻りたかったため、やむなく飛島へ移住することになった。和島氏自身はそれほど戻りたいと思わなかったようだ。

(2) 戻ってきてからの生活

飛島では夫婦共同で漁の仕事をするのが普通だが、和島氏が飛島に戻ってしばらくの間は、夫は兄と漁に出ており、さらにその手伝いは兄の妻がしていたため、和島氏は手伝わなくてもよかった。だが夫が漁でひとり立ちをしてから、和島氏も本格的に漁と一緒にするようになったようだ。このとき和島氏は65歳だった。

漁については夫婦2人だけで行うため、かなり大変だそうだ。特に6月のカレイ網は海底に仕掛けた網に様々なものが引っかかってしまい、それを外すのが最も大変で重労働だそうだ。漁の手伝いをしてくれる人がいれば、もう少し楽にできるかもしれないと和島氏は言っていた。

(3) Uターンとこれからの生活

和島氏は月に1度、酒田に住んでいる娘のところに行く。和島氏は東京、酒田と暮らした経験があるため、本土での生活は息抜きになるらしい。もしずっと飛島に住んでいたら

そんなことは思わなかっただろう。また、できればある程度体が動くうちに酒田に移りたいと考えているらしい。さらに、Uターンは妻が飛島出身でなければ難しいと思うと言っていた。

日時：2011年8月22日 17:30～22:00

場所：とびしま総合センター

対象：渋谷聡氏

渋谷氏は酒田市の本土出身で、飛島に移住してきた人だ。Iターンについてお聞きしたところ、移住に関するアドバイスをいただいた。行政がその気になれば市職員を派遣するときに、子供がいる人を家族で派遣することができるはず。特に、飛島には小中学校があるため、義務教育に関しては十分に受けられる。このように、U・Iターンでなくても定期的に島に新しい人を入れることができ、島の活性化につながるのではないだろうか。

日時：2011年8月23日 9:00～10:00

場所：とびしま総合センター

対象：佐藤勝一氏

佐藤氏は中学卒業後に漁師となり、北海道へ出稼ぎに行っていた。飛島へは年末年始に戻るだけで、あとは北海道で漁船に乗り漁師をしていた。しかし、体調を崩してからは酒田に戻って漁師を続け、平成6年に飛島に戻ってきた。その頃、子供がまだ高校生だったので妻と子供は高校卒業後まで酒田に残り、佐藤氏だけが先に飛島へ戻った。子供が卒業後は妻も飛島へ渡った。なお、妻は庄内町出身である。

(1) 飛島に戻ってきた理由

飛島で暮らしていた両親のうち、父親が亡くなり母親が1人になってしまったことから、勝一さんは飛島に戻ることにした。また、それまで飛島を支えてきた人たちへの思いに応え、今度は自分が飛島を支えようという決意もあった。

(2) Uターンについて

飛島出身者の中でも長男で今も漁業に携わっている人には、船を下りたときに飛島に戻ってきてほしいと思っている。飛島に戻ってくればまだ働けるからだ。特に、長男は継ぐ家もあり、漁業権も存在する。これは、飛島では長男であれば、酒田に住所を置いたとしても、飛島の漁業従事者として扱い、漁業権を残すことになっているからだ。だから長男

の人には島に戻ってきたもらいたいという思いが佐藤氏にはある。しかし、戻ってきたいと思っても妻が断るという例がある（項目（3）を参照）。それにはまず飛島に来て暮らしてみしてほしいと佐藤氏は言っていた。

（3）Iターンについて（次男や三男など漁業権を持たない人）

佐藤氏の住まう中村地区では、部落民が全員よいと認めた場合、誰であろうと島に定着する気持ちがあれば、漁業権を与えるという取り決めをした。10年ほど前、島出身の次男の人が飛島に戻ってきたいという希望があったため、このような取り決めをしたそうだが（結局、その人は妻の賛成を得られず移住してこなかった）。漁業権は移住して90日間漁業に従事すると与えることができる。さらに寺の維持費用なども分担してもらうことになる。このような取り決めは飛島では新しい考えだった。

（4）飛島の漁師について

昔は中学を卒業後、すぐに漁師になる子供が多かった。子供にとって漁師は夢だったからだ。しかし、高校に行くために飛島を離れる人が増えてくるにつれ、漁師になる人も減ってきた。現在の魚の値段は高度経済成長時代の3分の1以下で、漁師では食べていけないという時代になった。それでも、飛島で生活するだけならやっていた。だが子供を育て、大学まで行かせるとするなら難しい。そこが若い人が飛島に住まない理由だと佐藤氏は考えている。飛島で生きるだけならいいが、子供を育てることはできない。子供が成人したあとに飛島に来るとするのが一番よい方法ではないか、とのことだった。

第5章 結論—飛島のより良い未来を考える

第3章では全国の離島の定住情報を整理し、インターネットにおいて離島の情報がどれだけ提供されているのかを調査した。一部離島より全部離島のほうが情報発信について活発であることがわかったが、一部離島にも離島専用のページを作るなどして、離島振興に活発的なところはある。それを飛島に当てはめると、飛島は一部離島で、「〇」は1つだけである。いかに飛島がインターネットの情報発信で遅れているかがわかった。移住体験ツアーというようなものもなく、空き家の提供もされていないので、飛島で移住体験したいと思っても旅館や民宿に泊まるしかない。

そこで、第4章で述べたように、定住情報の発信について飛島専用のウェブページを作成するべきではないか。情報発信において大切なのは「正確さ」と「わかりやすさ」であると考え。筆者が調査した全国の一部離島のほとんどに言えることだが、本土と情報が一緒になっているので、離島だけを探すのは大変だ。一応住所は載っているものの、本当に島の住所なのかもわからないので、そのたびにまた検索する必要がある。だからこそ、飛島は飛島として空き家情報などを市内と別に提示するべきではないか。

また、佐藤氏のインタビューによって判明したのは、飛島で生活していく上での子供の進学の難しさだった。飛島の主な産業は漁業と観光であるが、たとえば漁師になりたいと思って若い人が飛島に来たとして、その人の子供の高校・大学進学を考えると、飛島で漁師を続けていては進学金が賄えないということになりかねない。幸い、小中学校が再開中であるため、中学卒業までは子供を島で育てることができる。だが将来を考えると、子供が高校生になったときに家族はどう行動すればよいのか考える必要がある。Uターン者についても、飛島出身者で長男であるなら、飛島に漁業権が残っているので漁師として働けるが、それ以外についてはあまり対策が立てられていない。島に移住したとしても働ける場がなければ意味がない。未経験者でも漁の仕事に携われるような漁業研修などの制度作りを進めるべきである。

同じUターン者で和島みよ子氏にも話を聞いたのだが、妻が飛島出身でなければUターンは難しいと思うとのことだった。というのも飛島の漁師の仕事は夫婦共同で行うことが多く、漁の経験がなければ手伝えないし、とても重労働だからだ。和島氏も漁の仕事は大変だと何度も言っていた。飛島にUターンしようとした人の例では、妻の同意を得られず断念したという。そのような人に対して、佐藤氏はまずは飛島に住んでみてほしいと言った。つまり、飛島にお試し移住をして島の生活を体験してもらうということだ。移住体験を行っている島は多くある。移住体験をしてもらうことで、移住希望者には島のことをより詳しく知ってもらえるし、島民にとってはどのような人が移住を希望しているのか知ることができる。飛島の場合、体験型観光としての漁業体験はあるのでそれを少し発展させればよい。「とびしま暮らし体験ツアー」と名前をつけて、2泊から1週間くらいの日程で飛島の漁業体験や観光案内など、島民がどのような生活を送っているのか体験してもらう。移住相談などを受け付けながら島民との交流をしてもらえれば、飛島のことをより良く理

解してもらえるのではないだろうか。飛島の人にとっても外からの刺激を受けて島をもっと良くしていこうと思うかもしれない。

飛島はこれまで外発的な島づくりに依存してきたため、島民たちが自ら動くという内発的な取り組みが起きにくい。しかし、一步島の外を見れば、頑張っている島はたくさんある。飛島より人口が少なく、面積の小さい島でも、観光情報を発信して人を呼び込もうとしているし、飛島よりも大きな島（佐渡島など）でも、飛島と同じように人口減少や高齢化、進学等による若年者の流出に悩んでいる。だからこそ、離島同士で情報を共有し合い、互いに協力し合えば、移住・定住促進についても素晴らしいアイデアが思いつくのではないだろうか。その一例がアイランダーであり、外にある多くの島を見ることで自分の島を見つめ直すことができ、もっと島を良くしようという活力が生み出されるのである。

また、島を活性化させるための主役は島民であり、筆者を含め、NPOや大学はあくまでサポート役だ。島の未来を守るためには、今、島に住んでいる島民たちが動かなければならない。移住者を迎え入れるように積極的に動かなければ、移住促進は望めず、飛島は無人島になってしまうだろう。しかし先程も述べたようにこれまでの外発的な島づくりや、高齢化の中で島民は活力を失ってしまっている。その活力を生み出すために、我々島の応援団が手伝わなければならない。アイランダーへの参加など、島民のやる気を引き起こすために島の外とつなげる必要があるのだ。

おわりに

「なぜ飛島に移住対策が必要なのか？」

という質問を投げかけられた。そのときはうまく説明できなかった。

飛島が無人島になって困ることはあるのか。島の資源を守るなら自衛隊の基地でも設置すればいいのではないか。これまで酒田市は飛島に振興のためにお金をたくさんかけてきたが、島民は動かず、今まさに衰退の危機に立っているのは自業自得なのではないか。移住者が来て、小学校が再開されたが、その費用にも多額のお金が払われている。飛島は酒田市の足を引っ張っているだけではないのか。それなのに今更この島で死ぬまで暮らしていきたいからとか、島民が困っているから助けてあげたいとかいう感情だけで移住対策を考えていいのか。島に移住したとしてどうやって食べていくのか。漁業をやっていたとしても、子供が大学に入るお金を稼げるのか、子供が大学に行ったあと戻ってくる保証はあるのか。島の未来の若者たちに押し付けていいのか。そのようなことを言われてしまい、私は考え込んでしまった。

確かに、これまで酒田市は飛島のインフラ整備や医療福祉の強化など、たくさんの支援をしてきた。それでも飛島の人口流出は止まらず、島民も現状をあるがままに受け止めて、仕方ないと言って何も行動しないている。支援に使われているのは酒田市民の税金なのに、だ。だが、全て島民の責任であると言っていいのだろうか。行政の支援によって生活水準は随分と向上した。道路は整備され、水道も通り、定期船は新しくなった。しかしそれは島民が行ったものではない。島民が頑張って作ったものではなく、上から与えられたものである。不満を言えば何でも与えてくれるなら、人は自ら動くのをやめてしまう。インフラ整備は大事だが、本当に支援すべきことは島民にやる気を起こさせることだったのではないか。高齢化が進んで島民たちの問題解決能力が低下した今になってそのツケが回ってきた。だからこそ、大学やNPOが飛島の調査をして、島民たちに必要なものが意見を言い合える合意形成の場であることを示した。私たちは島民たちの意見を引き出し、話し合いに持って行かせるための支援者である。主役はあくまで島民だ。しかし島民は高齢者が多いためできることが限られている。そこを助けるために、私は全国の離島ではどのような移住対策があるのかを考えようとこの論文を書いたのだと思う。

全国の離島といっても、一部離島や全部離島に類型され、その中でも行っている定住政策は様々であることが判明した。何もしていない島もあれば、移住者誘致に積極的な島もある。飛島といえば、あまり積極的でない部類に入るかもしれない。しかし、飛島の移住政策は始まったばかりである。とびしま未来協議会により合意形成の場が作られ、2012年に緑のふるさと協力隊がやってくる。飛島のこれからを見守っていきたい。

謝辞

本論文を作成するにあたり、様々なアドバイスや細かなご指導をしてくださった呉尚浩准教授をはじめ、ゼミでたびたびお世話になった林久美子氏、飛鳥調査でご協力いただいた伊藤眞知子教授、澤邊みさ子准教授、小関久恵講師に感謝申し上げます。また、飛鳥の研究でインタビューにお応えくださった佐藤勝一氏や、お話を聞かせていただいた渋谷聡氏、和島みよ子氏等、島民の方々に厚くお礼申し上げます。

参考・引用文献

<書籍>

- ・柏谷昭二 (2010) 『日本海の孤島 飛島』東北出版企画
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔 (2008) 「社会環境調査編」『平成19年度山形県離島振興推進調査(受託研究)報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、山形県庄内総合支庁総務企画部企画振興課
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔 (2009a) 「内発的地域づくりにおける「公益的な民の力」の果たす役割～山形県酒田市飛島の事例を中心に～」『大会予稿集』(日本公益学会) pp.44-47
- ・呉尚浩、林久美子、柴田大輔 (2009) 「離島における内発的地域づくりと「交流の力」～佐渡・粟島・飛島の三島交流会を事例として～」『大会予稿集』(日本公益学会) pp.48-49
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔 (2009b) 『とびしま未来プロジェクト2008報告書』(平成20年度大学まちづくり地域政策形成事業報告書) 酒田市
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔 (2010) 『とびしま未来プロジェクト2009報告書』(平成21年度大学まちづくり地域政策形成事業報告書) 酒田市
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子 (2011) 『とびしま未来プロジェクト2010報告書』(平成22年度大学まちづくり地域政策形成事業報告書) 酒田市
- ・財団法人日本離島センター (発行年不明) 『日本の島々が果たす役割』
- ・財団法人日本離島センター (2010) 『島の将来を考える研究会 報告書』
- ・柴田大輔 (2009) 「2009年度(平成21年度)修士論文 離島の地域づくりにおける「公益的な民の力」の果たす役割について～山形県飛島と新潟県粟島の事例研究から～」
- ・東北公益文科大学・山形大学農学部 (2009) 『平成19年度離島振興推進調査(受託研究)報告書』
- ・山内道雄 (2007) 『離島発生き残るための10の戦略』日本放送出版協会

<ウェブページ>

- ・国土交通省「200カイリ排他的経済水域の試算結果」(2012.1.11 取得)
<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/pdf/haita.pdf>
- ・国土交通省「離島とは(島の基礎知識)」(2012.1.11 取得)
<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/ritoutoha.html>
- ・国土交通省「離島振興計画フォローアップ(最終報告)説明参考資料」(2012.1.11 取得)
<http://www.mlit.go.jp/common/000143934.pdf>
- ・国土交通省「離島振興計画フォローアップ(最終報告)」(2012.1.11 取得)
<http://www.mlit.go.jp/common/000143935.pdf>
- ・国土交通省「離島振興対策実施地域一覧」(2012.1.11 取得)
<http://www.mlit.go.jp/common/000146874.pdf>

- ・酒田市「住民基本台帳資料」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/2820.html>
- ・酒田市「平成 17 年国勢調査 酒田市結果報告書(確報)」(2012.1.11 取得)
http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/files/2826_1.pdf
- ・酒田市(2007)「平成 17 年国勢調査 酒田市結果報告書(確報)」(2012.1.11 取得)
http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/files/2826_1.pdf
- ・酒田市観光物産課・社団法人酒田観光物産協会「酒田観光ガイド」(2012.1.11 取得)
<http://www.sakata-kankou.gr.jp/tobishima/tobishima.html>
- ・「酒田市飛島診療所」(2012.1.11 取得)
<http://www.hospital.sakata.yamagata.jp/tobisima/>
- ・沢口旅館「ようこそ飛島へ」(2012.1.11 取得) <http://www5d.biglobe.ne.jp/~sawa/>
- ・しまの家「しまの家通信@web」(2012.1.11 取得) <http://tobishima.info/>
- ・特定非営利活動法人パートナーシップオフィス(2012.1.11 取得) <http://npo-po.net/>
- ・東北公益文科大学「飛島ふぁんくらぶ」(2012.1.11 取得)
<http://homepage3.nifty.com/GOKEN-KOEKI-U/tobishimafanclub/>
- ・山形県(2003)「山形県離島振興計画(平成 15 年度～平成 24 年度)」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.yamagata.jp/ou/sogoshicho/shonai/337003/04-02huroku.pdf>
- ・山形県「山形県離島振興計画の進捗状況」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.yamagata.jp/ou/sogoshicho/shonai/337003/04-03huroku.pdf>

<全国の離島定住情報ウェブページ>

●北海道

- ・厚岸町「北海道厚岸町」(2012.1.11 取得) <http://www.akkeshi-town.jp/>
- ・奥尻町「暮らし | 住宅・定住 | 奥尻町への移住相談窓口」(2012.1.11 取得)
http://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/hotnews_view.php?id=67
- ・羽幌町「定住促進情報」(2012.1.11 取得)
http://www.town.haboro.lg.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AC01000&WIT_oid=B2nBPROS6fnRWQoA2TCr1Wr74q&m=1&d=
- ・利尻富士町「観光ガイド 利尻で漁師になりたい方を募集します！」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.rishirifuji.hokkaido.jp/guide/ryousi.html>
- ・礼文町「礼文町」(2012.1.11 取得) <http://www.town.rebun.hokkaido.jp/>
- ・利尻町「利尻町空き家情報バンク」(2012.1.11 取得)
http://town.rishiri.jp/modules/pico1/index.php?content_id=100
- ・y・hagiwara「利尻町地域おこし協力隊員活動記」(2012.1.11 取得)
<http://town.rishiri.jp/modules/d3blog2/>

●宮城県

- ・石巻市「離島振興」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/sougouseisaku/tiikisinkou/05ritou.jsp>
- ・女川町「東日本大震災に関する女川町情報発信サイト」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.onagawa.miyagi.jp/>
- ・気仙沼市「気仙沼市公式 Web サイト」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.kesennuma.lg.jp/www/toppage/00000000000000/APM03000.html>
- ・塩竈市「島暮らし」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.shiogama.miyagi.jp/html/kankou/urato/urato-akiya/index.html>

●山形県

- ・酒田市「おいでよ酒田へ！・UIJ ターン情報・相談窓口」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/seisaku/suishin/21022.html>
- ・山形県「すまいる山形暮らし情報館(山形への移住情報)」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.yamagata.jp/yilife/>

●東京都

- ・青ヶ島村「青ヶ島村ホームページ」(2012.1.11 取得)
<http://www.vill.aogashima.tokyo.jp/>
- ・大島町「東京都大島町公式サイト」(2012.1.11 取得) <http://www.town.oshima.tokyo.jp/>
- ・神津島村「神津村役場」(2012.1.11 取得) <http://vill.kouzushima.tokyo.jp/>
- ・利島村「東京都利島村ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.toshimamura.org/>
- ・新島村「新島村役場ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.niijima.com/>
- ・八丈町「八丈町公式サイト」(2012.1.11 取得) <http://www.town.hachijo.tokyo.jp/>
- ・三宅村「三宅村役場」(2012.1.11 取得) <http://www.miyakemura.com/>
- ・御蔵島村「御蔵島村公式ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.mikurasima.jp/>

●新潟県

- ・粟島浦村「粟島浦村」(2012.1.11 取得) <http://www.vill.awashimaura.lg.jp/>
- ・佐渡市「佐渡に遊びに来てみよう！住んでみよう！」(2012.1.11 取得)
<http://sougo.city.sado.niigata.jp/kikaku/teijyusokushin/teiju/sundemiyou.jsp>

●石川県

- ・りょーた「舳倉島診療日誌」(2012.1.11 取得) <http://hegura.blog60.fc2.com/>
- ・輪島市「輪島市ホームページへようこそ」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.wajima.ishikawa.jp/>

●静岡県

- ・熱海市「熱海市ホームページ」(2012.1.11 取得)

<http://www.city.atami.shizuoka.jp/www/toppage/000000000000/APM03000.html>

●愛知県

- ・愛知県「あいちの離島 PR 大作戦！ コマーシャル映像」(2012.1.11 取得)

<http://www.pref.aichi.jp/0000029561.html>

- ・西尾市「ようこそ佐久島へ Iターン情報」(2012.1.11 取得)

http://www.japan-net.ne.jp/~benten/i_turn/index.html

- ・南知多町「南知多町」(2012.1.11 取得)

<http://www.town.minamichita.lg.jp/main/index.html>

●三重県

- ・志摩市「伊勢志摩国立公園 志摩市のホームページ」(2012.1.11 取得)

<http://www.city.shima.mie.jp/>

- ・鳥羽市「鳥羽への定住を応援します」(2012.1.11 取得)

<http://www.city.toba.mie.jp/kikaku/teijuu/shoureikin.html>

- ・鳥羽市「離島振興」(2012.1.11 取得)

<http://www.city.toba.mie.jp/shisei/ritou/index.html>

●兵庫県

- ・財団法人淡路島くにもみ協会「あわじ暮らし総合相談窓口」(2012.1.11 取得)

<http://www.kuniumi.or.jp/awajigurashi/index.php>

- ・姫路市「離島振興について」(2012.1.11 取得)

http://www.city.himeji.lg.jp/s20/2212382/_21372.html

- ・南あわじ市「田舎満喫南あわじ」(2012.1.11 取得) <http://inaka-mankitu.com/>

●島根県

- ・海士町「海士町への移住をお考えの皆さまへ」(2012.1.11 取得)

<http://www.town.ama.shimane.jp/ui.html>

- ・隠岐の島町「定住・交流」(2012.1.11 取得)

http://www.town.okinoshima.shimane.jp/informations/group_list/10

- ・公益財団法人ふるさと島根定住財団「しまね UI ターン総合サイト | くらしまねっと」(2012.1.11 取得) <http://www.kurashimanet.jp/>

- ・知夫村「知夫村定住促進支援制度」(2012.1.11 取得)

- http://chibu-vill.com/public/_upload/type017_16_1/file/file_13188114759.pdf
- ・知夫村「知夫村産業振興推進生活支援事業交付制度内容」(2012.1.11 取得)
 - http://chibu-vill.com/public/_upload/type017_16_1/file/file_12706872129.pdf
- ・西ノ島町「島で暮らそう！」(2012.1.11 取得)
 - http://www.town.nishinoshima.shimane.jp/shimade_kuraso/index.html
- ・西ノ島町「漁業後継者確保対策事業」(2012.1.26 取得)
 - http://www.town.nishinoshima.shimane.jp/shimade_kuraso/gyogyo_kokei/index.html

●岡山県

- ・岡山県「岡山県の離島」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.pref.okayama.jp/kikaku/chishin/ritou/10kojimasyotou/index.html>
- ・岡山市「空き家情報バンク」(2012.1.11 取得)
 - http://www.city.okayama.jp/toshi/jutaku/jutaku_t00002.html
- ・笠岡市「笠岡市定住促進センター」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.kasunaka-teiju.jp/index.html>
- ・倉敷市「倉敷市シニア世代向けポータルサイト」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.city.kurashiki.okayama.jp/dd.aspx?menuid=4953>
- ・備前市「空き家バンク」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.city.bizen.okayama.jp/shimin/benri/seisaku/akiyabannku.jsp>
- ・守屋基範「瀬戸内ど真ん中！笠岡諸島」(2012.1.11 取得)
 - <http://blog.livedoor.jp/kaientai1/>
- ・NPO 法人かさおか島づくり海社「かさおか島づくり海社」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.shimazukuri.gr.jp/>
- ・玉野市「玉野市役所ホームページ」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.city.tamana.okayama.jp/webapps/www/index.jsp>

●広島県

- ・福山市「福山市ホームページ」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/>
- ・尾道市「尾道市」(2012.1.11 取得)
 - http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/www/normal_top.html
- ・有限会社百島農園「瀬戸の島いちごグループ」(2012.1.11 取得)
 - <http://momoshima-nouen.com/index.html>
- ・田中「百島診療所日記」(2012.1.11 取得)
 - <http://momosima.mo-blog.jp/>
- ・三原市「三原市交流・定住情報コーナー」(2012.1.11 取得)
 - <http://www.city.mihara.hiroshima.jp/shisei/kakuka/kikaku/teijyu/tjtop.html>

- ・鷺浦コミュニティセンター「さぎしまのホームページにようこそ！」(2012.1.11 取得)
<http://sagisima.web.fc2.com/>
- ・大崎上島町「大崎上島町のホームページ」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.osakikamijima.hiroshima.jp/>
- ・呉市「空き家バンク」(2012.1.11 取得)
http://www.city.kure.lg.jp/~teizyu/akiya_bank/index.html
- ・呉市「呉市定住支援窓口」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.kure.lg.jp/~teizyu/index.html>
- ・大竹市「大竹市の定住情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.otake.hiroshima.jp/clink/teijyujouhou.html>

●山口県

- ・岩国市「田舎暮らしのみちしるべ」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.iwakuni.lg.jp/www/contents/1245138082340/index.html>
- ・周防大島町「周防大島町 UJI ターン情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.suo-oshima.lg.jp/townguide/uji/uji-turn.htm>
- ・柳井市「UJI ターン情報」(2012.1.11 取得)
http://www.city.yanai.jp/siyakusyo/keieikikaku/uji/uji_top.html
- ・平生町「UJI ターン情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.hirao.lg.jp/home/html/etc/uji/uji.html>
- ・田布施町「U ターン等情報(空き家バンクなど)」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.tabuse.lg.jp/www/genro/00000000000000/1000000000078/index.html>
- ・上関町「定住促進」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.kaminoseki.lg.jp/settlement/settlement.html>
- ・國弘秀人「祝島ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.iwaishima.jp/>
- ・光市「光市 UJI ターン情報サイト 大好き！ひかり」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.hikari.lg.jp/kikakukoho/kikaku/furusato/uji/index.html>
- ・周南市「UJI ターン・団塊世代支援」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.shunan.lg.jp/section/kikaku/uji/uji.jsp>
- ・防府市「ほうふ UJI ターン支援情報サイト」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.hofu.yamaguchi.jp/soshiki/3/uji-shienn-top.html>
- ・防府市「萬島日記」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.hofu.yamaguchi.jp/site/noshima-kom/nosima-nikki.html>
- ・下関市「しものせき定住情報」(2012.1.11 取得)
<http://www2.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/ficity/browser?ActionCode=content&ContentID=1207617400116&SiteID=0>

- ・「蓋井島ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.futaoui.com/index.html>
- ・萩市「萩ふるさとターン応援団・萩定住支援サイト」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.hagi.lg.jp/teijyu/>
- ・生涯現役社会づくり学会「見つけて！やまぐちニューライフ UJI ターン経験者情報」(2012.1.11 取得) <http://www.ymg-uji.jp/taikenmenu.html>

●香川県

- ・香川県「さぬき瀬戸 しまネッ島」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.kagawa.jp/kanko/seto-island/index.htm>
- ・直島町「直島の空き家・空き地情報」(2012.1.11 取得)
http://www.town.naoshima.kagawa.jp/akiya_akiti.htm
- ・高松市「移住・交流の促進」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/16128.html>
- ・土庄町「土庄町空き家情報登録制度」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.tonosho.kagawa.jp/annai/kikaku2.htm>
- ・坂出市「香川県坂出市トップページ」(2012.1.11 取得) <http://www.city.sakaide.lg.jp/>
- ・丸亀市「香川県丸亀市」(2012.1.11 取得) <http://www.city.marugame.kagawa.jp/>
- ・ふれ愛の町ひろしまをつくる会「塩飽広島・手島・小手島合同公式ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.shiwakuhiroshima.com/index.htm>
- ・「さなぎ島へようこそ」(2012.1.11 取得) <http://noburin.moo.jp/sanagi/>
- ・多度津町「多度津町」(2012.1.11 取得) <http://www.town.tadotsu.kagawa.jp/>
- ・三豊市「若者定住促進・地域経済活性化補助金および移住交流促進助成事業」(2012.1.11 取得) http://www.city.mitoyo.lg.jp/forms/info/info.aspx?info_id=7022
- ・「ようこそ栗島ホームページへ」(2012.1.11 取得) <http://homepage.mac.com/silentkids/>
- ・観音寺市「交流定住促進事業」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.kanonji.kagawa.jp/nisei/20/10.html>

●愛媛県

- ・愛媛ふるさと暮らし応援センター「愛媛県で暮らそう！えひめ移住支援ポータルサイト」(2012.1.11 取得) <http://www.e-iju.net/>
- ・上島町「上島町定住促進事業について」(2012.1.11 取得)
http://www.town.kamijima.ehime.jp/life/life_detail.php?lif_id=4123
- ・上島町「上島観光定住ブログ」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.kamijima.ehime.jp/blog/>
- ・上島町島おこし協力隊「活動ブログ」(2012.1.11 取得)
<http://setouchi-k.town.kamijima.ehime.jp/blog/sima/>

- ・今治市「今治市市移住・交流情報 しまなみ海道で新生活を！！」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.imabari.ehime.jp/chiiki/ijyu/index.html>
- ・新居浜市「別子山お試し移住体験事業について」(2012.1.11 取得)
http://www.city.niihama.lg.jp/soshiki/detail.php?lif_id=11529
- ・松山市「移住・交流情報について」(2012.1.11 取得)
http://www.city.matsuyama.ehime.jp/seisaku/1183320_907.html
- ・松山離島振興協会「愛らんどまつやま 松山離島振興協会」(2012.1.11 取得)
<http://island-matsuyama.com/>
- ・大洲市「移住に関する情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.ozu.ehime.jp/sightseeing/migration/index.html>
- ・八幡浜市「移住関連情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.yawatahama.ehime.jp/05banner/ijuu/iju.htm>
- ・宇和島市「宇和島に住みたい 宇和島 UJI ターン情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.uwajima.ehime.jp/kisaiya/index.html>

●徳島県

- ・牟岐町「牟岐町移住交流支援情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.mugitown.jp/ijyuukouryu/ijyu.html>
- ・阿南市「阿南市」(2012.1.11 取得) <http://www.city.anan.tokushima.jp/>
- ・徳島県「徳島県への移住・滞在・観光に関する支援サイト」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.tokushima.jp/ijuu/>

●高知県

- ・宿毛市「移住支援情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.sukumo.kochi.jp/info/ijuu.html>

●福岡県

- ・北九州市「北九州市」(2012.1.11 取得) <http://www.city.kitakyushu.lg.jp/>
- ・宗像市「宗像市公式ホームページ」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.munakata.lg.jp/index.php>
- ・新宮町「ホームー新宮町」(2012.1.11 取得) <http://www.town.shingu.fukuoka.jp/>
- ・福岡市「福岡市ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.city.fukuoka.lg.jp/>
- ・糸島市「福岡県糸島市ホームページ」(2012.1.11 取得) <http://www.city.itoshima.lg.jp/>

●佐賀県

- ・唐津市「唐津市 UJI ターン支援情報」(2012.1.11 取得)

<http://www.karatsu-city.jp/kouhou/uji/index.html>

●長崎県

- ・長崎県「魅力いっぱい！ながさきのしま」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.nagasaki.jp/sima/index.html>
- ・壱岐市「田舎暮らし」(2012.1.11 取得)
http://www.city.iki.nagasaki.jp/modules/ecology/index.php?cat_id=1
- ・対馬市「暮らしとすまい」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/live/>
- ・新上五島町「新上五島町の田舎暮らし (UI ターン) 情報」(2012.1.11 取得)
<http://k10low01.town.shinkamigoto.nagasaki.jp/ui/index.html>
- ・五島市「五島市の田舎暮らし (UI ターン) 情報」(2012.1.11 取得)
http://www.city.goto.nagasaki.jp/pc/policy/index33_01.html
- ・西海市「田舎ぐらし」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.saikai.nagasaki.jp/docs/2011032900020/>
- ・松浦市「UI ターン情報」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.matsuura.jp/www/genre/00000000000000/1000000000018/index.html>
- ・平戸市「田舎暮らし (UI ターン) 情報」(2012.1.11 取得)
http://www.city.hirado.nagasaki.jp/city/info/prev.asp?fol_id=13079
- ・総務省「交流居住のススメ 長崎県平戸市」(2012.1.11 取得)
<http://kouryu-kyoju.net/422070/>
- ・長崎市「ながさき暮らしホームページ」(2012.1.11 取得)
<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/teizyu/index.php>
- ・佐世保市「佐世保市役所」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.sasebo.nagasaki.jp/www/toppage/00000000000000/APM03000.html>
- ・佐世保市「離島就学生助成制度申請書」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.sasebo.nagasaki.jp/www/contents/1012890420700/index.html>
- ・総務省「交流居住のススメ 長崎県小値賀町」(2012.1.11 取得)
<http://kouryu-kyoju.net/423831/>

●熊本県

- ・上天草市「上天草移住情報サイト (2012.1.11 取得)」 <http://iju.kami-amakusa.jp/>
- ・天草市「あまくさライフ 天草 Web の駅」(2012.1.11 取得)
<http://inaka.amakusa-web.jp/>

●大分県

- ・佐伯市「さいき暮らしの UJI ターン情報」(2012.1.11 取得)
<http://town.saiki.jp/uji/index.html>
 - ・姫島村「大分県・姫島村」(2012.1.11 取得) <http://www.himeshima.jp/>
 - ・津久見市「津久見市役所ー公式ホームページ」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.tsukumi.oita.jp/>
- 宮崎県
- ・日南市「日南市 UIJ ターン 空き家・空き地情報バンク」(2012.1.11 取得)
<http://nichinan-uji.jp/>
 - ・串間市「串間市空き家バンク制度」(2012.1.11 取得)
http://www.city.kushima.miyazaki.jp/modules/contents04/index.php?content_id=145
 - ・串間市「新しくしま人のススメ」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.kushima.miyazaki.jp/original/kushimania/index.html>
 - ・延岡市「島の暮らし～島裏島～」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.nobeoka.miyazaki.jp/display.php?cont=111004113909>
- 鹿児島県
- ・鹿児島離島振興協議会「離島情報 しまのサポーター U・I ターンのご案内」(2012.1.11 取得) <http://www.shima-supporter.com/UI/index.html>
 - ・鹿児島県「移住者からのメッセージ (離島編)」(2012.1.11 取得)
<http://www.pref.kagoshima.jp/ac01/pr/korvu/message/ijuritou.html>
 - ・かごしま企業家交流協会「移住者の声」(2012.1.11 取得)
<http://www.kagoshima-kurashi.net/report/>
 - ・長島町「町営住宅検索」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.nagashima.lg.jp/house/default.asp>
 - ・出水市「空き住宅検索」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.izumi.kagoshima.jp/house/default.asp>
 - ・薩摩川内市「定住促進 (よかまちきやんせ倶楽部)」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.satsumasendai.lg.jp/www/genre/00000000000000/1268816498923/index.html>
 - ・種子島 U・I ターンサポートセンター「移住支援 in 種子島」(2012.1.11 取得)
http://www.geocities.jp/seed_islander/
 - ・西之表市「島元気郷たねがしま構想」(2012.1.11 取得)
<http://www.city.nishinoomote.lg.jp/senior-town/senior.html>
 - ・中種子町「移住希望の方へ」(2012.1.11 取得)
<http://town.nakatane.kagoshima.jp/nakatane10/nakatane02.html>

- ・南種子町「南種子町移住推進連絡協議会」(2012.1.11 取得)
<http://www.town.minamitane.kagoshima.jp/ijyuu.html>
- ・屋久島町「移住案内」(2012.1.11 取得)
http://www.yakushima-town.jp/index.php?page_id=66
- ・屋久島パイン株式会社「屋久島の不動産・田舎暮らし・移住のポータルサイト」
(2012.1.11 取得) <http://www.yakushimapain.com/index.shtml>
- ・NPO 法人屋久島移住ネットワーク・緑の風「NPO 緑の風」(2012.1.11 取得)
<http://iju.jp/midorinokaze/>
- ・三島村「定住案内」(2012.1.11 取得)
<http://www.mishimamura.jp/contents/sonmin/curashi/teizyu.html>
- ・三島村「三島村移住体験ツアー」(2012.1.11 取得)
<http://www.mishimamura.jp/contents/kankou/ivent/200911.htm>
- ・十島村「Iターン・Uターン」(2012.1.11 取得) <http://www.tokara.jp/life/ui.html>

飛島の移住・定住促進を考える —全国の離島から学べること—

C1081042

讃岐彩華

はじめに

- * ゼミの活動から飛島のことを調べていくうちに、過疎・高齢化の問題を解決するための方法として、移住対策に興味を持った。
- * また、飛島だけでなく、離島全体がそのような問題に直面していることがわかった。
- * 離島振興計画が平成24年で見直されるため、全国で移住対策がさかんになっている。
- * その中でも、移住者誘致に成功している離島があり、その島から飛島も何か学べるのではないかと考えて調べた。

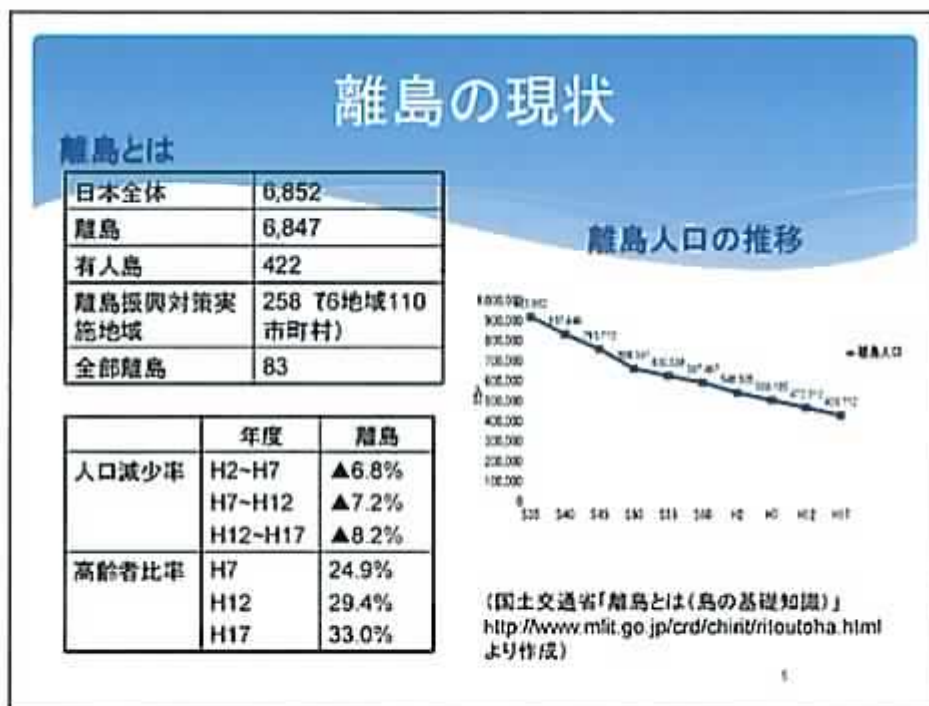
研究の方法・目的

- ＊ 全国の離島の移住対策を調べて、飛島に生かせることはないか模索する。
- ＊ 各離島の自治体がインターネット上で発信している移住に関する情報を収集し、分析する。
- ＊ ゼミ活動によるこれまでの経験や島民へのインタビュー(8月22日、23日)から、飛島に活用できる対策はないか考える。

1

全国の離島の概況

2



離島の役割

地理的 特性	国土・海域確保	国境、領土や領海、経済水域、大陸棚などを確保し、海洋資源を守る
	海の治安維持	密漁や密航、密輸の監視など、海の治安を守る
	海の安全確保	海難救助や緊急時の船の寄航など、海の安全を守る
	食糧確保・補給	魚介類を中心とした食糧確保の拠点となる
自然 特性	生物・生態系保全	様々な生き物の住む環境を守る
	環境浄化・維持	藻場・干潟、森林、農地などが空気や水をきれいに保つ
	アメニティ提供	海のレクリエーションや観光、保養、環境教育の場となる
文化 特性	学習・交流の場提供	地域文化などを生かした体験学習や、相互教育の場となる
	地域社会継承	海などの自然と共に生きる社会、様々な生活文化を育む
	伝統文化保存	固有の祭り、文化財・技などの伝統文化や、独特の景観を守る

(財団法人日本離島センター『日本の島々が果たす役割』pp.3-8より作成)

飛島の現状と課題

とびしま未来協議会の発足

- ・ 平成23年(2011)に「とびしま未来協議会」が発足。
 - ・ それまで飛島には島内の課題を話し合うための合意形成の場がなかった。
- ・ 島民、島の応援団(市民、NPO、大学等)、行政により構成される。
- ・ 合意形成のもとに、総合力による事業を運営・実施、または協議、支援していくことを目的とする。

緑のふるさと協力隊の導入

- ・ 「緑のふるさと協力隊」とは？
 - ・ NPO法人地球緑化センターが運営する、農山村に興味を持つ若者を地域活性化を目指す地方自治体に1年間派遣するプログラム。
- ・ 三島交流会で、新潟県粟島が毎年2名ずつ受け入れ比較的成功していることを知り、飛島も各地区に隊員を1名ずつ配置することを提案。
- ・ 島民が協力隊員へ期待すること
 - ・ 漁業・観光業の手伝い
 - ・ イベントの復活・企画
 - ・ 雪かき
 - ・ 1人暮らしの人との相談と会話によるコミュニケーション
 - ・ などなど…

4

全国の離島の移住対策

10

インターネットの離島情報(1)

- ＊ インターネットの活用＝移住希望者にとって手軽。
- ＊ どのくらいの島が定住情報を公開しているか？
- ＊ 各島の自治体のホームページを調べる。
- ＊ 5つの調査項目
- ＊ 情報があれば「○」、なければ「—」
- ＊ 「○」が多い自治体ほど、離島の移住・定住に対して積極的。

”

インターネットの離島情報(2)

- ＊ 全部離島…島がそのまま自治体となっている。
- ＊ 一部離島…島の自治体が本土と一緒にしている。
- ＊ 5つの定住項目

空き家、分譲地等の情報提供	移住 定住者向けの空き家や分譲地等の情報を自治体のホームページに掲載している。またはNPO等で詳しく掲載しており、そのページが自治体のホームページからリンクされている。
空き家、分譲地等の補助制度	移住 定住者向けの空き家や分譲地等の補助金、助成金など、支援制度が整っており、その情報がウェブページで公開されている。
移住相談窓口	移住 定住に関する問い合わせをどこにすればよいか示してある。
移住体験	移住 定住に関する体験ツアーやプログラムがある。
移住者の声	これまで移住してきた人の体験談等が載っている。

自治体の移住・定住情報をもとに報告者作成

12

インターネットの離島情報(3)

- 107の自治体のうち、64の自治体が離島の移住・定住に関する何らかの情報をインターネット上に載せている。

一部離島と全部離島の比較

	空家率・分譲地等					
	自治体数	情報提供	補助制度	移住相談窓口	移住体験	移住者の声
一部離島	33	22	10	33	2	12
全部離島	25	18	4	22	10	15

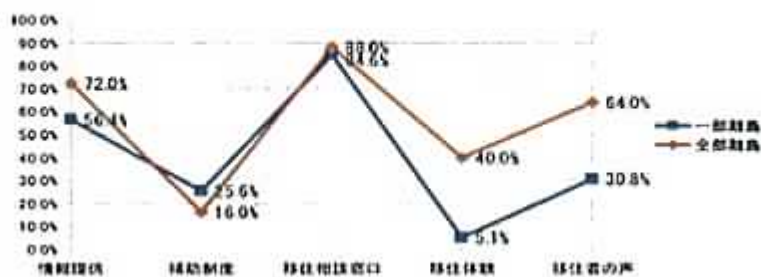
自治体の移住・定住情報をもとに報告者作成

13

インターネットの離島情報(4)

自治体数に対する定住情報の割合

	空家率・分譲地等					
	自治体数	情報提供	補助制度	移住相談窓口	移住体験	移住者の声
一部離島	33	56.4%	25.6%	64.6%	5.1%	30.8%
全部離島	25	72.0%	16.0%	68.0%	40.0%	64.0%



自治体の移住・定住情報をもとに報告者作成

14

インターネットの離島情報(5)

一部離島

- ・ 本土と島の情報を分けずに載せている。本土の情報しか載っていない。
- ・ 本土と島の情報を分けて載せている。そもそも定住情報がない。

全部離島

- ・ 離島だけの情報を集めやすい(島=自治体)。
- ・ 情報を発信しているのは一部の活動的な島だけ。
- ・ 全部離島は83。筆者が情報を確認できたのは21。

15

一部離島の事例(1)

愛知県南知多町日間賀島

- ・ 面積0.77km²、周囲約5.5km
- ・ 人口2,155人、名古屋から70分
- ・ 「たこ・ふぐの島」として有名。
- ・ 島でありながら人口減少が少ない。
- ・ 漁業を生業
 - ・ 島に末代まで住み続けたい
 - ・ 漁業を孫の代も続けたい
 - ・ 島がよくなれば自分もよくなる。
- ・ 漁協
 - ・ 漁業者のために積極的に自立した活動。
 - ・ 観光を支援―漁師の妻に働き場を提供。
- ・ 観光業者
 - ・ 「島がよくなるか、ならないか」で判断。
 - ・ 漁業との一体化。
 - ・ 島外の企業と連携して観光の魅力づくり。
 - ・ 地域の「自慢」を見るのが観光

16

一部離島の事例(2)

岡山県笠岡市笠岡諸島

- ・ 面積15.36km²
- ・ 人口2,315人
- ・ 高齢化率60.4%
- ・ NPO法人主体のホームページあり。
- ・ 島の情報を中心的に見ることができる。
- ・ 空き家情報、移住者ブログ、移住体験ツアー等が紹介されている。

(参考: NPO法人かさおか島づくり海社
「瀬戸内ど真ん中! 笠岡諸島」
<http://www.shimazukuri.gr.jp/>)

広島県尾道市百島

- ・ 周囲約11km
- ・ 人口約600人
- ・ 高齢化率62.8%
- ・ 自治体に情報なし。
- ・ 島内の農園会社が運営するサイトが移住促進。
- ・ 短期滞在型プログラムや長期滞在型プログラムがあり、移住体験できる。

(参考: 有限会社百島農園
「瀬戸の島いちごグループ」
<http://momoshima-nouen.com/index.html>)

17

島の暮らしを発信

- ・ 実際に島に移住した人、ずっと島で暮らしている人などが発信する島の暮らし。
 - ・ 移住希望者にとっては島の生活をイメージできる。
- ・ 北海道利尻町利尻島
 - ・ 「地域おこし協力隊員一島に定住」した人のブログ
- ・ 鹿児島県種子島
 - ・ 移住者たちのホームページが多数あり。
- ・ 石川県舳倉島
 - ・ 毎年半年交代で赴任する医師のブログ。

18

移住体験について

移住体験プログラム

仕事体験	島での仕事を体験できる。特に一次産業が多く、農業、漁業、畜産業等の仕事を体験してみて、島での暮らしを知ってもらうことが狙い。
観光案内	観光ツアーと似たようなもの。島の伝統芸能や観光地の紹介から、島での遊びを体験するものまで様々。
住宅案内	空き家の下見や紹介をする。短期滞在や中長期滞在用の施設に何泊か滞在してもらうことで島での暮らしを体験してもらう。実際の空き家を使うところもあれば、移住者専用の体験施設を作るところもある。
島民・定住者との交流	島民や実際の島に移住した人との交流ができる。そこで移住について相談したり、意見を交換し合ったりすることも可能。

全国の移住・定住情報をもとに報告者作成 19

しまづくりサミット(移住後の問題1) 島民側から見た問題

- ＊しまづくりサミット2011『挑戦できる島づくりの実現に向けて』(平成23年池袋サンシャインシティにてアイランダーと同時開催)
- ・→新しい離島振興の実現に向けて提言をまとめる。
- ・都会の人間は島に憧れを持ってくる。(移住の失敗談)
 - ＊実際に住むと幻滅(イメージギャップ)→島を去る。
 - ＊良い情報ばかりで期待値を上げすぎる。
 - ＊ギャップを感じないよう明確な情報を発信。
- ・移住者の甘えに困っている。
- ・よそ者を祭りに入れるのはちょっとイヤ。

20

しまづくりサミット(移住後の問題2) 移住者側から見た問題

- ・ 病院がない。
 - ・ 船で何時間もかけて病院へ行く。
 - ・ 一移住者にとって普通ではない。
- ・ よそ者は何年経ってもよそ者と思われる。
 - ・ よそ者としてのアイデンティティーを持つ。
 - ・ 移住者の甘えに困っている。
- ・ 地区ごとの対立があり、ギスギスして入りづらい。
 - ・ 島民同士が仲良くする。

21

全国の離島から学べること

22

インターネットを活用

- ・ 飛島専用のウェブページを作る。
 - ・ 移住者を募集しているのだと宣伝。
 - ・ 現状、飛島のウェブページは観光関係のものがほとんど。
- ・ とびしま未来協議会やNPO法人などと協力して作るべきではないか。
 - ・ 兵庫県あわじ市では、市・社団法人・NPO法人が協働で定住情報のウェブサイトを運営。

23

島の様子を伝える

- ・ ブログ・Twitterなどを活用する。
 - ・ 島内の様子を発信し、実際に体験していなくても飛島の生活をイメージしてもらえる。
 - ・ 島民と島外者とのコミュニケーションツール。(ただし、島民のほとんどはインターネットを活用していないのであまり期待できない)。
- ・ 現在の飛島情報発信源
 - ・ 東北公益文科大学の「飛島ふあんくらぶ」
 - ・ NPO法人パートナーシップオフィス
 - ・ 沢口旅館
 - ・ しまの家通信 など

24

移住体験プログラムを作る

- ・ 飛島での移住体験を計画し、島内の生活を知ってもらう。(仕事体験など)
 - ・ 移住後の様子を明確にすることが目的。
- ・ 空き家や宿泊施設を利用して、短期又は長期の滞在プログラムを計画する。
- ・ 島民と移住希望者の交流。
 - ・ どのような人が島に来るのかという島民の不安を解消できる。

25

島民のイベントへの参加 (アイランダー)

- ・ 他島のブースではその島出身の人たちがいる。
 - ・ 飛島はゼミ生など、島出身の人がほとんどいない。
- ・ 客は島に住んでいる人から話を聞きたがる。
 - ・ 島民でなければわからないようなことを質問される。
- ・ 2011年のアイランダーでは島民が参加し、ブース改善のアドバイスを聞くことができた。
 - ・ イベントに参加することで他島の様子から刺激を受ける

〈新たな活力〉

26

インタビュー

27

渋谷聡氏 (Iターン者) 8月22日インタビュー

- * Iターンについて
 - 島にきたとしても、島民に受け入れられなければ見放されるかも。
 - 行政がその気になれば市職員を派遣するときに、子供がいる人を家族で派遣することができるはず。
 - 一飛島には小中学校があるため、教育も受けられる。
 - 一このようにU・Iターンでなくても定期的に島に人を入れる方法がある。

28

W氏(Uターン者) 8月23日インタビュー

- ・ 飛島に戻ってきた理由
 - ・ 夫のT氏が漁師の仕事に戻りたかった。また、母親も飛島に戻りたかった。
 - ・ W氏自身は戻りたいという意思は強くなかったが、母と夫が戻りたいということで戻ることに。
 - ・ 戻ってきてしばらくは、T氏は兄と一緒に漁へ出ている。
 - ・ T氏が独立してから漁と一緒にすることになる。(W氏65歳くらい)

29

W氏(Uターン者) 8月23日インタビュー

- ・ Uターン後の生活
 - ・ 月に1回ほど酒田の娘のところに息抜きへ。
 - ・ W氏は東京暮らしの経験もあり、酒田は息抜きになる。
 - ・ 冬(12月～2月)は自分のしたいことができるので酒田に行きたいとは思わない。
 - ・ できれば体がある程度動くうちに酒田に移りたい。
 - ・ Uターンは妻が飛島出身でないと難しいのではないかと。

30

S氏(Uターン者) 8月23日インタビュー

- ・ 飛島に戻ってきた理由
 - ・ 母親が一人で飛島に暮らしているから。
 - ・ それまで飛島を支えてきた人たちに応えたい。
- ・ Uターンについて
 - ・ 「飛島出身者+長男+今も漁業に携わっている」
=船を下りたあとも飛島に戻ればまだ働ける。
 - ・ 一長男は酒田に住所があっても飛島に漁業権が存在するから。

31

S氏(Uターン者) 8月23日インタビュー

- ・ 飛島に戻りたくても、妻が断る例がある。
 - ・ まず飛島に来て暮らしてみしてほしい。
- ・ Uターンについて
 - ・ 中村では条件付きで漁業権が与えられる。
 - ・ 一島に定住する気持ちあり+部落民が全員了承+移住して90日間漁業に従事する。寺の維持費用なども分担。
 - ・ ⇒飛島では「新しい考え」だった。

32

S氏(Uターン者) 8月23日インタビュー

- ・ 漁師について
 - ・ 昔は中学卒業後に漁師になる子供が多かった。
 - ・ 高校進学が多くなると島を離れる人が増加。漁師になる人も減少。
 - ・ 現在の魚の値段→高度経済成長時代の3分の1以下。＝漁師では子供の進学費用を稼げない。
 - ・ 子供が成人したあとに飛島に来るのが一番良い方法ではないか？

11

インタビューまとめ(1)

- ・ 子供の進学費用
 - ・ 飛島で生活するだけならできるが、子供の進学を考えると難しい。
 - ・ 渋谷氏の意見から、小中学校の子供を持つ職員などの派遣なら、飛島の学校に通わせることができる。
 - ・ 高校以降の子供の将来を考える必要がある。

14

インタビューまとめ(2)

- ・ 飛島への移住
 - ・ 移住するなら夫婦で同意することが大事。
 - ・ 漁師を目指してきた場合、妻が漁の手伝いをするこもある。
 - ・ U・Iターンのだちらにも言えることは、まず飛島に暮らしてみしてほしい。
 - ・ 一そのための移住体験を飛島でやってみるべき。

35

おわりに

36

飛島の定住情報を発信

- ・ インターネットを活用して情報を発信する。
 - ・ 飛島の方はネットをあまり使わないので、島の応援団が支援する。
- ・ 移住体験プログラムを作り、飛島の生活を知ってもらう。
 - ・ U・ターンのもちらでも移住後の生活をイメージしやすいように。

37

移住促進を図るために

- ・ 外発的な島づくりから内発的な島づくりへ。
 - ・ 島民たちが積極的に移住を誘致している島も多い。
 - ・ そういふことを知るためにも、飛島の島民が島外へ出てイベントなどに参加し、交流を促進することが望まれる。



- ・ 島を良くしようとする活力が生み出される。

38

活力から島の活性化へ

- ＊ 島を活性化させるための主役は島民。
- ＊ 島の未来を守るために、今、島に住んでいる島民たちが動かなければならない。
 - ・ 一移住者を迎え入れるように島民が今、積極的に動かなければ、移住促進は望めず、飛島は無人島になってしまう。
- ＊ しかし、高齢化の中では、島民が動くためには活力が必要となる。
- ＊ 島の応援団はその活力を生み出すためのサポート役。
 - ・ 一アイランダーへの参加など、島民のやる気を引き起こすために島の外とつなげる。

39

主な参考・引用文献

- ・ 粕谷昭二(2010)『日本海の孤島 飛島』東北出版企画
- ・ 吳尚浩、澤邊みさ子、古閑久恵、林久美子、柴田大輔(2008)「社会環境調査論」『平成19年度山形県離島振興推進調査(受託研究)報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、山形県庄内総合支庁総務企画部企画振興課
- ・ 国土交通省「離島とは(島の基礎知識)」(2012.1.11取得)<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/ritoutoha.html>
- ・ 107の市町村のウェブサイト

40



平成 23 年度

トビシマカンゾウの利用と保全

－ 交流から生まれる島づくりと豊かな未来をめざして －

指導教員 吳 尚 浩

C1080611 毛 屋 有 貴

目次

はじめに

第1章 トビシマカンゾウとは

- 1-1 植物学上におけるトビシマカンゾウ
- 1-2 飛島のトビシマカンゾウ
- 1-3 佐渡のトビシマカンゾウ
- 1-4 トビシマカンゾウが使用されているものと認知度

第2章 トビシマカンゾウの利用

- 2-1 暮らしの中でのトビシマカンゾウー食と生活の中からー
- 2-2 カンゾウの酢の物レシピ

第3章 トビシマカンゾウの保全

- 3-1 飛島の事例
- 3-2 佐渡の事例
- 3-3 トビシマカンゾウ保全の課題

第4章 花の交流から生まれる島づくりー三島交流会からー

- 4-1 三島交流会とは
- 4-2 三島交流会の目的と期待
- 4-3 花と自然・環境保全による島づくりー5年間の記録ー
- 4-4 今後の三島交流会への期待と課題

第5章 結論ートビシマカンゾウから学ぶ人と自然の「共生」「豊かさ」とは

おわりに

謝辞

参考・引用文献

はじめに

私は、大学の講義や公益自由研究・ゼミの活動を通して、人と自然との繋がり共に生きる社会「共生」を学んで、飛島の生態系と人々の暮らしに興味を持った。また、東北公益文科大学に入ろうと思ったきっかけの1つは、飛島に行ってみたい、活動してみたいという単純な理由からだった。現在は、4年生だが、1年生の公益自由研究で1度飛島に足を運んでから、飛島の方々の温かさ、そして自然の美しさに魅了され、飛島が大好きになった。中でも、私が飛島の生態系で最も興味を抱いたのは、私が生まれ育った山形県酒田市の市の花である「トビシマカンゾウ」だった。それ以来、飛島のトビシマカンゾウと人々の暮らしに関心を持つようになった。

3年生になり、飛島の活動を通して、自然との出会い、人との出会いが多くなった。飛島小学校の現在の校長先生は、私が中学生のときにお世話になった恩師である。「私の大好きな飛島でまた会いたい」そう思うようになった。飛島での活動を通し再び出会うことができ、また、それをきっかけに飛島の子どもたちや地域の方々と交流を深めることができ、とても嬉しく思っている。また、活動をしていく中で、トビシマカンゾウは飛島だけではなく、新潟県佐渡市でも自生しており、保全活動を行っていることがわかった。

本論文では、「トビシマカンゾウ」について研究を行っていくが、その中でもトビシマカンゾウの利用と保全、そして、私自身も参加した三島交流会での花と自然・環境保全による島づくりに焦点をあてたい。

第1章では、自然との出会いから私が生まれ育った山形県酒田市の花であるトビシマカンゾウについて記していくが、トビシマカンゾウの概要を認識することで、現在の自然と人との関わりがいかんして確立し、変化してきたか、考えを深める。第2章では、トビシマカンゾウの利用について、食という視点から気付かされた暮らしの中での利用について述べ、第3章では、飛島と佐渡のトビシマカンゾウの保全について事例を交えながら、保全活動の意義と今後の課題を記していく。第4章では、花の交流から生まれる島づくりについて、私自身も参加した三島交流会での経験とこれまでの大学生生活4年間の交流から、その意義と今後の期待と課題を考える。第5章では、1章と2章、3章、4章の内容を踏まえ、人と自然の「共生」、人と人との繋がり「豊かさ」について、島内外での積極的な交流の場を設けること、そして、自然資源に対する意識を高め、それに伴った行動をとることが求められるということ述べる。

第1章 トビシマカンゾウとは

1-1 植物学上におけるトビシマカンゾウ

トビシマカンゾウ(写真1)とは、山形県酒田市の市の花であり、高山性でユリ科の多年草¹「ニッコウキスゲ」の変種である。ユリ科ワスレグサ属。花期は、5月下旬～7月。花茎は、1～1.5メートルにも達し、基本標準の産地が飛島。最初に発見されたのが、山形県酒田市の北西にある飛島であることからトビシマカンゾウと和名がつけられた。飛島と新潟県佐渡にしか自生しないが、本家は飛島である。



写真1 トビシマカンゾウ
(写真提供・呉)

以下の表1は、文献を参考にトビシマカンゾウの基本データをまとめたものである。

表1 トビシマカンゾウ基本データ

和名	トビシマカンゾウ
漢字表記	飛島甘草(萱草)
語源	和名は、山形県の飛島に群落が見られたことから。 属名は、ギリシャ語の <i>hemela</i> (=1日) と <i>callos</i> (=美) の合成語で、1日花であることを示している。 種小名は、ロシアの植物学者ミッデンドルフの名に因んでいる。 変種名は、「非常に丈の高い」の意。
学名	<i>Hemerocallis middendorffii</i> var. <i>exaltata</i>
植物分類	ユリ科ワスレグサ属
園芸分類	多年草
開花時期	5月下旬～7月
花茎	1～1.5m
葉長	60～90 cm程度

¹ 1年間以上生き続ける草。冬季は茎が枯れ春になって芽を出すものと、冬季も茎が枯れないものがある(金田一、2000)。

花色	鮮黄色
用途	野草／食用（花、根）
原産地	日本（山形県飛島・新潟県佐渡島）
花言葉	仲間はずれ（カンゾウ：順応性、物忘れ）
県花・国花	山形県：酒田市花
その他	海岸近くに自生するニッコウキスゲの変種

（参考資料：GKZ 植物事典・トビシマカンゾウ（飛島甘草）

<http://www.t-webcity.com/~plantdan/souhon/syousai/ta-gyou/to/tobisimakannzou/tobisimakannzou.html> をもとに筆者作成）

1-2 飛島のトビシマカンゾウ

飛島の勝浦地区、柏木山南斜面はトビシマカンゾウの自生地であり、市指定天然記念物になっている。飛島では、トビシマカンゾウのことを「カンゾウ」と呼ぶ。西海岸の荒崎では、斜面が一面オレンジ色になるほどのトビシマカンゾウを咲かせる（写真2、3）。



写真2、写真3 荒崎に咲くトビシマカンゾウ（写真提供・呉）

しかし、飛島はトビシマカンゾウの本家でありながら、島民の人口減少に伴って下草刈りが行き届かなくなり、自生環境が荒れてきている。島では昭和40年代まで、成長が早いオオイタドリを燃料用に刈り取っていたことで、トビシマカンゾウの自生環境は日々の暮らしの中で知らず知らずのうちに守られていた。ところが、ガスや灯油の普及などに伴う生活様式の変化により「島の燃料革命」は、トビシマカンゾウが自生する環境の荒廃につながるようになった。

以下の図1は、土門（1999）が描いた飛鳥のトビシマカンゾウである。

図1 トビシマカンゾウのスケッチ



出典：(土門、1999、p. 15)

1-3 佐渡のトビシマカンゾウ

トビシマカンゾウの分家筋とも言える新潟県佐渡市海府地区には広さ約9ヘクタールという大群生地がある(写真4)。佐渡市の市の花は「カンゾウ」であり、海府地区に咲くトビシマカンゾウは島では大事な宝・財産となっている。佐渡では、海辺のトビシマカンゾウのことを「ユーラメ」「ヨーラメ」と呼ぶ。この呼び方は、アイヌ語からきており、魚(ユ) 孕む(ハラミ) 花(バナ)の意味を持つ。

毎年6月の第2日曜日に開く「佐渡カンゾウ祭り」は観光客誘致に貢献している。海府地区でも一時期、アシヤカヤの繁茂でカンゾウが激減した。祭りの存続だけでなく、トビシマカンゾウそのものがグメになるとの危機感から、平成8年(1996年)から保全活動をはじめた。粕谷(2010)によると、海府観光協会会長・北澤博満氏は「植栽もしたが、効果的なのは自生に適した環境づくり。小・中学生も参加して下草刈り活動などを続けた結果、かつての姿をとり戻した」と、復活させたいきさつを話す。



写真4 佐渡市海府地区大野亀に咲くトビシマカンゾウ(写真提供・呉)

1-4 トビシマカンゾウが使用されているものと認知度

山形県酒田市の花であるトビシマカンゾウは、市民にどれくらい知られているのだろうか。それを探るために、私たちの身近なものにあるトビシマカンゾウを探してみた。

調べた結果、「酒田市ホームページ」、「酒田観光ガイドブック さかたさんぽ」(写真5、6)、「私の街さかた(酒田市広報)」(写真7、8)、「平成22年度酒田市予算概要」(写真9)、「酒田市未来航路図(酒田市総合計画2008→2017【ダイジェスト版】)」(写真10、11)、「平成20年 市民便利帳さかた手帳【保存版】」(写真12、13、14)、「飛鳥ガイドブック(日本海の不思議アイランド 飛鳥)」(写真15)、「酒田市立図書館貸出カード」(写真16)などに写真というかたちで使われ、私たちの目に触れているようだ。また、「第4回三島交流会

（飛鳥）ネームプレート」（写真17）には、トビシマカンゾウの花の写真が使用されている。

しかし、これだけ多くの目に触れるものに使用されているにもかかわらず、それほど認知度が高いとは言えない。私の周りの人にも同じようにトビシマカンゾウが酒田市の花であることを知っているか聞いてみた。すると、ほとんどの人が「初めて知った。」と決まって答える。私の父と母にも同じ質問をしてみたが、父は酒田市で生まれ育って50年も経つのに知らなかった。酒田市で暮らす市民として、これでいいのだろうか、知らないままでいいのだろうか、一度考えたいものである。

以下の写真は、筆者が本論文作成にあたって上記にあげたトビシマカンゾウの花の写真が使用されているものを自宅で撮影したものである。



写真5、写真6 酒田観光ガイドブック さかたさんぽ（2011年、筆者撮影）



写真7、写真8 私の街さかた（酒田市広報）（2011年、筆者撮影）



写真9 平成22年度酒田市予算概要(2011年、筆者撮影)



写真10、写真11 酒田市未来航路図(酒田市総合計画2008→2017【ダイジェスト版】)(2011年、筆者撮影)



写真12、写真13、写真14 平成20年 市民便利帳さかた手帳【保存版】(2011年、筆

者撮影)



写真 15 飛島ガイドブック (日本海の不思議アイランド 飛島) (2011 年、筆者撮影)

写真 16 酒田市立図書館貸出カード (2011 年、筆者撮影)

写真 17 第 4 回三島交流会 (飛島) ネームプレート (2011 年、筆者撮影)

第2章 トビシマカンゾウの利用

2-1 暮らしの中でのトビシマカンゾウー食と生活の中からー

トビシマカンゾウは観賞するだけの花ではない。飛島では「カンゾウの酢の物」になって、祭りや豊作・豊魚を祝う時の食膳に欠かせない食材にもなっている（粕谷、2010）。第1章1-2でも触れたように、飛島では、「カンゾウ」という呼び方で、島民に食生活の中でも親しまれている。（以下、第2章では「トビシマカンゾウ」のことを「カンゾウ」、「カンゾウの酢の物」のことを「カンゾウの酢の物」とする。）

「カンゾウの酢の物」（写真18）は、カンゾウの花を塩水に漬けた後、モズクときゅうりの酢の物に添えらるとてもシンプルな調理方法だ。きゅうりの緑、モズクの黒に混じってカンゾウの鮮やかなオレンジ色の調和がきれいで、見た目にもおいしそうなお品だ。酢の物だけではなく、島のラーメン（写真19）にも添えられるため、食事に色どりを添えるカンゾウ料理を見た観光客は驚く。



写真18 カンゾウの酢の物（写真提供・呉）

写真19 ラーメン（写真提供・呉）

本卒論研究に取り組むにあたり、筆者は飛島ではどんな調理方法でカンゾウを食べているのかを中央旅館の本間むつ子氏をはじめ、飛島の島民の方々にお話しを伺った。

カンゾウの花は主に旅館や民宿で料理として出している。旅館や民宿以外の家庭では、昔は小さい葉を食べることはあったが、花を食べることはなかったようだ。昔は冷蔵庫がなかったため、摘んだ花は保存食として、塩漬けやゆでて干すのが一般的である。

調理方法は、酢の物、けんちん（油で炒める）、みそ汁（生で添える）、じゃがいもと酒

粕と一緒に三平汁、ごまあえ（おひたし）、天ぷらなどで、根元の白い部分も昔は良く食べていたようだ。根の白い部分は甘くてサクサクし、カンソウは粘りはでないが、つるつるしておいしいと島民の方々は話す。根の白い部分は今でも食べている家庭もあるようだ。今はカンソウをとる人がいないが、昔は多かった。カンソウが咲きはじめるとトビウオがくる。つまり、トビウオが産卵にくるといことは、トビウオが多くやってくるという合図であり、カンソウの咲く時期は漁師の方々も心が弾み、漁で大忙しだ。

また、中村地区では食べるというよりも、花びらは祭りでつかうなど、生活の中では身近な存在であることがわかる。中村地区の祭りでの利用は、エゴ草を三角（鳥海山）にして、カンソウが太陽を意味する。

食用としてカンソウの花を摘む様子は、江戸時代の絵にも「トビシマカンソウ採り」「トビシマカンソウ漬ける」の図として描かれている（図2、3）。その他、昔は、葉っぱは枯れたらわらじにした。花が枯れ、お盆を過ぎるとカンソウの丈は50～60cmほどにもなっている。今石（2010）によると、この頃、カンソウの葉を切り抜き、束ねて干しておく。これを編んでカンソウゾウリを作ったり、マメやムギを束ねる結束材として利用するようだ。

「昭和2年生まれの子が幼少時代には、学校の上草履はこのカンソウゾウリが一般的で、丈夫なものだったという。10月すぎ、カヤを刈る頃には、枯れて残っているカンソウの茎を刈り取って付け木としても利用した。カゲのほうにロウ（硫黄の塊）が流れ着くので、それを拾ってとっておき、短く切ったカンソウの茎に溶かしたロウを塗って付け木とするのである。茎の中央部が空洞になっているためよく燃えたもので、戦後、物資の乏しい時代には特に利用したという。」（今石、2010、pp.26-27）

図2 トビシマカンソウ採り



出典：(山形県立博物館、2004、p.31)

図3 トビシマカンソウを漬ける



出典：(山形県立博物館、2004、p.31)

カンソウはこのように観賞だけではなく、食料資源や生活資源としても島民の暮らしの中ではなくてはならない身近な存在であった。また、今石(2010)が論文の中で「カンソウは稲藁に代わる機能を果たす材であったとあってよく、そこには豊かな利用の文化が展開されていた。」と述べているように、カンソウは島の暮らしに恵みを与えてくれる存在といえる。

2-2 カンソウの酢の物レシピ

2-1でも触れたように、飛島では「カンソウの酢の物」が代表的な調理方法である。多くある料理の中から「カンソウの酢の物」を飛島の食文化の1つとして紹介する。

「カンソウの酢の物」(夏・通年)

材料

塩漬けカンソウ … 40~50g

酢 …………… 適宜

砂糖 …………… 適宜

塩 …………… 少々

作り方

- ①カンソウは、しなやかにするために塩水に漬けてから料理します。
- ②三杯酢にカンソウを浸します。

③酢の物は各家庭の味がありますので、お好みの味付けで出来上がりです。

※カンソウの花は、自家栽培したものを使います。

一寸のひとこと

長く保存する場合は塩蔵、または冷凍します。酢の作用で鮮やかなオレンジ色になります。モズクやきゅうりの酢の物に添えてもきれいな一品ができあがります。

(漁協女性部ほか、2009、p. 36)

第3章 トビシマカンゾウの保全

3-1 飛島の事例²

「トビシマカンゾウを残していきたい」という島民からの発案で、島民有志と公益大・飛島ふあんクラブの取り組みとして、トビシマカンゾウ自生地における草刈活動が2005年からはじまった。その後、2007年の三島交流会（飛島）をきっかけに、活動は島のコミュニティ振興会が中心となった。現在では、漁協女性部や小学校とも連携して、荒崎の草刈活動、苗の栽培、プランターによる定植活動などが行われ、島の内発的地域づくりの象徴的活動となっている（とびしま未来プロジェクト、2011）。

トビシマカンゾウは、昔はカンゾウの周辺に生えるカヤやオオイタドリなどを燃料として刈っていた。そのため、十分に日光を受けて開花しやすい環境にあり、西海岸の荒崎では、一面いっぱいに綺麗なカンゾウを咲かせていた。しかし、現在は、電気やガス、灯油が普及し、それらが燃料として利用されなくなったために、草刈りが行われなくなった。草刈りが行われなくなったことで、カヤやオオイタドリがカンゾウの成長を妨げ、徐々にカンゾウが減少してきた。

「トビシマカンゾウは本当にこのままで良いのだろうか…?」「どうにか私たちの手で守っていけないだろうか?」「トビシマカンゾウを残していきたい」そんな何気ない島でのお茶飲み話から、2005年にトビシマカンゾウの保全がはじまった（写真20）。それは、島で旅館（中央旅館）を営む本間生也氏とむつ子氏夫婦が数年前に佐渡でトビシマカンゾウが守られ、美しく咲いている新聞記事を見て、「飛島でも花を咲かせたい」と思いを寄せたことが保全活動のきっかけである。



写真20 何気ないお茶飲み話からはじまったカンゾウ保全（写真提供・呉）

島で観光対策の一環として荒崎のカンゾウ保全の草刈りを行うべきであると行政や観光協議会らに発案していたが、繁忙期や少子高齢化といったような理由で反対され、その個人は思いがくすぶっていたようだ。しかし、東北公益文科大学の教員・学生と島民との話の中から、佐渡でのカンゾウ保全の記事にも触発され、飛島でも継続的な活動を行

² 3-1は（呉ほか2011、呉ほか2008、pp.53-55）を参考にしている。

いたいと意見が出された。それを機に、2005 年秋に東北公益文科大学の学生と数名の島民によって、「日本の渚百選」の荒崎を一望する景勝地において草刈りによるトビシマカンゾウの保全がはじまった。



写真 21、写真 22、写真 23、写真 24 東北公益文科大学の学生と島民によるトビシマカンゾウ保全の草刈り（2005 年、写真提供・呉）

2007 年 5 月に、トビシマカンゾウの開花期を目前に育成環境を整えたことにより、6 月には多数のトビシマカンゾウの開花が観察された。同月の「飛島いきいき体験スクール³」では、島を訪れた子どもたちにとっても喜ばれ、笑顔を見ることができた。

また、飛島での三島交流会の開催を控え、

³ 酒田市内の児童を対象とする 2 泊 3 日の宿泊体験学習のこと。



写真 25 飛島いきいき体験スクールの子もたちとトビシマカンゾウ（2007 年、写真提供・呉）

トビシマカンゾウ保全を全島規模で島民、酒田市役所の職員、東北公益文科大学の教員・学生ボランティア総勢 50 人ほどで初の合同保全活動（草刈り）が 2007 年 9 月 26 日に行われた。



写真 26、写真 27、写真 28、写真 29 島民、市職員、公益大の協働でのトビシマカンゾウ保全の草刈り（2007 年、写真提供・呉）

2008 年には、佐渡で開催された三島交流会で、飛島の島民が佐渡の島民より、トビシマカンゾウの栽培の仕方を学んだ。佐渡での三島交流会のトビシマカンゾウの保全については、第 4 章で触れる。

2009 年 7 月、荒崎海岸に咲くトビシマカンゾウをはじめ、岩ユリ、野アザミ、浜ヒルガオが綺麗に花を咲かせた。そして、佐渡でのトビシマカンゾウ保全で学んだことを活かし、9 月 27 日に恒例の下草刈りを島民 36 人、酒田市職員飛島草刈隊 15 人で行ったほか、11 月 16 日には、島民のみによる保全活動（草刈り）を始動した（写真 30）。



写真 30 島民のみによる保全活動（2009 年、写真提供・呉）

また、咲き終わったトビシマカンゾウの種取りを9月4日、10日に行った(写真31、32)。採取後、種を乾燥させた。乾燥させた種は150g位。その乾燥された種を使い、トビシマカンゾウの種まきを10月6日に飛島小学校畑裏(写真33)、11月22日にとびしま総合センター前で行った。その他、観光客のもてなしとして3月末には、プランター8個(各2株ずつ)と地植えを5株した(写真34)。プランターの株は成長も遅く大きくなりず花も2~3個しか咲かなかったが、地植えの株は大きくなり花も全て咲いたようだ。11月22日に湿地帯、土が波で削られている西海岸から株をとり、2010年に保護及び増殖場所に植えつけるまでの間、畑に仮植えをした。



写真31、写真32 トビシマカンゾウの種とり(2009年、写真提供・とびしま総合センター)

写真33 飛島小児童によるトビシマカンゾウの種まき(2009年、写真提供・とびしま総合センター)

写真34 プランターによるトビシマカンゾウの鉢植え(2009年、写真提供・とびしま総合センター)

この年(2009年)は、トビシマカンゾウを保全するにあたって、飛島小学校前の花壇に

ある、品種改良されたトビシマカンゾウを全て除去するように指摘を受けた。これは、山形大学農学部の林田光祐氏よりの指摘で、トビシマカンゾウを増殖したいのであれば、トビシマカンゾウの持っている特有な遺伝子が自然交雑のため、それが拡がれば純粋なトビシマカンゾウがなくなってしまうおそれがあるという問題だった。学校の花壇に咲いていた品種改良されたトビシマカンゾウは、「ニグロッティ」「ガバレロ」「ミカド」「ミセスウインマン」というもので、その内の1つ「ミセスウインマン」は、約40年間も学校の花壇に植えられており、1つの株も大きく、花壇3面にわたっていた。4種類の交配種は株も蕾も原種のトビシマカンゾウと酷似しており、開花しないと識別できない状態だった。ニグロッティ、ガバレロ、ミカドの3種類は花の色が違いため、開花すれば誰にでも容易に識別はできる。しかし、ミセスウインマンについては、識別が難しい。原種のトビシマカンゾウと交雑するといけないので、種は裏の畑に植えたようだ。

その品種改良されたトビシマカンゾウの根絶作業を2009年4月14日に飛島小学校の先生方と児童の2人の手伝いで行い、花壇は綺麗になり少し寂しくなったが、純粋なトビシマカンゾウを守っていくにあたって、重要な作業となった。

2010年、島内での保全事業が2年目となり、時期や天候を見て声掛けをしてくれるようになった。2009年11月22日に保護して畑に仮植え付けした株を、地区別に土壌整備をして植え付ける作業を2月23日に行った。飛島は、勝浦・中村・法木の3つの地区にわかれており、コミュニティ振興会や飛島小学校が中心となってトビシマカンゾウの定植をした。勝浦地区は歌碑前、中村地区はとびしま総合センター前と託児所前、法木地区はヘリポート場T字路の両側にそれぞれカンゾウを定植した。

また、この年、飛島では2回目となる三島交流会開催に向けて、中村地区では飛島小学校の向かう途中の農免農道（海岸道路）の土壌整備を行った。ここに、トビシマカンゾウの株植えをするためである。そして、センター裏の花壇に種植えをするために種植え用花壇の整備も行った。その他、中村地区のテキ穴前のプランターの整備と株付けをし、法木地区の農免農道下り坂左側の整備をした。

三島交流会目前の10月16日には、例年通り荒崎海岸の保全草刈りを島民27人、酒田市職員15人で行い、ついに迎えた10月18日の三島交流会では、参加者全員で海岸道路に株植えをし（写真35、36）、とびしま総合センター裏の花壇には、1ポットに種3粒位、合計100ポット種植えを行った（写真37、38、39）。海岸道路に植えた苗は、センター裏に

花壇に種植えをしていた2年目と3年目の苗、4年前に株分けをした株、2009年11月22日に採取した株を使用して保全活動を行った。三島交流会後の10月29日には、残りの種をセンター裏の花壇に50粒位植え、少し多めの培養土をかけたほか、11月5日、海岸道路の株植えをした場所に山からの腐葉土を与え、雪に備えて根踏みをし、土寄せをした。また、センター裏の花壇のポットは冬に備えて土に埋め、培養土を与えた。



写真 35、写真 36 第4回三島交流会（飛島）での海岸道路に株植えの様子（2010年、写真提供・呉）



写真 37、写真 38 第4回三島交流会（飛島）でのトビシマカンゾウの種植えの様子（2010年、筆者撮影）



写真 39 第 4 回三島交流会（飛島）でのトビシマカンゾウの種植え後（2010 年、筆者撮影）

2011 年、夏に綺麗なトビシマカンゾウが咲くようにと、各地区の保全場所全ての草取りと追肥をした。勝浦地区と法木地区は肥料やりと増殖、中村地区は草取りと肥料やりを行った。各地区で協力して、酒田市の市の花であるトビシマカンゾウを飛島発祥の地として守っている。夏には、2010 年 10 月 18 日の三島交流会（飛島）に参加者全員で海岸道路に株植えをしたトビシマカンゾウが綺麗に咲いたと、とびしま総合センターの佐藤環氏にお話を伺った。しかし、植え付けをしてから 1 ヶ月しないうちにふかふかになってしまったようだ。根元を踏み山からとってきた腐葉土を与え、また根踏みをしたら全然大きさが違ったと話す。肥料の与え方でだいぶ違うようだ。また、とびしま総合センター裏の花壇に植えた種は、いくつか芽を出していた。

以下の写真は、トビシマカンゾウの花が咲き終わった様子（写真 40、41）と芽を出した様子（写真 42、43）である。筆者が本論文作成にあたって 8 月 22 日～24 日に飛島に行った際に撮影した。



写真 40、写真 41 カンゾウの花が咲き終わった様子 (2011 年、筆者撮影)

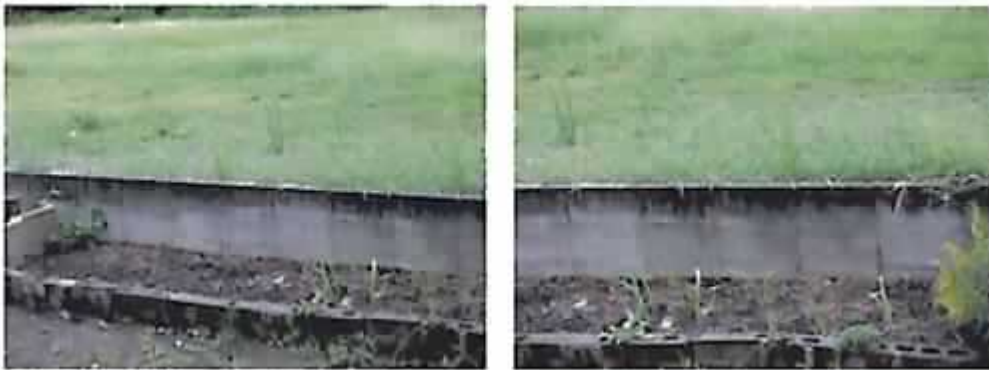


写真 42、写真 43 カンゾウが芽を出した様子 (2011 年、筆者撮影)

トビシマカンゾウの保全を開始して7年、島の内発的地域づくりの象徴的活動として行政や東北公益文科大学の学生ボランティアのサポートにより、島民自らトビシマカンゾウの価値を再確認し、保全の必要性を考えるようになった。飛島では、繁忙期や少子高齢化といったような問題があげられるが、今後もできる限り保全活動を続けカンゾウを守り、今ある花を残していきたいと島民は言う。

3-2 佐渡の事例⁴

佐渡の北部の海府地区に位置する大野亀台地には、日本一のトビシマカンゾウの大群落がある。「大野亀」は、佐渡の北部の「外海府海岸」と呼ばれる場所にあり、最盛期には約70ヘクタールの約50万株、100万本が自生し花を咲かせた。大野亀の近くには「二ツ亀」と呼ばれる場所もあり、両者はまるで兄弟のように親しまれている。「亀」という名前が付くだけあって、どちらも大きな亀がうずくまっているように見える巨大な岩である。大野亀は、海に突き出ている標高167mの切り立った一枚岸壁だ。その風景は1度見たら忘れられないほど美しく、頂上からは外海府海岸を全て見渡すことができる。2匹の亀を思わせる形の「二ツ亀」は、透き通った海と雄大な景観で、「伏水浴場100選」にも選ばれている。以前この地は、佐渡牛を育てるための飼料としてのカヤ刈りによって、開花が促進され、その数は100万株とも言われていた。しかし、牛の飼育がこの地区でなくなり、カヤ刈りをしなくなったためにカンゾウは衰退の一途をたどった。

そこで、海府地区では、平成8年(1996年)から試験的に種から苗に300本育て、保全

⁴ 3-2は(呉ほか、2009e, pp.73-74)を参考にしている。

活動をはじめた。昔は、大野亀周辺に自生し70万株を数えたが、一時は30万株まで減少する危機に直面した。平成9年(1997年)には、地元の区長会と海府観光協会が中心となり、本格的に保全をはじめた。昔は積極性にかけていたが、ここ数年は、毎年、地元の小・中学生、一般ボランティア、佐渡市、佐渡・花の島プロジェクトなど、多くの方が携わって、カンゾウの苗を植えたり雑草を刈り取ったりする作業を積極的に行っている。

新潟県立佐渡総合高等学校では、平成12年(2000年)から希少植物の増殖や植栽など環境保全に取り組んでおり、平成19年(2007年)に第12回新潟県環境賞を受賞している。この賞は、地域におけるすぐれた環境保全活動に対し贈られる。団体、個人あわせて9団体が選ばれ、佐渡からは2年ぶり6度目の受賞となった。

また、第1章1-3でも触れたように、毎年6月の第2日曜日に「佐渡カンゾウ祭り」が開かれ、一面の満開のカンゾウを背景に地元住民による鬼太鼓や海府太鼓、佐渡民謡などが披露される。34年前の昭和53年(1978年)に地域を繋げる祭りとしてはじまった。海府観光協会が中心となり、地元の団体、事務所、地区の住民などの地域全体の協力で開催している。佐渡カンゾウ祭りの観覧は無料で、今では島を代表する祭りとして観光客で賑わい、20日間の開花期間中に3万5千~4万人もの観光客が花を見に訪れる。佐渡市の年間観光客数は平成13年(2001年)の130万人のピークで現在では60万人に減少している。しかし、観光客は減り続ける中で祭りの2日間だけでも1万人といわれる。特に県内・県外共に団体や個人、高齢者が多い。カンゾウは気温の変化で咲き方が変わるが、6分・8分咲きで綺麗なカンゾウが咲くため、苦情はないようだ。佐渡市では景色と芸能が一緒に楽しむことができる人気の高い祭りである。

「佐渡カンゾウ祭り」の1週間前は、「ウィークデー」としてチラシを配ったり、ライトアップを行っている。また、「大野亀」や「二ツ亀」は佐渡市の願という地区に位置するが、その「願」という地名から「願いが叶うように」という意味で、絵馬のサービスも行っている。最近では、全国的にパワースポットが有名になっていることから、絵馬という案が生まれ実施したと海府観光協会会長・北澤博満氏は話す。

このように、佐渡ではカンゾウは衰退の一途をたどったが、保全に力を入れ、現在は、観光客誘致に貢献している。佐渡でのトビシマカンゾウの衰退は、飛島の例と非常に似ているという共通点から、三島交流会をはじめめるきっかけにもなった。三島交流会については、第4章で触れる。海府観光協会会長・北澤博満氏によると、大野亀は「黄金に輝く台地」とも呼ばれている。黄金は「夕日」を表しているそうだ。また、今後は島の小・中学

生の子どもたちに後継者として、大事な宝・財産であるトビシマカンゾウを守ってもらいたいと話す。トビシマカンゾウだけではなく、小・中学生の子どもたちも将来を担う大事な宝・財産であるといえる。

「大野亀の宝から島の宝へ」。かつての佐渡牛飼育のための経済的価値から、観光や自然保全のためへの公益的価値へと存在価値を転換し、カンゾウは守られている。地域資源を住民主役で生かす「内発的な島づくり」の全国的なモデルといえよう（呉、2009b、p. 74）。

3-3 トビシマカンゾウ保全の課題

トビシマカンゾウの保全が、飛島では8年目、佐渡では17年目に入る2012年1月現在、これからどのようなことに期待し活動を行っていくか、また、島内における少子高齢化といった問題を私たちはどう解決していかなければならないのかが今後の大きな課題となる。島での少子高齢化が進む中で、トビシマカンゾウを残し守っていくには、私たちは今、何をしなければならないのだろうか。

まず、はじめに島の現状を理解した上で、行政やボランティアが島民のサポートとして入り、継続的に活動をしていくことが大切である。筆者が活動のフィールドとしている飛島では、3-1で触れたように、2006年に東北公益文科大学の学生と数名の島民による、荒崎の草刈りから保全活動がはじまった。2007年には市の行政ボランティアも加わり、現在は島民が中心となって保全活動を行っているが、2011年8月に筆者が飛島に行った際に島民にインタビューをしてみると、飛島の島民は以下のような【悩みや不安】を抱えていた。

【悩み・不安】

- (1) 今は保全活動にきてくれるが、保全活動があと何年続くだろうか。
- (2) もっと各地区にトビシマカンゾウを植えたいが、草刈りが大変なうえに、管理がなかなか難しい。
- (3) 荒崎に咲くトビシマカンゾウを見に行きたいが、高齢により、足腰に自由がきかないため、行き来や歩くのが大変。

それに対して、以下のような【期待・希望】を抱いていることがわかった。

【期待・希望】

- (1) 酒田市の花、三島交流会もトビシマカンゾウからはじまったから、なんとかそれをなくさないように歩道に植えたりしたい。
- (2) トビシマカンゾウを道路に植えたり、近くで見れる場所をつくっている。鉢植えをした場合は水やりもしている。
- (3) トビシマカンゾウが咲きはじめるとトビウオがやってくるので、毎年咲くのが楽しみ、待ち遠しい。
- (4) 若かったらやっぱり飛島の自然を守っていきたい。

上記のようにまとめてみると、【悩み・不安】よりも【期待・希望】のほうが多いことがわかる。これは、飛島の一部の島民へのインタビューだが、トビシマカンゾウの保全の【期待・希望】だけではなく、島のこれからの【期待・希望】ともいえよう。島民みんなが島の夢・未来を語り、私たちもそれを願い活動している。

【悩み・不安】の(1)「今は保全活動にきてくれるが、保全活動があと何年続くだろうか。」、(2)「もっと各地区にトビシマカンゾウを植えたいが、草刈りが大変なうえに、管理がなかなか難しい。」については、島内だけでは少子高齢化という問題から限界があるため、島外の若者の意識を高め、保全するにあたっての後継者をつくっていくことが大切だと考える。それを発信していくのが、現在、保全活動を行っている島民・行政・ボランティアだと思う。いかにして島の現状を知ってもらい情報を島外に発信していくか、そして、島外の市民にトビシマカンゾウを保全しているということを知ってもらうことが重要である。

しかし、トビシマカンゾウという花を知り、認知度が高まったことで島に花を見に訪れた人が、それを切って持って帰ってしまうことが予想される。保全活動をしているということを知ってもらい、相互理解が大切であるといえる。

(3)「荒崎に咲くトビシマカンゾウを見に行きたいが、高齢により、足腰に自由がきかないため、行き来や歩くのが大変。」という問題については、【期待・希望】の(2)「トビシマカンゾウを道路に植えたり、近くで見れる場所をつくっている。鉢植えをした場合は水やりもしている。」にあるように、トビシマカンゾウを近くで見れるような場所づくりをする必要があると考える。島民も観光客など人々の目に触れる場所に花を咲かせることで、トビシマカンゾウをより身近に感じるができる。

【悩み・不安】の(1)(2)(3)共に、保全の課題、今後の活動として、手軽に草刈りができる範囲でトビシマカンゾウを増やしていくことが近道であるとは考える。

例えば、法木地区のヘリポート場の辺りであれば畑に行くついでに草刈りができる。そして、秋には種取りもできる。その他、勝浦地区の緑地公園や中村地区のテキ穴など、島民や島を訪れた人の目に触れやすい場所にももう少し手を加えていく必要がある。また、とびしま総合センターの佐藤環氏によると、グラウンドの避難場所になっているところにも結構トビシマカンゾウが見えているようだ。草刈りもしているので、もう少し増えれば(増やせば)いいと思っていると話していた。肥料の与え方でトビシマカンゾウの大きさ・成長が違うことから、肥料の与え方も見直し考えていくことが重要だ。

また、潮風に強い結構丈夫な花で、1本咲くと次から次と咲いてくるという中央旅館の本間むつ子氏の話から、飛島にも〇〇ロードといったものをつくるのも1つの案だ。海岸道路の目のつくところ両サイドにトビシマカンゾウを植え、1人でも多くの人の目に触れ、知ってもらいたいという願いがある。

保全の課題や今後の活動を述べるにあたって最後に述べておきたいのは、現在、飛島では観光を目的としてではなく、保全を目的に活動を行っているということだ。将来的には、これらのトビシマカンゾウは、人の手を加えなくても自然と増えていくことを望んでいる。

第4章 花の交流から生まれる島づくりー三島交流会からー

4-1 三島交流会とは⁵

三島交流会は、佐渡と飛島の島民が「トビシマカンゾウのふるさと飛島と交流し共に保全活動をしたい」との願いからはじまった。平成19年（2007年）7月上旬に開催された「海ごみサミット・佐渡会議」を契機に、酒田市副市長の中村護氏、及び東北公益文科大学の調査メンバーが参加した際に、佐渡・花の島プロジェクト会長の加藤洋氏、副会長の甲斐逸枝氏より、トビシマカンゾウをテーマとした交流会の申し出があった。

平成19年度離島振興推進調査（受託研究）には、以下のようなことが報告されている。

「かねてより、佐渡・花の島プロジェクトにおいては、トビシマカンゾウ保全の住民意識を高めるために、さまざまな取り組みをおこなっていることから、トビシマカンゾウのふるさととしての飛島との交流会を企画していた。平成19年6月の佐渡カンゾウ祭りの際に、飛島観光協会会長や酒田市の観光物産課などから関係者を招くことも予定されていたが、残念ながらスケジュールが合わずに実現せずにはいた。

公益大のメンバーが佐渡におけるトビシマカンゾウの群生地として名高い大野亀地区の視察を行っていたこともあり、交流の実現に向けて積極的に検討することで合意がなされた。また、同サミットには、隣島の新潟県粟島の本保建男村長も参加していたこともあり、佐渡、飛島の二島のみならず、三島において交流を行うことが話し合われた。」

（呉ほか、2008、pp. 69-70）



写真44 海ごみサミット・佐渡会議（2007年、写真提供・呉）

同年10月より、新潟県佐渡、粟島、そして、山形県飛島の島民の交流を目的とする三島

⁵ 4-1は（呉ほか 2011、呉ほか 2008、pp. 69-73）を参考にしている。

交流会がはじまった。この三島交流会は、それぞれの島が持ちまわりで毎年1回開催している（07年・飛島、08年・佐渡、09年・粟島、10年・飛島、11年・佐渡）。

4-2 三島交流会の目的と期待

三島交流会の目的は、佐渡、粟島、飛島の北西日本海の離島における自然資源を活かした島づくりの相互の学び合いと連携にある。また、三島交流会は、以下の3つを期待しはじまった。

第一は、三島の住民同士がお互いの取り組みについて知り合い、交流することにより、それぞれの島づくりへの意欲を刺激することだ。そして、各島における島づくりの話し合いが内発的に活性することが最も大切である。

第二に、三島を結ぶ形でのイベントの開催や航路・観光ルートの開発など、点から線としての取り組みが期待される。ぜひとも、本来の「海の道」の復活を目指したい。

第三に、特に飛島の場合は、三島交流会開催にあたっては、住民、行政、島の応援団などが協働で開催にあたるために、関係者間の連携が深まる効果も重要だ。

（呉、2009e, pp. 74-75）

このような期待を胸に、第1回三島交流会は開催された。第3章で記したように、佐渡と飛島では、島の固有の種であるトビシマカンゾウが自生しており、両島では以前から保護活動を実施し、観光振興に繋げている。また、それに刺激を受けて、粟島でかつて自生していたヤマユリの復元保全活動が実施されるなど、三島交流会をきっかけとして「花」をキーワードとした地域活動が進行し、それぞれの島で保全活動が活発化している。

この交流会は、普段なかなか交流する機会のない隣接する島の島民同士が、共通の島の抱える問題やそれぞれの生活、島での活動などを語り合うことにより、お互いを励まし合いながら問題解決方法の糸口を探るきっかけとなる。また、自分たちの島づくりへの向上にも繋がっている。実際に、三島交流会をきっかけとして、それぞれの島でのトビシマカンゾウなどの植物の保全活動への関心が高まり、島内での自治活動にも組み込まれるようになった。詳しくは後述する。

さらには、この交流会の効果は年1回の開催にとどまらず、粟島においては2001年からはじまった飛島クリーンアップ作戦に刺激を受け、2008年から粟島クリーンアップ作戦を

開始した。これには、酒田・飛島側からも実行委員として協力を行っている。また、佐渡の力屋観光汽船(株)による佐渡・粟島・飛島を結ぶ、観光ツアー目的の不定期航路も就航している。

4-3 花と自然・環境保全による島づくり－5年間の記録－

ここで三島交流会の5年間の取り組みを記していく。三島交流会では、はじめにそれぞれの島の現状を話した上で「花と自然・環境保全」「離島漁業振興(漁業)」「観光・定住」といった3つの分科会に分かれ、それぞれのテーマについて意見を出し合い交流をする。その中で、「花と自然・環境保全」に焦点をあて、5年間の活動を振り返る。第1回～第3回までは、これまでの文献や資料を基に、第4回・第5回は、筆者も実際に参加しているので、その交流経験から述べていく。

第1回三島交流会は、2007年10月15日・16日に飛島で開催された。佐渡からは、加藤洋氏を代表とする花の島プロジェクト実行委員会のメンバー9名と海府観光協会から北澤博満会長の計10名が、粟島からは、粟島浦村の本保建男村長ら4名が来島した。また、(財)日本離島センターからも1名が参加した(呉ほか、2008、p.70)。

1日目は、飛島に渡るに先立ち、酒田市役所で関係者懇談会が開催された。山形県庄内総合支庁、酒田市、ごどいも食べさせ隊、山形大学、東北公益文科大学などのメンバーと意見交換が行われた。



写真 45 酒田市役所にて開催された懇談会(2007年、写真提供・呉)

懇談会后、チャーター船で飛島に渡り、天保そば・ごどいもの作付け場所や天保そばの収穫を見学し、夕方からは、各島の島づくり活動の取り組みが報告された。飛島は、トビ

シマカンゾウ保全・天保そば・ごどいも食べさせ隊の活動報告、佐渡は、トビシマカンゾウの保全活動、粟島は全般的な紹介をした。その後、三島の懇談会として、飛島鍋などが振る舞われた。

次の日は、トビシマカンゾウを保全するために草刈りをした荒崎海岸などを視察し、天保そば・ごどいも収穫感謝祭に参加した。天保そば・ごどいも収穫感謝祭は、2004年からはじまり、島民と島の応援団の交流の場になっている。飛島音頭・小唄の披露や東北公益文科大学の学生による和太鼓演奏も披露され、島民に元気を与え笑顔の絶えない1日となった。また、飛島小学校の同窓会からの参加もあり、島の出身者を含めた島づくりの動きも見られた。



写真 46 三島の懇談会（2007年、写真提供・呉）

写真 47 トビシマカンゾウのふるさと荒崎の視察（2007年、写真提供・呉）

写真 48、写真 49 天保そば・ごどいも収穫感謝祭（2007年、写真提供・呉）

第2回三島交流会は、2008年10月30日・11月1日に佐渡で開催された。飛島より5名（その他山形県、酒田市職員、島の応援団の参加）、粟島から5名の住民と行政からの参加があった。飛島からの参加者がトビシマカンゾウ保全の先輩である佐渡の住民から保全の方法を学んだ。

交流会の午前中は、地域住民と花の島プロジェクトによるトビシマカンゾウの保全活動が行われた。粟島、飛島からの参加者も参加し、小雨の降る中を、広大な大野亀台地に70人ほどのボランティアの草刈隊が活動した。お昼には、那地区の見学が行われ、漁法談義に花が咲いた（呉、2009c、p.78）。

午後の交流会では、第1回三島交流会と同様にトビシマカンゾウの保全活動など、各島から報告がなされた。その後、自然資源の活用・保全と観光について議論を深めた。夜の懇談会も賑わい、前年よりも三島の絆が深まった。



写真 50、写真 51、写真 52 三島によるトビシマカンゾウの保全活動（2008 年、写真提供・呉）

写真 53 三島の懇談会（2008 年、写真提供・呉）

第3回三島交流会は、2009年10月30日・31日に粟島で開催された。参加者の顔ぶれも前年、前々年と変わらず定着してきた。

交流会1日目は、各島からの報告からはじまり、佐渡は、佐渡・花の島プロジェクト実行委員会会長・加藤洋氏「佐渡・花の島プロジェクトの現況」、佐渡市・海府観光協会の会長・北澤博満氏「佐渡のカンゾウ保全活動について」のテーマで報告があり、飛島は、とびしま総合センター長・渡部秀三氏「飛島の概況」、飛島コミュニティ振興会会長・西村和

夫氏「カンゾウ保全活動の現状」というテーマで、最後に粟島からは、粟島浦村村長・本保建男氏「粟島における自然を活かした島づくり構想について」、粟島浦村産業建設課主事・渡邊泰介氏「粟島の観光の現況」、粟島浦漁業協同組合 代表理事組合長（村議会副議長）・本保信勝氏「粟島の今後の漁業」、民宿 松太屋女将・松浦ヨキエ氏「粟島の旅館業」という盛沢山のテーマが並んだ。夜は、恒例の懇談会が行われ、三島の絆を再確認した。

2日目は、粟島に古くから自生していたヤブカンゾウの植栽と竹林整備事業であるヤマユリの植栽をメインに、牧平と粟島竹取物語の会場の2ヶ所に分かれて、牧平にはヤブカンゾウを竹取物語の会場にヤマユリを植えた。植栽終了後は、漁協・漁具倉庫へ行き、粟島がダイビングでどのような事業を行っているのか、粟島ではどのような漁業を行っているのかなど話を聞いた。また、資料館の見学も行われ、粟島の伝統文化を学んだ。飛島島民と粟島島民は、以前漁業を通して交流があり、このような、旧交を温め合う場面から来年度以降の三島交流の継続実施が決定された。



写真 54 各島からの報告（2009年、写真提供・呉）

写真 55、写真 56 三島の懇談会（2009年、写真提供・呉）

写真 57 ヤマユリの植栽（2009年、写真提供・呉）

第4回三島交流会は、2010年10月18日・19日にひと回りして再び飛島で開催された。

飛島入りをした後、参加者の受付と昼食を呉ゼミ生が担当でスタートした。受付が終わった人から昼食をとり、交流会の前に参加者みんなでトビシマカンゾウを中村地区にある飛島小学校に行く途中の海岸道路脇に植えた。また、とびしま総合センター裏の花壇には、合計 100 ポットの種植えを行った。これについての詳しい報告は、第 3 章 3-1 参照。

そして、三島交流会でははじめにそれぞれの島の現状を話した上で、「自然保全」「漁業」「観光」という 3 つの分科会に分かれて話をした。

「自然保全」では、粟島の離島を生かしたエコな生活について、粟島クリーンアップ作戦や竹林整備事業、エコツアー（オオミズナギドリ観察・穴釣り）、野生馬復活の取組、鉄炭団子作成による藻場の再生やトビシマカンゾウの保全について意見が出され、話し合った。

「漁業」では、地産地消や冷凍技術の応用、観光と漁業を組み合わせられないかという意見や後継者がいないという問題があげられた。

「観光」では、佐渡は環境に優しい島づくり、民間と行政の協力、おもてなし、トビシマカンゾウの宣伝といったことをしている。粟島は体験民宿といって、民宿でクコ取りや農業などの体験ツアーをしているということや、雨でも過ごせる場所づくりに取り組んでいる。飛島は高齢化でトビシマカンゾウの保全が島民だけでは限界があったり、民宿の後継者がいなかったりという問題点があげられた。

分科会に分かれて話し合いをした後、再び集まりそれぞれ情報共有した。その後は懇談会が開かれ、島民同士の交流が行われた。

2 日目は、粟島と佐渡からの参加者の島ガイドからはじまり、天保そば・ごどいも収穫感謝祭が行われ、天保そばとごどいもが振る舞われた。この時、飛島小学校の子どもたちを中心にした演奏会や呉ゼミ生による飛島音頭・小唄が披露された。

4 回目の交流会となると、各島の抱える問題が深く共通していることにいち早く気づき、意見が活発に出された。それぞれの島づくりに刺激を与え合い、切磋琢磨したり、島民のやる気を引き出したり、島民同士の交流の場として重要な会となった。また、私にとっても飛島以外の島の現状や取り組みを聞くことができ、次の交流会への期待が高まった。



写真 58 第 1 分科会：自然保全（2010 年、写真提供・呉）

写真 59 第 2 分科会：漁業（2010 年、写真提供・呉）

写真 60 第 3 分科会：観光（2010 年、写真提供・呉）

写真 61、写真 62、写真 63 三島の懇談会（2010 年、写真提供・呉）

写真 64、写真 65 粟島と佐渡からの参加者の島ガイド（2010 年、写真提供・呉）



写真 66 天保そば・ごどいも収穫感謝祭の天保そばとごどいも（2010年、写真提供・呉）

写真 67 呉ゼミ生による飛島音頭・小唄の披露（2010年、写真提供・呉）

第5回三島交流会は、2010年10月17日・18日に佐渡で開催された。5回目は三島合わせ総勢70名の参加となった。飛島では、とびしま未来協議会が立ち上がり、島の新たな発展を願って、交流会が行われた。

佐渡入りをした後、マイクロバスを使い霧がかかり小雨が降る中、大佐渡石名天然杉の見学を行った。大佐渡石名天然杉は大佐渡山脈主稜線付近（標高約900m）の県有林石名団地に生育しており、新潟県で保全している。起伏の少ないコースなため、初心者でも安心して入山でき、天然杉の中には、300年を超える樹齢のものもあると言われている。特異な形状をした杉が多くあり、その光景はとても神秘的だ。トビシマカンゾウとは一味違った、佐渡の自然保全について学んだ。

大佐渡天然杉の見学後、昼食をとり、前年同様に「花と自然・環境保全」「離島漁業振興（漁業）」「観光・定住」という3つの分科会に分かれて話をした。

「花と自然・環境保全」では、前年の飛島での三島交流会で植えたトビシマカンゾウの開花報告をはじめ、粟島の離島を生かしたエコな生活について、粟島クリーンアップ作戦や竹林整備事業「粟島竹取物語」、エコツアー（①オオミズナギドリ観察・②穴釣り・③星空観察）、野生馬復活の取組、使い捨てカイロを再利用しての藻場再生の取組、竹パウダーを活用した生ゴミ処理の取組など多くの報告があった。また、佐渡では、佐渡・花の島プロジェクト実行委員会による佐渡・花めぐりマップ作成の報告がなされた。佐渡・花めぐりマップは、佐渡の花の魅力と花の地域づくり活動を紹介するものである。

「離島漁業振興（漁業）」では、高齢化の問題や経営の安定について話し合わせ、東北公益文科大学の学生が、とび魚だしのプロジェクトに関わっていることから若者の意識の高

まりなどの報告もされた。

「観光・定住」では、とびしま未来協議会の立ち上がりにより、今年度から定住について考えることになった。また、観光客への昼食の提供や、観光客が団体から少人数グループに変わったなど、島と観光客と一緒にイベント通して触れ合い、リピーターを増やそうとの意見が出された。佐渡は、飛島と粟島とは違い比較的若者が多く大きな取り組みをしているが、飛島と粟島と同じ内容の中で、いかに観光客を増やすかということを考えていく必要があるとお互いの島の発展を願った。その後、恒例となった懇談会が開かれ、佐渡の伝統芸能も披露された。

2日目は、町並み保存地区である宿根木の町並みと佐渡国小木民族博物館（千石船「白山丸」展示館）の見学、宿根木海岸の視察が行われた。昼食後は「海ゴミ・サイエンスカフェ in 佐渡」が開かれ、講演を通して深刻化する海洋ゴミ問題への意識を高めるなど、2日間がとても充実しており、内容の濃い交流会となった。



写真 68、写真 69 大佐渡石名天然杉の見学（2011年、筆者撮影）

写真 70 交流会開会式（2011年、筆者撮影）

写真 71 第1分科会：花と自然・環境保全（2011年、筆者撮影）



写真 72 第2分科会：離島漁業振興（漁業）（2011年、写真提供・呉）

写真 73 第3分科会：観光・定住（2011年、写真提供・呉）

写真 74、写真 75 町並み保存地区である宿根木の町並み見学（2011年、筆者撮影）

写真 76 佐渡国小木民族博物館（千石船「白山丸」展示館）の見学（2011年、筆者撮影）

写真 77 宿根木海岸の視察（2011年、筆者撮影）

5年間の三島交流会を振り返り紹介したが、2012年秋には、粟島で第6回三島交流会が開催されることが決まっている。今後の三島交流会に、また新たな期待が生まれた。

4-4 今後の三島交流会への期待と課題

5年間連続で三島交流会が開かれていることから、今後も三島の交流が続いていくだろ

う。そこで、私が今後の三島交流会に期待するものは以下の3つである。

- (1) 三島の個性を十分に生かした交流。それぞれの島の熱い思いを交流の中にこれまで以上に含め、継続的に活発な活動をする。
- (2) 島民、参加者みんなが島での生きがいを語れること。また、若者へ向けてのメッセージ発信。
- (3) 三島の島民同士のみならず、他島との相互理解と連携を高め、島の未来を考える。

この3つを今後の期待と課題として取り組んでもらいたい。

(1)「三島の個性を十分に生かした交流。それぞれの島の熱い思いを交流の中にこれまで以上に含め、継続的に活発な活動をする。」は、お互いの島づくりに刺激を与え合うためにはなくてはならないものだ。それぞれの島の個性を十分に生かし交流していくことが求められる。また、5年間続いた交流会を継続的に行うことが島の未来を考えるきっかけにもなるだろう。

(2)「島民、参加者みんなが島での生きがいを語れること。また、若者へ向けてのメッセージ発信。」は、これから島の未来を考えるにあたって、島民、参加者自らが島での生きがいを語れることが重要だ。また、島の将来を担う後継者をつくるにあたって、若者へのメッセージを発信していく必要がある。

(3)「三島の島民同士のみならず、他島との相互理解と連携を高め、島の未来を考える。」は、(2)と同様に、島の未来を考えるにあたって、今後は三島だけではなく、他島との積極的な交流の場を設け考えていくことが重要だ。年に1回、国土交通省・財団法人 日本離島センターを主催とした、全国の島々が集まる祭典「アイランダー」が東京・池袋で開かれているが、このような盛大なイベントを通して、他島の美しい自然や独自の歴史・文化に触れ、学んでいく必要がある。

島のこれからを考えていくには、島の住民や行政、ボランティアだけではなく、島全体で、そして、日本の抱える問題の1つとして考えていかなければならない。

第5章 結論—トビシマカンゾウから学ぶ人と自然の「共生」「豊かさ」とは

第1章と第2章、第3章、第4章から、自然というものは、人と自然が「共生」し合い、お互いの生活になくなくてはならないものであるということがわかる。人と自然とが共に生きる社会は、飛島だけではなく、社会全体として言えるが、トビシマカンゾウを含めたさまざまな生態系と人々の関わりが薄くなっているのではないか。

このように考えたのは、インターネットやゲームが普及し、子どもや若者を中心に外で遊ぶ機会が少なくなっているのが現状にあるからだ。

第1章で述べたように、トビシマカンゾウは酒田市の市の花であるが、知らないという人が多い。私たちの生活の中で実際に目に触れるトビシマカンゾウの数は少ないと調べてわかった。酒田市の広報に多く使用されているが、インターネットの普及により、新聞や広報を読む人が減ったことが問題であると考えられる。広報にしても、隅のほうに小さくしか使用されておらず、人の目に触れる範囲が小さいと言える。

今後の課題として、トビシマカンゾウの保全を進めていくにあたって、市民の認知度を高めていくことも必要なのではないだろうか。広報が目立つ場所に、美しく綺麗なトビシマカンゾウを使用することで、人々にとって今まで以上に身近な花になる。しかし、第3章で述べたように、認知度が高まることで島に花を見に訪れた人が、それを切って持って帰ってしまうことが予想される。そこで考えたのは、酒田市の小・中学校の自然学習の一環としてトビシマカンゾウの保全を取り入れてみてはどうだろうか。飛島でも行っているように、プランターに植え、保全活動をしているということを学ぶと共に人々に知ってもらうことができる。飛島の花を島外に持ち出してしまうことになるが、一般家庭で植えるのではなく、小・中学校の学習を通して、トビシマカンゾウから保全のあり方を学ぶ点は多いように感じる。私も大学生活の中で学んだように、今の子どもたちには、もっと早く自然の大切さ、そして、人と自然が「共生」し合っているということに気付いてもらいたい。そして、酒田と飛島の相互理解を深めるためにも、今後、飛島の少子高齢化といった問題を考えていくことは大切であると考えられる。現在、酒田市の小・中学校や高校では、森林ボランティアが一般的にあげられるが、自分が生まれ育った、そして、これから大人になり社会で働く一員になるにあたって、酒田市の花であるトビシマカンゾウをより身近に感じてほしい。

第2章のトビシマカンゾウの利用からわかるように、飛島の暮らしの中では身近な存在だ。旅館や民宿の料理やラーメンに色どりを与える食材の1つとして、トビシマカンゾウが使われていることや、飛島の暮らしの中で祭りの飾りとして使われ、昔はわらじにしていたことから飛島の食生活や文化が見えてくる。また、トビシマカンゾウが咲きはじめるのとトビウオがやってくる合図だということも、若者に伝えていく必要がある。後継者が少なくなっている飛島の漁業のこれからを考える1つのきっかけになるだろう。昔の伝統文化を伝えていく中でも、飛島の暮らしは重要なものとなる。

また、現在では「花」という存在そのものが見直され、価値があるものとなっている。昔は、オオイタドリやカヤ、アシを燃料や佐渡牛を育てるための飼料として刈っていたため、自生環境は日々の暮らしの中で守られていたが、現在は、花の観光として観光客が「花を」見に訪れる。このようなことから、「花」が注目されてきていることがわかる。トビシマカンゾウも1つの花としてこの地球上に存在しているのだ。「花」としての存在価値が今、私たちの暮らしの中でかけがえのないものとなっている。

花や自然を保全することの意味は、1人の人間がこの地球上で存在し生きているのと同じことだ。私たち人間が生きていく中で「衣・食・住」を求めるように、トビシマカンゾウも私たちと同じように「衣・食・住」を求めていると思う。

「衣」は着るものとして、美しく咲くこと。

「食」は食べ物として、水や肥料から栄養を蓄えること。

「住」は住まいとして、花が咲く土地や環境（気候）を選ぶこと。

このように、花や自然も、自分を美しく着飾って咲かせ、水や肥料で栄養を蓄え、自分が咲きたいと思う土地や環境（気候）を選んで咲いている。

トビシマカンゾウが飛島と佐渡にしか自生しないのは、トビシマカンゾウ自らがこの土地や環境（気候）を好んでいるからである。1つの花としてこの地球上に存在していることは、私たち人間と「共生」しているということだ。そして、1つの花がいくつも集まれば、花と花との繋がりができる。その繋がりは、第4章で述べた、三島交流会での人と人との繋がりのように大きなものとなる。

酒田市の市の花「トビシマカンゾウ」をはじめとする、市の木「ケヤキ」、市の鳥「イスワシ」を知ってこそが、酒田市の暮らし1人の人間として、また1つ上をいく大事な存在

になると感じる。これらが酒田市だけではなく、市外にも伝えていくためにあるのが、三島交流会のような、自然資源を活かした島づくりの相互の学び合いである。島内外での積極的な交流の場を設けることや自然資源に対する意識を高め、それに伴った行動をとることが、人と人をつなぎ「豊かな」暮らしをつくるのではないだろうか。



写真 78 第5回三島交流会集合写真—人と人の繋がりに— (2011年、写真提供・興)

おわりに

今回、「トビシマカンゾウ」という花の利用と保全、そして、花の交流から生まれた島づくりに焦点をあて、研究・執筆にあたったが、大学生生活4年間の活動でトビシマカンゾウや飛島の知識だけではなく、人と人とのコミュニケーションも身についたように思う。以前は、初対面の人と話すことが得意ではなかったが、飛島での活動で人と話す機会が増え、自然と笑顔になり、飛島の良さを分かち合えるようになった。

トビシマカンゾウは私が生まれ育った山形県酒田市の市の花であることから、飛島での活動を通して、自然環境を保全することや自然資源を活用するというところに、より一層思いが強くなった。特に、私が4年間の活動で印象に残っているのが「三島交流会」である。3年生の秋(2010年)に初めて三島交流会(飛島)に参加したが、トビシマカンゾウ保全をはじめ、佐渡と粟島の方々とお互いの島の良いところや問題点を直接、顔を合わせて話すことができた。この2日間は私にとってとても充実しており、また次の年も佐渡と粟島の方々に会うという目標をこのとき立てた。勿論、翌年(2011年)の佐渡での三島交流会に私は参加した。このときの交流会で「去年も参加していた学生だよな?覚えてるよ。」「本当ですか?私も覚えています。嬉しいです。」という会話が今でも心に残っている。飛島に行ってみたい、活動してみたいという思いから活動してきたが、1回の交流で顔を覚えてもらったのは本当に心から嬉しかった。今この文章を執筆していて「参加してよかった」と改めて思うと共に、人の「温かさ」を感じる。また、それと同時に交流から生まれる島づくりの「豊かさ」を学んだ。トビシマカンゾウという1つの花が、人と自然の「共生」、そして、人と人との繋がり「豊かさ」を私に気付かせ、教えてくれた。三島交流会は、地域(島)・年代問わず参加できることが魅力である。また、お互いの島に刺激を与え、相互理解を深めるためにもとてもよい交流の場、方法である。私の中では、これから先も毎年続けてほしい活動ナンバー1である。

そして、食べ物としてのトビシマカンゾウの利用について食という視点から考え研究したとき、私は飛島に足を運ぶまではトビシマカンゾウを食べられることを知らなかった。トビシマカンゾウは食事に色どりを与えてくれる力を持っている魔法のような花である。旅館や民宿の料理やラーメンに添えられているのを初めて目にしたときとても驚いたが、食べてみるとシャキシャキしていておいしかった。また、飛島でのインタビューを通して、祭りの飾りとして使っているということや、昔はわらじにしたという話を聞いて、飛島の暮らしや文化にも触れることができた。このように、トビシマカンゾウから飛島の暮らし

を再確認することができる。そこがトビシマカンゾウの魅力であり、島民にとっても、島に訪れた人にとっても、そして、酒田市の花として特別な存在になっているのではないだろうか。

トビシマカンゾウを保全することの意義や、食生活という視点の中で気付かされる飛島の暮らしから、私たち人間が今後トビシマカンゾウとどう向き合っていけば良いのか、そして、酒田市で暮らす人々にとって、トビシマカンゾウという花はどのような存在であるのか少しでも考えてもらえればと思う。トビシマカンゾウの保全や三島交流会をはじめとする活動を通して、飛島が今まで以上に、人々に愛される島、愛する島 = 愛 (アイ) ランドに発展していくことを願い、この論文の終わりの言葉としたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、さまざまな方よりご指導、ご協力を頂いた。お忙しい中にも関わらず、温かく迎えインタビューに協力して下さった、とびしま総合センターの佐藤環氏、中央旅館の本間むつ子氏をはじめ、飛島の島民の皆様、佐渡市海府地区観光協会の北澤博満会長など、お世話になった方々に、この場をお借りしてお礼申し上げる。

飛島の活動では、私の中学時代の恩師である、現在酒田市立飛島小学校の船越誠校長と再会し、懐かしい思い出を語りながら、飛島のこれからや今後の自分の将来について意見を交わすことができたことに、感謝を申し上げたい。

特に、1年生の公益自由研究の頃から多くのアドバイス、ご指導をして下さった呉尚浩准教授には、格別の感謝を申し上げます。また、呉研究室に所属する学生や昨年大学院を卒業し、現在も研究室に出向いてくださるNPO パートナースhipオフィスの林久美子氏、そして、一昨年大学院を卒業した柴田大輔氏にも感謝を申し上げたい。

最後に、大学4年間の苦楽を共にし、島の夢と未来を語る同志として、皆様との出会いに心から感謝の意を表す。

参考・引用文献

- ・今石みぎわ (2010) 「飛島における林野利用と自然環境—燃料採集を中心に」『東北芸術工科大学東北文科研究センター 研究紀要』9
- ・粕谷昭二 (2010) 『日本海の孤島 飛島』東北出版企画
- ・加茂みづ恵 (2011) 「イタドリから考える『自然との共生』—環境倫理学における『内在的価値』と『道具的価値』の視点から—」
- ・金田一京助 (2000) 『新明解国語辞典 第五版』三省堂
- ・漁協女性部、酒田市とびしま総合センター、東北公益文科大学 (2009) 『四季の料理 飛島に伝わる郷土料理Ⅱ 保存版』飛島地区漁業集落
- ・古関良行 (2002) 『飛島ゆらゆら一人旅』無明舎出版
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、古関久恵、林久美子、柴田大輔 (2008) 「社会環境調査編」『平成19年度離島振興推進調査(受託研究) 報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、庄内総合支庁総務企画部企画振興課
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、古関久恵、林久美子、柴田大輔 (2009a) 「内発的地域づくりにおける「公益的な民の力」の果たす役割～山形県酒田市飛島に事例を中心に～」『大会予稿集』(日本公益学会) pp. 44-47
- ・呉尚浩、林久美子、柴田大輔 (2009b) 「離島における内発的地域づくりと「交流の力」～佐渡・粟島・飛島の三島交流会を事例として～」『大会予稿集』(日本公益学会) pp. 48-49
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、古関久恵、林久美子、柴田大輔 (2009c) 『とびしま未来プロジェクト 2008 報告書』(平成20年度大学まちづくり地域政策形成事業報告書) 酒田市
- ・呉尚浩 (2009d) 『「ごみ」の交流から「花」の島づくりへ(前篇)』『季刊 しま No. 218 Vol. 55-1』財団法人日本離島センター, pp. 76-85
- ・呉尚浩 (2009e) 『「ごみ」の交流から「花」の島づくりへ(後篇)』『季刊 しま No. 219 Vol. 55-2』財団法人日本離島センター, pp. 72-85
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、古関久恵、林久美子、柴田大輔 (2010) 『とびしま未来プロジェクト 2009 報告書』(平成21年度大学まちづくり地域政策形成事業報告書) 酒田市
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、古関久恵、林久美子 (2011) 『とびしま未来プロジェクト 2010 報告書』(平成22年度大学まちづくり地域政策形成事業報告書) 酒田市
- ・柴田大輔 (2009) 「離島の地域づくりにおける『公益的な民の力』の果たす役割について～山形県飛島と新潟県粟島の事例研究から～」『2009年度(平成21年度) 修士論文東北

公益文科大学大学院公益学研究科』

- ・鈴木睦任 (2006) 『写真集 とびしま～いまも心に残る 美しい自然と 人々の暮らし～』寒江書房
- ・土門尚三 (1999) 『山形県 北庄内の植物誌』有限会社雅製本
- ・本間又右衛門 (1983) 『飛鳥 あの日 35 話』本の会
- ・本間又右衛門 (1985) 『飛鳥うつりかわる人と自然』本の会
- ・本間又右衛門 (1987) 『飛鳥 伝承ばなし』本の会
- ・山形県立博物館 (2004) 『特別展 飛鳥－自然と文化の宝箱－』寒河江印刷株式会社
- ・酒田市 (2010a) 『酒田観光ガイドブック さかたさんぽ』酒田市役所 (パンフレット)
- ・酒田市 (2010b) 『私の街さかた (酒田市広報) No. 129』酒田市役所 (広報)
- ・酒田市役所市財政課 (2010) 『平成 22 年度酒田市予算概要』酒田市役所市財政課 (冊子)
- ・酒田市役所酒田市企画調整部企画調整課 (2008) 『酒田市未来航路図 (酒田市総合計画 2008→2017【ダイジェスト版】)』酒田市役所酒田市企画調整部企画調整課 (冊子)
- ・酒田市 (2008) 『平成 20 年 市民便利帳さかた手帳【保存版】』(株) 平野新聞舗 (冊子)
- ・山形県酒田市 (2010) 『飛鳥ガイドブック (日本海の不思議アイランド 飛鳥)』酒田市 (パンフレット)
- ・とびしま未来プロジェクト (2011) 『とびしま未来プロジェクト』東北公益文科大学 (資料)
- ・酒田市立図書館『酒田市立図書館貸出カード』酒田市立図書館 (貸出カード)
- ・“GKZ 植物事典・トビシマカンゾウ (飛鳥甘草)”, GKZ 植物事典 (2011. 12. 25 取得)
<http://www.t-webcity.com/~plantdan/souhon/syousai/ta-gyou/to/tobisimakannzou/tobisimakannzou.html>
- ・酒田市, 酒田市ホームページ, 2011 更新 (2011. 11. 2 取得)
<http://www.city.sakata.lg.jp/>
- ・(社) 酒田観光物産協会, “飛鳥情報 飛鳥の自然/花/鳥”, 酒田観光ガイド - 酒田観光物産協会, 2011 更新 (2011. 11. 2 取得)
<http://www.sakata-kankou.gr.jp/>
- ・新潟県 佐渡地域振興局 企画振興部 地域振興課, “新潟県:【佐渡】息をのむほどの絶景と美しいカンゾウの花との競演はまさに圧巻です!”, 2009. 6. 3 更新 (2012. 1. 5 取得)
http://www.pref.niigata.lg.jp/sado_kikaku/1236628894140.html

- ・佐渡市役所, “高校生がトビシマカンゾウ植栽”, 2008年4~6月のフォトニュース [佐渡市ホームページ], 2008.6.8更新 (2012.1.5取得)
<http://www.city.sado.niigata.jp/info/pnews/index/200804.shtml>
- ・佐渡市 観光課 観光振興係, “大野亀のトビシマカンゾウ”, 新潟県公式観光情報サイトにいがた観光ナビ, 2011.4.27更新 (2011.11.2取得)
<http://www.niigata-kankou.or.jp/sado/kanko/institution/5815.html>
- ・(社)佐渡観光協会, “佐渡カンゾウまつり”, 新潟県公式観光情報サイトにいがた観光ナビ, 2011.4.27更新 (2011.11.2取得)
<http://www.niigata-kankou.or.jp/sado/kyoukai/event/5958.html>

トビシマカンゾウの利用と保全

— 交流から生まれる島づくりと豊かな未来をめざして —

東北公益文科大学 公益学部 公益学科
C1080611 毛屋 有貴

はじめに

大学の講義や公益自由研究・ゼミの活動を通して、人と自然との繋がり共に生きる社会「共生」を学んで、飛島の生態系と人々の暮らしに興味を持った。

1年生の公益自由研究で1度飛島に足を運ぶ。
⇒飛島の方々の温かさ、そして自然の美しさに魅了され、飛島が大好きになった。

私が生まれ育った山形県酒田市の市の花である
「トビシマカンゾウ」と飛島で出会う！

トビシマカンゾウとは



植物学上では？

「トビシマカンゾウ」とは、山形県酒田市の市の花。

和名	トビシマカンゾウ
漢字表記	飛島甘草(萱草)
語源	和名は、山形県の飛島に群落が見られたことから。 属名は、ギリシャ語のhemela(=1日)とcallos(=美)の合成語で、1日花であることを示している。 種小名は、ロシアの植物学者ミッテンドルフの名に因んでいる。 変種名は、「非常に丈の高い」の意。
学名	<i>Hemerocallis middendorffii</i> var. <i>exaltata</i>
植物分類	ユリ科ワスレグサ属
園芸分類	多年草
開花時期	5月下旬~7月

花茎	1～1.5m
葉長	60～90cm程度
花色	鮮黄色
用途	野草／食用(花、根)
原産地	日本(山形県飛島・新潟県佐渡島)
花言葉	仲間はずれ(カンゾウ:順応性、物忘れ)
県花・国花	山形県:酒田市花
その他	海岸近くに自生するニッコウキスゲの変種

「トビシマカンゾウ」について

みなさんに簡単にわかって頂いたところで・・・

飛島のトビシマカンゾウ I

- ・飛島の勝浦地区、柏木山南斜面はトビシマカンゾウの自生地であり、市指定天然記念物になっている。
- ・飛島では、トビシマカンゾウのことを「カンゾウ」と呼ぶ。
- ・西海岸の荒崎では、斜面が一面オレンジ色になるほどのトビシマカンゾウを咲かせる。



飛島のトビシマカンゾウⅡ

- ・島民の人口減少に伴って下草刈りが行き届かなくなり、自生環境が荒れてきている。
- ・島では昭和40年代まで、成長が早いオオイタドリを燃料用(かまど・風呂)に刈り取っていた。
⇒トビシマカンゾウの自生環境は日々の暮らしの中で知らず知らずのうちに守られていた。



ガスや灯油の普及などに伴う生活様式の変化により、トビシマカンゾウが自生する環境の荒廃につながる。

佐渡のトビシマカンゾウ

- ・新潟県佐渡市海府地区には広さ約9ヘクタールという大群生地がある。
- ・佐渡市の市の花は「カンゾウ」であり、海府地区に咲くトビシマカンゾウは島では大事な宝・財産となっている。
- ・佐渡では、海辺のトビシマカンゾウのことを「ユーラメ」「ヨーラメ」と呼ぶ。この呼び方は、アイヌ語からきており、魚(ユー)孕む(ハラミ)花(バナ)の意味を持つ。
- ・毎年6月の第2日曜日に開く「佐渡カンゾウ祭り」は観光客誘致に貢献している。



私たちの身近にある トビシマカンゾウ

- ・酒田市ホームページ
- ・酒田観光ガイドブック さかたさんぽ
- ・私の街さかた(酒田市広報)
- ・酒田市予算概要
- ・酒田市未来航路図(酒田市総合計画2008—2017
【ダイジェスト版】)
- ・市民便利帳さかた手帳【保存版】
- ・飛島ガイドブック(日本海の不思議アイランド 飛島)
- ・酒田市立図書館貸出カード
- ・第4回三島交流会(飛島)ネームプレート



写真というかたち使われ、私たちの目に触れている。

トビシマカンゾウの利用 ーインタビューよりー

13

暮らしの中でのトビシマカンゾウ ー食と生活の中からー I

- ・トビシマカンゾウは観賞するだけの花ではない。
- ・飛島では、「カンソウ」という呼び方で、島民に**食生活の中**でも親しまれている。
- ・カンソウの花は主に旅館や民宿で料理として出している。
- ・昔は冷蔵庫がなかったため、摘んだ花は**保存食**として塩漬けやゆでて干すのが一般的である。

例えば・・・

14

主な料理

カンソウの酢の物



ラーメン



ある食堂で観光用として開発された

暮らしの中でのトビシマカンゾウ 一食と生活の中からⅡ

- ・調理方法は、酢の物、けんちん(油で炒める)、みそ汁(生で添える)、じゃがいもと酒粕と一緒に三平汁、ごまあえ(おひたし)、天ぷらなどで、根元の白い部分も昔は良く食べていた。
- ・カンソウが咲きはじめるとトビウオがくる。
⇒トビウオが産卵にくるといことは、トビウオが多くやってくるという合図。
- ・中村地区では、花びらは祭りにつかう。
⇒中村地区の祭りでの利用は、エゴ草を三角(鳥海山)にして、カンソウが太陽を意味する。

16

暮らしの中でのトビシマカンゾウ —食と生活の中から—Ⅲ

- ・食用としてカンゾウの花を摘む様子は、江戸時代の絵にも「トビシマカンゾウ採り」「トビシマカンゾウ漬ける」の図として描かれている。
- ・その他、昔は、葉っぱは枯れたらわらじにした。

17

江戸時代の絵の図

トビシマカンゾウ採り



トビシマカンゾウ漬ける



出典：(山形県立博物館、2004、p.31)

18

カンゾウの酢の物レシピ

「カンゾウの酢の物」(夏・通年)

材料

塩漬けカンゾウ …… 40～50g

酢 …… 適宜

砂糖 …… 適宜

塩 …… 少々



作り方

①カンゾウは、しなやかにするために塩水に漬けてから料理します。

②三杯酢にカンゾウを浸します。

③酢の物は各家庭の味がありますので、お好みの味付けで出来上がりです。

※カンゾウの花は、自家栽培したものを使います。

一寸のひとこと

長く保存する場合は塩蔵、または冷凍します。酢の作用で鮮やかなオレンジ色になります。モズクやきゅうりの酢の物に添えてもきれいな一品ができあがります。

(産協女性部ほか、2009、p.36)

トビシマカンゾウの保全

飛島の保全事例Ⅰ

「トビシマカンゾウを残していきたい」という島民からの発案で、島民有志と公益大・飛島ふあんくらの取り組みとして、トビシマカンゾウ自生地における草刈活動が2005年からはじまった。



2007年の三島交流会をきっかけに

現在では、漁協女性部や小学校とも連携して、荒崎の草刈活動、苗の栽培、プランターによる定植活動などが行われ、島の内発的地域づくりの象徴的活動となっている。

21

飛島の保全事例Ⅱ

「トビシマカンゾウは本当にこのままで良いのだろうか…？」

「どうにか私たちの手で守っていけないだろうか？」

「トビシマカンゾウを残していきたい」

何気ない島でのお茶飲み話から、2005年にトビシマカンゾウの保全がはじまった。



2005年秋、トビシマカンゾウの保全がスタート！！



22





飛島の保全事例Ⅲ

トビシマカンゾウを保全するにあたって、飛鳥小学校前の花壇にある、品種改良されたトビシマカンゾウを全て除去するようにと、山形大学農学部の林田光祐氏より指摘を受けた。



トビシマカンゾウの持っている特有な遺伝子が自然交雑のため、それが拡がれば**純粋なトビシマカンゾウ**がなくなってしまう**おそれがある**という問題。

<品種改良されたトビシマカンゾウ>

「ニグロッティ」「ガバレロ」「ミカド」「ミセスウインマン」



佐渡の保全事例Ⅰ

佐渡の北部の海府地区に位置する大野亀台地には、日本一のトビシマカンゾウの大群落がある。

以前この地は、佐渡牛を育てるための飼料としてのカヤ刈りによって、開花が促進され、その数は100万株とも言われていた。



牛の飼育がこの地区でなくなり、カヤ刈りをしなくなったためにカンゾウは衰退の一途をたどった。

29

佐渡の保全事例Ⅱ

- ・海府地区では、平成8年(1996年)から試験的に種から苗に300本育て、保全活動をはじめた。
- ・昔は、大野亀周辺に自生し70万株を数えたが、一時は30万株まで減少する危機に直面した。
- ・平成9年(1997年)には、地元の区長会と海府観光協会が中心となり、本格的に保全をはじめ、ここ数年は、毎年、地元の小中学生、一般ボランティア、佐渡市、佐渡・花の島プロジェクトなど、多くの方が携わって、カンゾウの苗を植えたり雑草を刈り取ったりする作業を積極的に行っている。

30

佐渡の保全事例Ⅲ

- ・新潟県立佐渡総合高等学校では、平成12年(2000年)から希少植物の増殖や植栽など環境保全に取り組んでおり、平成19年(2007年)に**第12回新潟県環境賞**を受賞。
- ・毎年6月の第2日曜日に「佐渡カンゾウ祭り」が開かれ、一面の満開のカンゾウを背景に**地元住民による鬼太鼓や海府太鼓、佐渡民謡**などが披露される。
 - ⇒**34年前**の昭和53年(1978年)に地域を繋げる祭りとしてはじまった。
 - ⇒海府観光協会が中心となり、**地元の団体、事務所、地区の住民**などの地域全体の協力で開催。

佐渡カンゾウ祭りⅠ

- ・佐渡カンゾウ祭りの**観覧は無料**で、今では島を代表する祭りとして観光客で賑わい、20日間の開花期間中に**3万5千~4万人**もの観光客が花を見に訪れる。
- ・佐渡市の年間観光客数は平成13年(2001年)の**130万人**のピークで現在では**60万人**に減少している。
 - ⇒観光客は減り続ける中で祭りの2日間だけでも**1万人**。
 - ⇒特に県内・県外共に**団体や個人、高齢者**が多い。

佐渡カンゾウ祭りⅡ

- ・祭りの1週間前は、「ウィークデー」としてチラシを配ったり、ライトアップを行っている。また、「大野亀」や「ニツ亀」は佐渡市の願という地区に位置するが、その「願」という地名から「願いが叶うように」という意味で、絵馬のサービスを行っている。

23

トビシマカンゾウ保全の課題Ⅰ

- ・トビシマカンゾウの保全が、飛島では8年目、佐渡では17年目に入る2012年2月現在、これからどのようなことに期待し活動を行っていくか。
- ・また、島内における少子高齢化といった問題を私たちはどう解決していかなければならないのかが今後の大きな課題となる。

島での少子高齢化が進む中で、

トビシマカンゾウを残し守っていくには、

私たちは今、何をしなければならぬのだろうか？

24

トビシマカンゾウ保全の課題Ⅱ ーインタビューよりー

・はじめに島の現状を理解した上で、行政やボランティアが島民のサポートとして入り、継続的に活動をしていくことが大切である。

2011年8月に筆者が飛島に行った際に島民にインタビューをしてみると、飛島の島民は以下のような【悩みや不安】を抱えていた。

34

トビシマカンゾウ保全の課題Ⅲ ーインタビューよりー

【悩み・不安】

- (1)今は保全活動にきてくれるが、保全活動があと何年続くだろうか。
- (2)もっと各地区にトビシマカンゾウを植えたいが、草刈りが大変なうえに、管理がなかなか難しい。
- (3)荒崎に咲くトビシマカンゾウを見に行きたいが、高齢により、足腰に自由がきかないため、行き来や歩くのが大変。

それに対して、以下のような【期待・希望】を抱えていることがわかった。

35

トビシマカンゾウ保全の課題Ⅳ ーインタビューよりー

【期待・希望】

- (1) 酒田市の花、三島交流会もトビシマカンゾウからはじまったから、なんとかそれをなくさないように歩道に植えたりしたい。
- (2) トビシマカンゾウを道路に植えたり、近くで見れる場所をつくっている。鉢植えをした場合は水やりもしている。
- (3) トビシマカンゾウが咲きはじめるとトビウオがやってくるので、毎年咲くのが楽しみ、待ち遠しい。
- (4) 若かったらやっぱり飛島の自然を守っていきたい。

”

トビシマカンゾウ保全の課題Ⅴ ーインタビューよりー

【悩み・不安】よりも【期待・希望】のほうが多い。



トビシマカンゾウの保全の【期待・希望】だけではなく、島のこれからの【期待・希望】ともいえる。



島民みんなが島の夢・未来を語り、
私たちもそれを願い活動している。

”

トビシマカンゾウ保全の課題VI ーインタビューよりー

- ・島内だけでは少子高齢化という問題から**限界があるため、島外の若者の意識を高め、保全するにあたっての後継者をつくっていくことが大切だと考える。**
⇒それを発信していくのが、現在、保全活動を行っている**島民・行政・ボランティア。**
- ・トビシマカンゾウという花を知り、認知度が高まったことで島に花を見に訪れた人が、それを切って持って帰ってしまうことが予想される。
⇒保全活動をしているということを人々に知ってもらい、**相互理解が大切である。**

21

トビシマカンゾウ保全の課題VII ーインタビューよりー

- ・トビシマカンゾウを**近くで見れるような場所づくり**をする必要があると考える。
⇒島民も観光客など人々の目に触れる場所に花を咲かせることで、トビシマカンゾウをより身近に感じることができる。
- ・**手軽に草刈りができる範囲**でトビシマカンゾウを増やしていくことが近道である。
- ・飛島にも**〇〇ロード**といったものをつくるのも1つの案。
⇒例:飛島海岸ロード

40

トビシマカンゾウ保全の課題Ⅷ ーインタビューよりー

<保全の課題や今後の活動を述べるにあたって述べておきたいこと>

現在、飛島では観光を目的としてではなく、**保全を目的に活動を行っている。**



将来的には、これらのトビシマカンゾウは、人の手を加えなくても自然と増えていくことを望んでいる。

11

花の交流から生まれる島づくり ー三島交流会からー

12

三島交流会とはⅠ

- ・佐渡と飛島の島民が「トビシマカンゾウのふるさと飛島と交流し共に保全活動をしたい」との願いからはじまった。
- ・平成19年(2007年)7月上旬に開催された「海ごみサミット・佐渡会議」を契機。



トビシマカンゾウをテーマ
とした交流会がスタート！！



11

三島交流会とはⅡ

- ・同年10月より、新潟県佐渡、粟島、そして、山形県飛島の島民の交流を目的とする三島交流会がはじまった。
- ・それぞれの島が持ちまわりで毎年1回開催している。
⇒07年・飛島、08年・佐渡、09年・粟島、10年・飛島、
11年・佐渡

11

三島交流会の目的と期待 I

- ・三島交流会の目的は、佐渡、粟島、飛島の北西日本海の離島における**自然資源を活かした島づくりの相互の学び合いと連携**にある。また、三島交流会は、以下の3つを期待しはじめた。

第一は、三島の住民同士がお互いの取り組みについて知り合い、交流することにより、それぞれの島づくりへの意欲を刺激することだ。そして、各島における島づくりの話し合いが内発的に活性化することが最も大切である。

第二に、三島を結ぶ形でのイベントの開催や航路・観光ルートの開発など、点から線としての取り組みが期待される。ぜひとも、本来の「海の道」の復活を目指したい。

第三に、特に飛島の場合は、三島交流会開催にあたっては、住民、行政、島の応援団などが協働で開催にあたるために、関係者間の連携が深まる効果も重要だ。

(呉、2009、pp.74-75)

43

三島交流会の目的と期待 II

- ・三島交流会をきっかけとして「花」をキーワードとした**地域活動**が進行し、それぞれの島で**保全活動**が活発化している。
- ・普段なかなか交流する機会のない隣接する島の島民同士が、共通の島の抱える問題やそれぞれの生活、島での活動などを語り合うことにより、お互いを励まし合いながら**問題解決方法**の糸口を探るきっかけとなる。
- ・三島交流会をきっかけとして、それぞれの島での**トビシマカンゾウ**などの植物の**保全活動**への**関心が高まり**、島内での自治活動にも組み込まれるようになった。

44

三島交流会の目的と期待Ⅲ

- ・この交流会の効果は年1回の開催にとどまらず、粟島においては2001年からはじまった**飛島クリーンアップ作戦に刺激を受け**、2008年から**粟島クリーンアップ作戦**を開始した。
⇒酒田・飛島側からも**実行委員**として協力をを行っている。
- ・佐渡の力屋観光汽船(株)による佐渡・粟島・飛島を結ぶ、**観光ツアー**一目的の**不定期航路**も就航している。

47

第4回三島交流会in飛島

- ・2010年10月18、19日に飛島で開催。



受付の様子



昼食の様子

48



自然保全

- ・トビシマカンゾウの保全
- ・粟島の離島を生かしたエコな生活について。



- ・クリーンアップ作戦
- ・竹林整備事業
- ・エコツアー
(オオミズナギドリ観察・穴釣り)
- ・野生馬復活の取組
- ・鉄炭団子作成による藻場の再生
(使い捨てカイロを再利用した鉄炭団子)



漁業

- ・地産地消や冷凍技術の応用。
- ・観光と漁業を組み合わせられないか。
- ・後継者がいないという問題。



51

観光

- ・佐渡⇒環境に優しい島づくり、民間と行政の協力、おもてなし、トビシマカンゾウの宣伝。
- ・粟島⇒体験民宿といって、民宿でタコ取りや農業などの体験ツアーや雨でも過ごせる場所づくり。
- ・飛島⇒高齢化でトビシマカンゾウの保全が島民だけでは限界があったり、民宿の後継者がいない。



52



今後の三島交流会への 期待と課題

＜私が今後の三島交流会に期待するもの＞

- (1) 三島の個性を十分に生かした交流。それぞれの島の熱い想いを交流の中にこれまで以上に含め、継続的に活発な活動をする。
- (2) 島民、参加者みんなが島での生きがいを語れること。また、島外の若者へ向けてのメッセージ発信。
- (3) 三島の島民同士のみならず、他島との相互理解と連携を高め、島の未来を考える。

53

結論—トビシマカンゾウから学ぶ人と自然の
「共生」「豊かさ」とは

54

トビシマカンゾウから学ぶ人と自然の「共生」「豊かさ」とはⅠ

- ・自然というものは、人と自然が「共生」し合い、お互いの生活になくてはならないものである。
- ・人と自然とが共に生きる社会は、飛島だけではなく、社会全体として言えるが、トビシマカンゾウを含めたさまざまな生態系と人々の関わりが薄くなっているのではないか。



インターネットやゲームが普及し、子どもや若者を中心に外で遊ぶ機会が少なくなっているのが現状にある。

トビシマカンゾウから学ぶ人と自然の「共生」「豊かさ」とはⅡ

- ・トビシマカンゾウは酒田市の市の花であるが、知らないという人が多く、私たちの生活の中で実際に目に触れるトビシマカンゾウの数は少ないと調べてわかった。
⇒市の広報の目立つところなどに、美しく綺麗なトビシマカンゾウを使用することで、人々にとって今まで以上に身近な花になる。
- ・酒田市の小・中学校の自然学習の一環としてトビシマカンゾウの保全を総合的に取り入れてみる。
- ・トビシマカンゾウの利用から、飛島の食生活や文化が見えてくる。
⇒昔の伝統文化を伝えていく中でも、飛島の暮らしは重要なものとなる。

トビシマカンゾウから学ぶ人と 自然の「共生」「豊かさ」とはⅢ

現在は、**花の観光**として観光客が「花」を見に訪れる。
⇒「花」が注目されてきていることがわかる。



「花」としての**存在価値**が今、私たちの暮らしの中でかけがえのないものとなっている。



花や自然を保全することの意味は、**1人の人間がこの地球上で存在し生きているのと同じことだ。**

58

トビシマカンゾウから学ぶ人と 自然の「共生」「豊かさ」とはⅣ

私たち人間が生きていく中で「**衣・食・住**」を求めるように、トビシマカンゾウも私たちと同じように「**衣・食・住**」を求めている。

「**衣**」は着るものとして、美しく咲くこと。

「**食**」は食べ物として、水や肥料から栄養を蓄えること。

「**住**」は住まいとして、花が咲く土地や環境(気候)を選ぶこと。



花や自然も、自分を美しく着飾って咲かせ、水や肥料で栄養を蓄え、自分が咲きたいと思う土地や環境(気候)を選んで咲いている。

59

トビシマカンゾウから学ぶ人と自然の「共生」「豊かさ」とはV

トビシマカンゾウが飛鳥と佐渡にしか自生しないのは、トビシマカンゾウ自らがこの土地や環境(気候)を好んでいるからである。
⇒1つの花としてこの地球上に存在していることは、私たち人間と「共生」している。



1つの花がいくつも集まれば、花と花との繋がりができる。



三島交流会での人と人との繋がりのように大きなものとなる。

トビシマカンゾウから学ぶ人と自然の「共生」「豊かさ」とはVI

酒田市の市の花「トビシマカンゾウ」をはじめとする、市の木「ケヤキ」、市の鳥「イヌワシ」を知ってこそが、酒田市で暮らす1人の人間として、また1つ上をいく大事な存在になる。

⇒これらが酒田市だけではなく、市外にも伝えていくためにあるのが、三島交流会のような、自然資源を活かした島づくりの相互の学び合いである。



島内外での積極的な交流の場を設けることや自然資源に対する意識を高め、それに伴った行動をとることが、人と人をつなぎ「豊かな」暮らしをつくるのではないだろうか。

おわりに

・大学生生活4年間の活動でトビシマカンゾウや飛島の知識だけではなく、人と人とのコミュニケーションも身についた。

⇒飛島での活動で人と話す機会が増え、自然と笑顔になり、飛島の良さを分かち合えるようになった。

・トビシマカンゾウという1つの花が、人と自然の「共生」、そして、人と人との繋がりの「豊かさ」を私に気付かせ、教えてくれた。

・三島交流会は、地域(島)・年代問わず参加できることが魅力である。

トビシマカンゾウを保全することの意義や、食生活という視点の中で気付かされる飛島の暮らしから、私たち人間が今後トビシマカンゾウとどう向き合っていけば良いのか、そして、酒田市で暮らす人々にとって、トビシマカンゾウという花はどのような存在であるのか少しでも考えてもらえればと思う。

第5回三島交流会より 一人と人との繋がりー



参考・引用文献Ⅰ

- ・今石みぎわ(2010)「飛島における林野利用と自然環境—燃料採集を中心に」『東北芸術工科大学東北文科研究センター 研究紀要』9
- ・粕谷昭二(2010)『日本海の孤島 飛島』東北出版企画
- ・漁協女性部、酒田市とびしま総合センター、東北公益文科大学(2009)『四季の料理 飛島に伝わる郷土料理Ⅱ 保存版』飛島地区漁業集落
- ・呉尚浩、澤邊みさ子、古間久恵、林久美子、柴田大輔(2008)「社会環境調査編」『平成19年度離島振興推進調査(受託研究) 報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、庄内総合支庁総務企画部企画振興課
- ・呉尚浩(2009d)『「ごみ」の交流から『花』の島づくりへ(前篇)』『季刊しま No.218 Vol55-1』財団法人日本離島センター、pp.76-85
- ・呉尚浩(2009e)『「ごみ」の交流から『花』の島づくりへ(後篇)』『季刊しま No.219 Vol55-2』財団法人日本離島センター、pp.72-85

45

参考・引用文献Ⅱ

- ・酒田市、酒田市ホームページ、2011更新(2011.11.2取得)
<http://www.city.sakata.lg.jp/>
- ・(社)酒田観光物産協会、“飛島情報 飛島の自然/花/鳥”、酒田市観光ガイド - 酒田観光物産協会、2011更新(2011.11.2取得)
<http://www.sakata-kankou.gr.jp/>
- ・新潟県 佐渡地域振興局 企画振興部 地域振興課、“新潟県：【佐渡】息をのむほどの絶景と美しいカンゾウの花との競演はまさに圧巻です！”、2009.6.3更新(2012.1.5取得)
http://www.pref.niigata.lg.jp/sado_kikaku/1236628894140.html
- ・佐渡市役所、“高校生がトビシマカンゾウ植栽”、2008年4～6月のフォトニュース[佐渡市ホームページ]、2008.6.8更新(2012.1.5取得)
<http://www.city.sado.niigata.jp/info/pnews/index/200804.shtml>

46

ご清聴ありがとうございました。

47